

労働運動史研究会編

# 労働運動史研究

(隔月刊) 年間予約購読料 二二〇〇円

わが国唯一の労働運動史専門誌

お申し込みは労働旬報社へ

世界労働運動の歴史 上

中林賢二郎著

# 世界労働運動の歴史

中林賢二郎著

上



労働旬報社

定価 360円

日本労働運動の歴史

都立大教授 塩田庄兵衛著 四五〇円

弾圧の歴史

都立大教授 塩田庄兵衛著 近刊



# 世界労働運動の歴史

中林賢二郎著

上





# 世界労働運動の歴史

---

中林賢二郎著

上



労働旬報社



## は し が き

この本の目的は、世界の労働者階級の運動がはじまってから現在にいたるまでの歴史を、ごく大づかみにたどってみることによって、それをつらぬいている一貫した流れをつかみとることにあります。

この数年来、わが国では労働運動史にたいする関心がいちじるしくたかまっています。それは運動の前進とそれにともなう支配層側の動きの変化につれて、運動が一つの歴史的転機にさしかかり、運動の一部には複雑な動きやある種の混迷さえもあらわれているということと、関連のあることだと思えます。

こうして、運動史をふりかえり、運動の発展方向をみきわめようということから、運動史への関心がたかまったとはいっても、しかし一方でこうした関心から出発した運動史の学習が、これまでのところ、ほとんど日本のそれにかぎられていたということも、事実です。たとえば、労働組合や地域の学習会で労働運動史が課目にとりあげられたとしても、世界の労働運動史が対象に

なることはごくまれで、大部分は日本労働運動史でした。

こうした状態は、これまでのところ当然のことであつたといえましょう。なんといつても、労働運動史そのものにたいする関心が労働運動の中にたかまつてきたのは、わが国ではこれがはじめてのことであつたといつてよく、したがつて、学習はまず日本の運動史から出発しなければならなかつたからです。しかし、労働史の学習がそこで学習がとまつてしまうとすれば、それでは不十分だと私は思います。そして、それだけでは、日本の労働運動史もけつして十分に理解できないと思います。というのは、日本の労働運動は、日本の労働者階級の自主的な運動であるとともに、それはまた世界の労働者階級運動の一構成部分であるからです。

労働者階級の世界的使命ということがよくいわれます。しかし、世界の労働者階級が現実にはたしつつかつあるこの使命を、歴史のうえにたどることもしないで、それをほんとうに自覚したなどといえるものでしょうか。

私たちは、日本の運動もまたその一部分であるこの世界労働者階級運動の歴史を、全体としてとらえて、その中に流れている一般的な發展法則をつかみとることが大切ですし、またあらゆる国ぐにの労働者が、からだをはり、いのちをかけて前進させてきた運動の、貴重な経験——失敗と成功のさまざまなかげがえのない経験のなかから、できるかぎり多くのことを学びとることが大切です。そして日本の運動の経験やそこからみちびきだされた運動發展の諸法則も、世界の労働者階級の経験と照らしあはせ、その意義を深く理解することが、われわれの使命である。



働運動全体の歴史とつきあわせることによって、より明確に、しかも具体的に理解することができるのです。

もちろん、こうした目的をかなえてくれる著書が、これまでなかったわけではありません。たとえばウィリアム・Z・フォスターの「世界労働組合運動史」や「国際社会主義運動史」はそうした目的にそう、すぐれた本です。しかし、これらの本はかなり大部なうえに、なんといつてもアメリカの読者むけに書かれているので、はじめてそうしたものを学ぼうとする人にとっては、けっして読みいいものとはいえませんでした。そこで、私は日本のわれわれの関心のうえにたつて、できるだけ簡略に、わかりやすく世界労働運動の歴史を書いてみようと考えました。そして筆をとった結果がこの本です。

叙述のしかたは、歴史の各時期に先進的・中心的な役割をはたした国の運動についていくらかくわしくのべ、あとは思いきった省略をくわえるという方法をとりました。短い叙述のなかで全体の流れを浮きぼりにするため、各国史についての叙述の一貫性を思いきって犠牲にしたわけです。こうした試みをふくめて、叙述の方法についてはさまざまの御批判があるうかと考えます。読者の皆さんの御教示をまっけて、今後改善につとめるつもりです。

なお、この本をまとめるにあたって、たくさんの方から有形無形の援助をいただきました。とくに労働旬報社の編集部の方々は、この本を書くことをすすめて下さっただけでなく、まとめ

方についての細部にわたって懇切な助言をして下さいました。この本がいくらかでも読みやすいものになっていたとすれば、それはその援助によるものです。ここに厚くお礼を申しのべます。

一九六五年七月一日

中 林 賢 二 郎

## 第一章 労働組合運動の発生と発展

労働組合運動の芽 13

組織をつくるきっかけ——話し合い 16

産業革命と労働組合運動の確立 19

弾圧下のたたかいと団結権の獲得 25

フランス・ドイツなどの労働運動と団結権 29

## 第二章 労働者階級独自の政治行動の発展

経済闘争から政治闘争へ 35

一八三二年のイギリスの選挙法改正 37

全国労働組合大連合への結集——労働組合による社会変革の試み 40

チャーチスト運動 43

ヨーロッパ諸国の運動 49

一八四八〜四九年の革命とプロレタリアートの歴史の舞台への登場 53

自由と民主主義の旗をかかげた労働者階級 57

### 第三章 労働者階級の思想の確立と

#### 第一インタナショナル

空想的社会主義——その本質と役割 65

科学的社会主義の成立 70

マルクス・エンゲルスの実践活動と理論の展開 75

第一インタナショナルの創立 79

第一インタナショナルの活動と労働組合運動の原則 83

バクレーニン主義者の分派活動 87

パリ・コンミューン 89

第一インタナショナルの解散 94

## 第四章 第二インタナショナルの時代

一八七〇〜一九〇〇年代の労働運動の特徴 101

イギリスの労働組合主義 104

ビジネス・ユニオンイズム

アメリカの実務的組合主義 111

フランスのサンジカリズム 115

ドイツにおける社会主義政党の確立 119

ドイツ社会民主党の英雄時代 123

第二インタナショナルの創立 127

国際労働組合組織の発展 129

## 第五章 帝国主義と労働運動

——第二インタナショナルの崩壊と新しい型の党の創立

帝国主義の時代

139

右翼日和見主義の強化

141

日和見主義の基礎と労働貴族

145

修正主義と右派・中央派・左派

148

ロシアの労働運動の発展と新しい型の党

153

一九〇五年の第一次ロシア革命

157

第二インタナショナルの崩壊

164

## 第六章 第一次世界大戦と一〇月

### 社会主義革命

大戦の勃発とボルシェヴィキ党の活動

177

レーニンと社会主義革命の理論の発展 180

二月革命 183

十月革命 185

ドイツとハンガリーの革命 190

## 第七章 第一次大戦後の労働運動と

### 第三インタナショナルの創立

第三インタナショナルの創立 203

第二インタナショナルの復活とコミンテルンの強化 205

コミンテルン第三回大会と統一戦線政策 209

プロフィンテルンと国際労働組合連盟 212





第一章 労働組合運動の発生と発展



階級の発生は、

労働組合運動の芽

68  
8/20

労働者階級は、いま、労働者階級政党、労働組合、生活協同組合、その他の民主的団体など、さまざまの組織をもっています。こうした組織のなかでも、労働者が、資本家の搾取と横暴なやり方に反対して、自分たちの労働と生活の条件を改善するために、最初につくった労働者階級独自の組織は、労働組合でした。

したがって労働者がおこなう個人的な反抗や、自然発生的な暴動は別として、組織的な労働運動は、一般に、労働組合運動にはじまるといっていいのです。もともと、ロシアや中国のように、資本主義の発展がおそくはじまったために、労働運動の出発もおくれた国では、まず最初に、ロシア社会民主労働党や中国共産党のような労働者階級政党ができて、その指導で労働組合が組織されるようになりますが、労働運動の歴史を世界的にながめてみると、やはり、それは労働組合運動にはじまるといえるのです。

この労働組合組織の芽は、一七世紀のなかばにいちはやくブルジョア革命をおわって、世界中でももっとも早く資本主義が広はんに発展したイギリスでは、一七世紀の末頃に、もうあらわ

れています。

この組合組織の芽にあたるものをつくつたのは、まだ手工業的な仕事をしていた熟練職人たちで、おなじ職種の職人が地域的に結集し、その組織の規模は、数百人からせいぜい千数百名といったところで、組織の事務所は、ふつう酒場におかれていました。

さて、資本主義が発展するまえの封建社会では、手工業にたずさわる人びとは、ほとんどすべてが各種の同業組合（ギルド）に組織されてきました。ギルドの職場では、親方のもとにそれぞれ一定の数の——ふつうは数名でした——年季あがりの職人と徒弟がいました。ところで、このギルドの親方と職人、徒弟の關係はちよつと考えると、雇主と労働者のあいだの關係であるかのように受けとれますが、じつは、そうではありません。ギルド制度のもとでは、手工業にたずさわるものは誰でも、まず親方のもとに弟子入りし、徒弟期間をすませて一人まえの職人になり、さらに職人として何年も働いたのちに親方になったのであって、親方と職人と、徒弟はべつの階級に属していたのではなかったのです。しかもギルドは、製品の質、一日の労働時間、職人と徒弟の人数、その報酬などを、すべて規則と習慣にしたがって一定のものにきめており、それによつて徒弟や職人も保護されてきました。

しかし、資本主義が発展してくると、こうした關係がくずれてきました。新たに誕生した資本家は、ギルドの規制のきかない農村や都市の郊外で工業企業をおこし、労働者を安い賃金で使う

同  
26

だけでなく、労働時間をどんどんひきのばし、生産費を引下げて、ギルドにあつまった手工業者たちをおびやかしはじめました。ギルドの親方たちは同業者の数をへらすことで自分たちの利益をまもろうとして、親方の数を制限しました。そうなると、職人の誰もが親方になるわけにはいかなくなります。小さな親方は没落し、大きな親方は次第に産業資本家になり、職人と徒弟は、賃金労働者の地位におとされてしまいました——いわゆる、資本と労働の分離がおこったのです。まえにはギルド組織によって労働条件と生活をまもられていたギルドの熟練職人が、こうして賃金労働者にかえられ、労働条件についての保護も生涯をつうじての生活の保障もうしなくなってしまひ、低賃金と労働強化や長時間労働をおしつけられるようになります、彼らは、いぜんの職人の地位をとりもどそうとして、さっそく抵抗しはじめました。

職人たちは、はじめは個々ばらばらに、ついで集団的に親方に反抗し、またその不満が多数のものあいだにうつ積すると、ときには暴動をおこしました。しかしやがてその経験をつうじて、労働者たちは次のことに気がつくようになりました。それは、みんなが団結しないで、雇主のまえで、たがいに競争しあっていたのでは、こうした抵抗も効果をあげることではできないということ、また、個人的な反抗や、ときどきふきあがる集団的暴動では、犠牲ばかり大きく、そのわり

に効果はすくないということでした。

職場で誰かが雇主にむかって不満をのべているときに、他の仲間がそっぽをむいていたり、失

業した職人たちが、他の誰よりも安い賃金で働くから自分を雇ってくれと親方にたのみこんだり、職場で自分だけが親方によくおもわれようと思つて、仲間をだしぬいてはげしい労働をしたりする——こういったことでは、労働と生活の条件はますます悪くなるばかりだということを、経験をおしていやというほど思いしらされたので、これらの職人たちは、団結するための恒常的な組織を自分たちの手でつくりだしたのです。もちろん当時はまだ労働組合という言葉はありませんでした。この最初の組合組織の芽をつくつた職人たちは、これを**職業クラブ**と呼んでいました。今日いう労働組合（トレード・ユニオン）という言葉は、それからずつとあとになつてつくられたのです。

### 組織をつくるきっかけ——話し合い

組織をつくるきっかけになつたのは、一日の労働のつかれをいやすために、職人たちがよくおこなつた、一ぱいの黒ビールを飲むための会合、それから、雇主の不当なやり方を議会で訴えるための集り、また、炭坑の落磐事故などのような労働災害の犠牲になつた仲間の葬儀など——要するに、**働くもの**たちが多数あつまつて話しあい、自分たちの利害の共通性、雇主や親方にたい

④

「俺のうちでは、子供が病気なんだが、医者は高くつくからなあ」  
「俺の職場じゃ仕事の時間を一時間のばしたうえに、賃金をへらすといいやがる」  
こんな話し合いがしばらくつづくつくと、職人たちは、一つのことを思いつきました。みんなで給料の一部を毎週わずかづつだしあって、共同の貯金をし、助けあいをしよう、ということでした。そこで共同の貯金箱をつくり、酒場の主人にそれをあづけました。

③

する労働者たちの共同の利益を感じとることのできた、あらゆる機会です。なかでも、その例がいちばん多くみられたのは、この黒ビールを飲む会です。今日、われわれのあいだでも、仕事の帰りがけに職場の仲間をさそって、ビールを一ぱいひっかけたり、一ぱいのコーヒーをすすりながら、職場のなやみ、生活のなやみを話しあい、また賃金、労働条件についての要求のことを話しあって、団結の意識をかためるというようなことをよく経験しますが、この点、労働者のやることは、昔も今も、イギリスも日本も、ほとんど変わるところがありませんでした。

当時、朝早くから日が暮れるまで、一日一四時間から一五時間くらい働かされた職人たちは、酒場にあつまって、今日の疲れをいやし、明日の労働の力をたくわえました。そして黒ビールの酔いがまわるほどに気持もほぐれ、自分たちの生活のこと、職場のことを話題にのぼせました。

「おやじが死んだんだが、葬式もだせない」

「俺のうちでは、子供が病気なんだが、医者は高くつくからなあ」

「俺の職場じゃ仕事の時間を一時間のばしたうえに、賃金をへらすといいやがる」

こんな話し合いがしばらくつづくつくと、職人たちは、一つのことを思いつきました。みんなで給料の一部を毎週わずかづつだしあって、共同の貯金をし、助けあいをしよう、ということでした。そこで共同の貯金箱をつくり、酒場の主人にそれをあづけました。

ここまでくると、もう労働組合にいきつくには半歩の距離しかありません。すこしたつうちに、この人たちは、わずかな給料の一部をだしあつて相互扶助をおこなっているだけで、団結して雇主とたたかい賃金や労働条件を改善するのではありません。問題はほとんど解決しないということに気がつきました。そこで、共同の貯金箱を中心に酒場にあつまった職人たちは、災害、病氣、失業などに苦しむ仲間はこの組合基金から一定額を支給するだけではなくて、さらにどんな雇主のもとでも一定の賃金額や一定の労働条件以下では働かないということを、おたがいに誓いあい、自分たちの団結の力で雇主とたたかうことによつて、賃金や労働条件を改善する方向へと、その第一歩を大胆にふみだしたのです。

大胆に、というのは、当時、賃金や労働条件は、封建制度のもとでうちたてられた考え方にしたがつて、すべて国家や都市の当局がきめるものとされ、労働者が団結してその改善をくわだてることは、社会秩序にたいする謀反として、かたく禁止されていたからです。したがつて、こうしてできた労働組合は、もちろん非合法の組織でした。

雇主は、こうした組織をかぎつけると、裁判所にすぐに訴えてきました。官憲の弾圧で、組合は破壊されましたが、職人たちは屈しません。組合の数は時とともにふえていきました。組合員はたがいにまもりあうとともに、裏切者——自分たちが誓いあつた最低の賃金額や労働条件をわつて、仲間をだしぬいて働いている者にたいしては、きびしい態度をとりました。みんなでおしか



けて、そういう職人を職場からひきずりだしたり、ときには、みせしめにするために、繩をつけて街の中をひきづりまわすというようなこともしました。弾圧にたえながら組織をまもっていくためには、こうしたことも必要だったので。

### 産業革命と労働組合運動の確立

だが、こうして誕生した労働組合組織の芽が、手工業的職人から近代的な工場労働者へとうけつがれて、ほんものの労働組合組織へと発展したのは、一八世紀の六〇年代にはじまる産業革命の社会的、経済的結果が目に見えてきた、一八世紀末以後のことでした。

産業革命というのは、小規模な手工業が機械と動力を使用する大規模な機械制工業にとってかわられ、これが主要な生産の形態になること、およびそれによって資本主義が急速に発展し、社会が本格的な資本主義社会にうつっていくことによって、経済、社会、政治の各方面にわたってひきおこされる急激な変化全体のことです。それまでは、資本主義があるていど発展したとはいっても、工業は工場制手工業の段階にあり、生産は手労働を基礎にしていました。したがって資本主義は封建社会時代からひきつがれた経済生活を根本的に変革することはできませんでした。

機械制工業の發展によつて、社会ははじめて本格的な資本主義社会へと急激に変えられていったのです。こうした産業革命は、イギリスでは、一七六〇年頃からはじまり、一八三〇年頃までにい  
ちおう完了しました。

まず紡績業で一連の新型機械が採用されることによつて始まった産業革命は、ついで毛織物業におよび、さらに製鉄、石炭業を飛躍的に發展させ、ついには機械でつくる工作機械工業をあらたに登場させるところまで、いきつきます。しかもイギリスではこの期間に、工業の面でこうした大変化がおこつただけではありません。農業でも、資本主義の發展が急速にすすみ、農村の状態を一変させました。一六世紀くらい、イギリスでしだいに力をもちはじめた資本家は、土地を買い入れ、農民を追いだして、牧羊業をはじめていました。一八世紀から一九世紀にかけては、こんどは彼らは穀作経営そのものにのりだし、自作農を土地から一掃して、資本主義的大農場経営を開始しました。

こうして工・農業面におこつた変化が、いかに大きなものであつたかといふことは、このわずか六〇年間にイギリスが、小都市と、わずかの簡単な工業と、稀薄ながら多数の農業人口をもつ農業国から、二五〇万の住民をもつ首府と、巨大な工場都市と、全世界に供給し、かつ、最も複雑な機械をもつてほとんど一切のものを製造する工業と、人口の三分の二をしめる労働者階級とをもつ、工業国へと變つてしまつたといふことをみれば、はつきりするでしょう。

権力の

にない手

また、工業や農業にこのような急激な変化がおけると、とうぜん階級関係にも大きな変化が  
こりました。

それまで社会の支配権をもっていた金融、商業資本家ならびに地主的ブルジョアジーにかわつて、あらたに産業資本家が圧倒的な経済力をもつて抬頭してきて、国家の政策に大きな影響をあたえ、やがて国家権力を自分たちの手に完全に握るようになります。他方、工場制工業の発達で没落した手工業者や、土地を失った農民は、一部は農業労働者になりますが、大多数は都市に集中し、賃金労働者として工場制工業の中に流れこんで、近代労働者階級を形成することになります。社会は、この産業革命をつうじて、資本家階級と労働者階級という、あい対立する二大階級にはっきりとわかれていくのです。

ところで、はじめは手工業の熟練職人たちがつくりだした労働組合運動の芽が、産業革命の発展するなかで、ほんものの労働組合へとそだっていったと先にのべましたが、このことに関連してどうしても知っておかなければならないのは、この産業革命をつうじて、働くものがどんなに悲惨な状態につきおとされていったかということです。

機械制工業のもとで一時に多数の労働者を搾取することができるようになったのと、鉄道、汽船、道路、運河などの発展で市場が拡大されたことで、資本家の利潤追求欲は無限にふくれあがりました。しかも最新式の機械をどの企業よりもはやく、大規模に使用することによって、はじ

めてこの利潤を手にいれることができるのですから、資本家は、労働者を、人間がたえられる極限まで搾取をつよめることによって、こうした機械を導入するための資本を蓄え、他の資本との競争にうちかとうとしました。一方、当時の政府は、こうした資本家たちに安い労働を大量に供給するために、封建時代からこの時期までひきつがれてきた、貧民を救済するための法律をつぎつぎに撤廃し、没落した手工業者や土地を失った農民が、賃労働者として機械制工業に流れこんでいかないわけにはいかないようにしむけました。

のちに労働者階級がその団結の力でたかいていく、工場法やその他の労働保護法が、まだまったく存在しないときに、こうしたことがおこなわれたのです。資本家に雇われるいがいな生活のてだてを失った労働者たちは、いわば、身をまもる何ももたないで、資本家のむきだしの搾取をうけることになりました。

産業革命期からあらわれた機械制工業のもとで働く労働者にくらべたならば、それ以前の手工業時代の職人たちの生活は、きわめて牧歌的で、暮しもけつてそれほど悪いものではありませんでした。エンゲルスは、当時の織布工の状態は、「彼らの後継者のそれよりもはるかにまざっていた。彼らは過度にはたらく必要はなかった。やりたいと思うだけしか仕事をしないで、しかも必要なだけかせいでいた。彼らには自分の家の庭や畑で健康な労働をするだけのひまがあった」とのべています（エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」）。しかし産業革命ののち



には機械の採用で、多くの職人の手工業的熟練は意味のないものになり、賃金を引下げられ、労働者は機械の奴隷にかえられてしまいました。

他方、熟練のいらぬ作業がふえたので、土地をうしない生活にこまって都市に流れてきた農民や、婦人、子供が大量に工場にひきいれられ、とほうもなく安い賃金で働かされるようになりました。こうした理由で、労働者ぜんたいの賃金が、さらに極端に切下げられていきました。多額の資金を機械・工場施設に投資した資本家は、施設をあそばせておくのは損だということで、労働時間をできるだけひきのばそうとはかっただけでなく、一定の産業では、二交替制で昼夜のべつなく機械を運転させるようになりました。このため労働者の労働時間はひきのばされ、一四と五時間働くのはあたりまえのことになり、ときには三日も昼夜ぶつとおして働かされることもありました。

婦人や幼児の深夜業もとくべつのことではなくなりました。その結果、授乳しようにも、しやうがないので、工場で働く母親は、乳児にひもじいおもいをさせまいとして、阿片剤をしやぶらせるという、おそろしい習慣さえ、こうしたなかでうまれてきました。炭坑主は、ロバもつかえない狭い坑道では、七、八才の幼児を素裸にして皮のベルトと鎖をつけ、切羽から坑口までの炭車をひかせて、平然としていました。赤ん坊が乳をのまないで阿片剤をしやぶり、まだ骨もかたまらない幼児が、太陽にもあたらないで、深夜工場で働き、ときには坑道の中ではいつくばって

炭車をひく——こうしたことから、労働者の子供の罹病率はいちじるしくたかまり、死亡率が急上昇しました。

こうして産業革命によって、労働者の状態はまったく目をおおいたくなるようなものになりましたが、工場主がいくらでもあつめてくることのできる、生活にこまりきった不熟練労働者を、組合に団結させるといふことは、けつして容易なことではありませんでした。だが、どんなに困難があつたとしても、熟練職人のあいだにはじまつた団結が、一つの屋根の下や一つの抗内におおぜい集つて、低賃金と長時間労働に苦しみながら働いている工場労働者のあいだにひろがつていくのは、不可避のことでした。一八世紀の末になると、それが事実となつてあらわれました。紡績業、毛織物業や炭鉱業で労働者が団結をはじめたのです。

これまで存分に搾取をつづけてきた産業資本家は、これをみてひどくあわてました。そして議會をうごかして、一七九九年に団結禁止法という新しい労働者弾圧法を成立させました。この法律は、これまでもあつた団結禁止法とはちがつた意味をもっていました。これまでのそれは、手工業の職人の賃金や労働条件がギルドの規則や習慣で保護されていることを前提にして、労働者の団結を禁止していたのですが、こんどの法律は、産業資本家が国家に働きかけて、こうした勤労者の利益になるようなギルドの諸制限や封建制度のもとでつくられた貧民救済方法のいっさいを撤廃するなかで、その産業資本家の意向にしたがつて新たにつくられた団結禁止法でした。

したがってそれは、労働者に低賃金・長時間の労働をおしつけ、これを徹底的に搾取するという意図をいわばむきだしにした団結禁止法で、労働者の団結を一切の産業にわたってすべて禁止し、そうした行為にたいする取締りを一層きびしくするものでした。

### 弾圧下のたたかいと団結権の獲得

団結禁止法の制定によって組合運動にたいする弾圧はいっそうきびしくなりました。しかし労働運動が弾圧だけで破壊されることはありません。それどころか、弾圧は、労働者をいっそうめざめさせ、運動を前進させるものです。

イギリス労働者も、このとき弾圧下でみごとにたたかいぬきました。イギリスの労働者階級は、団結禁止法による弾圧の嵐がふきすさんだこのあとの二五年間に、支配層の意図とは逆に運動を前進させ、労働組合運動の基礎を本格的にかためたのでした。

北東海岸の炭鉱労働者は、「もしも組合の指令にそむくようなことがあれば、心臓をつきさされるか、腸をたちきられるかして、殺されることを覚悟する」という誓いをたてて、ストライキをやりました。労働者が、一般に組合加入にさいして荘重な儀式——それも神秘的な儀式をおこ

なう習慣をつけたのは、この時期のことでした。この当時は組合に加入することが、死か長年の懲役刑を覚悟することでもあったのです。

こうして労働者はストライキ闘争をやり、あるいは、たえがたい状態からの救済を政府に集団を組んで訴えるなど、あらゆる行動をこころみしました。また、没落していく手工業者たちは、協同組合組織をつくって身をまもろうともしました。しかし、こうしたたかいたならんで労働者は、それらのものよりかはるかに攻撃的な闘争をも展開しました。それは手織物労働者や農業労働者のあいだにひろがった、いわゆるラダイト運動その他の機械破壊しをともなう暴動で、十数年にわたってイギリスの広範な地域に燎原の火のようにもえひろがりました。幾万という労働者が、人民とともに機械を破壊したり、工場に火をつけたり、製品を海や河に投げこんだり、ときには工場主やその血縁者を殺害するということまでやってのけました。

こうした破壊活動は、たしかに、悲惨な労働者の状態と、それを改善しようとする運動にたいしての不当な弾圧とにたいする、労働者の怒り、それからまた、比較的よかった地位を機械によつてうばわれて、悲惨な状態につきおとされた手工的熟練職人の、絶望的な怒りの、自然発生的な爆発でもありました。だから、彼らは、自分たちを飢餓状態に追いこんだ機械そのものに闘争の鋒先をむけたのです。しかし、当時の労働者は、こうしたかたちでたたかう以外に、抵抗の手段をもっていなかったということも、見逃すことはできません。



資本家のあくなき搾取によって、労働者がもっともみじめな状態におとしいれられているときに、団結して合法的にたたかうことを一切禁止されてしまっていたのです。こうした状態のもとでは、労働者たちは、ストライキ計画を確実に実行にうつすために機械をいっせいにこわし、警官や軍隊が出動してこないうちに雇主を一挙に屈伏させ要求をみとめさせるために、工場への放火や雇主の近親者の殺害などの手段をとらざるをえなかったのです。

マルクスは、この機械打壊し運動についてこうのべています。「資本家と賃金労働者との闘争は、資本関係そのものとともに始まる。それはマニユファクチュア時代の全体をつうじて荒れつづける。しかし機械が採用されてからはじめて労働者は、労働手段そのものに、この資本の物質的存在様式に、挑戦する」。労働者が、機械そのものと、それが資本家によって資本主義的に使われることを区別して、攻撃を機械そのものに向けるよりも、首切、労働強化、低賃金など、労働者の搾取をつよめるための資本家的な利用の仕方に向け、さらに資本主義制度そのものに向けることをおぼえるようになるまでには、まだ時間とたたかいの経験が必要であったのですが、マルクスは、こうした闘争が、資本主義制度にたいする労働者階級のたたかいの第一歩であったことを、明瞭に指摘しているのです。

こうしたたたかいの発展をみて、政府は炭田地帯や繊維産業地帯に軍隊をさしむけ、機械打壊しにたいする最高刑を死刑にまでたかめて、これをおさえつけようとしたが、その目的をは

たせませんでした。労働者の困窮はそれほどひどく彼らの怒りはうち消しようがなかったからです。こうした激烈な闘争形態がとられる一方で組合の組織も発展しました。それぞれ職業ごとにつくられていた同一地方の組合がたがいに連絡をとるようになり、また職業別の全国組合もつくられるようになりました。各種の職業別組合が共同闘争をおこなう例もでてきました。そして組合運動はいっそう多くの労働者のあいだにひろがり、組合運動には労働者階級が共通の敵である資本家階級にたいして階級的に団結してたたかうという方向がでてきました。

弾圧をつよめればつよめるほど、労働者の闘争はつよまり、組合組織がいっそう拡大していくをみて、イギリスの資本家は、労働者の団結はどのように取締っても取締りきれものではないということ、思いしらされました。そこで一八二四年、イギリス議会はついに団結禁止法でとりしまるという方法が効果的なものでないことを認め、この法律を撤廃しました。イギリス労働者はついに、世界の労働者に先がけて、そのたたかいかいによって団結権を獲得したのです。

もとより、このとき団結権獲得を有利にした副次的な条件は、いくつもあげることができます。たとえば、一七六〇年代にはじまったイギリスの産業革命も、ほぼこの時期には終りにちかづいていて、産業革命によってつくりだされたイギリスの近代的工業には、全世界の注文が殺倒していたために、資本家たちは、たとえ賃金・労働条件をいくら改善することになるにしても、労働者との争いをさげ、工場をフルに操業したいという気持をつよめていました。

また地主層は産業革命で急速に経済力をつよめた、産業資本家層をねたんでいたため、議会内の地主代表と産業資本家代表との対立がふかまっていたことも、そうした条件の一つです。そのうえ、もと衣服製造の職人をしていて組合活動をやったことのある、フランス・プレースが、ヒュームという議員とくんで、たくみな議会作戦をとり、大多数の議員が気がつかないうちに、事実上いっさいの団結禁止を撤廃することになるような法律を成立させてしまったということもあります。

しかし、こうした有利な条件をいかして、この悪法の撤廃を実現し、団結権を獲得した根本的な力は、労働者の不屈の闘争でした。労働者の闘争の強化と拡大をまえにして、支配階級はいやながら労働者の団結権を認めたのです。

### フランス・ドイツなどの労働運動と団結権

こうして、一七世紀末から労働組合運動にたちあがったイギリス労働者は、一八二四年に団結権を獲得しましたが、資本主義の発展がおくれた他の国々では、運動の出發も団結権の獲得も、イギリスよりかなりおくれました。

労働組合運動がかなり広範に展開されるようになるのは、イギリスからの移民労働者が多数いたアメリカ合衆国でも、一七九〇年代になってからですし、フランスでは一八三〇年代、ドイツでは一九世紀の後半にはいつてからのことでした。またアメリカの労働者はイギリス労働者にはほきびすを接して、事実上団結権を獲得しましたが、フランス労働者は一八六四年、ドイツ労働者は一八九〇年になってはじめて団結権を法制的に確立しました。

日本で最初の労働組合が組織されたのは、一八九七年のことですが、その他のアジア諸国や中近東諸国、ラテン・アメリカ諸国では一九一四―一八年の第一次世界大戦の前後の時期であり、フリカ内陸諸国では第二次大戦後のことです。

### この章のまとめ

以上この章では、労働者階級の基本的な大衆組織である労働組合運動がどうやって生まれたかについてのべました。

資本主義的生産関係の発生とともににはじまる労働者の闘争は、個人的抵抗から出発して集团的暴動へとすすみ、ついに職人のあいだに労働組合運動の芽をつくりだしました。そしてこうした運動が、産業革命の進展するなかで、工場労働者へとうけつがれ、あらゆる弾圧を排除しながらほんものの労働組合運動へと発展させられていったのです。労働者はたたかひによって団結権

——組合に団結する権利をかちとりました。

《参考文献》

- 1 エンゲルス『イギリスの労働者階級の状態』——とくに「序説」と「労働運動」の章（大月書店Ⅱマルクス・エンゲルス選集別巻）。
- 2 マルクス『共産党宣言』
- 3 アレン・ハット『イギリス労働運動史』（理論社）

○ 労働組合とはなにか

○ 資本主義の発展

○ 団結—要求—闘争—



第二章 労働者階級独自の政治行動の発展





## 経済闘争から政治闘争へ

一八二四年に団結権をかちとると、イギリスの労働者は、そのご、大がかりに組合運動を發展させました。もちろん、団結が禁止されていたときも、労働者は組合に団結することをやめませんでしたし、また、団結禁止法が撤廃されたのちもけっして労働運動に無制限の自由があたえられたわけではなく、雇主や仲間の労働者を「威圧」することを禁止するなど、今日にくらべらばむしろ大幅な制限があいかわらずくわえられていたのですが、しかし、この法律の撤廃は、労働者に勇気をあたえ、せきを切った奔流のように運動を發展させました。そして、先進的活動家は、組合運動をそこからさらにもう一步前進させて、あらゆる組合を全国的に結集するたにかいに、とりくみはじめました。

ところで、職業別、地域別に分散してつくられた労働組合が、全国的に、したがって全階級的に結集する努力をはじめたということは、労働運動が質的にもう一步前進するうえで、重要な意味をもっていました。それは、労働者が資本家と労働者の二つの階級が存在とその対立関係とを意識しはじめたということであり、資本家階級にたいして階級として、たたかいはじめたことを意

味していました。

産業革命で、労働者の数がふえ、工場や仕事場に多数あつまったり、都市の労働者住宅区に密集するようになったこと、そして、かつての手工業的職人が、機械のもとで働く、熟練を必要としない、等質化された工場労働者になったことが、労働者たちに、自分たちの共通の利益についてめざめさせ、階級としての意識をそだてあげていくうえで、基本的な条件となったことは、いうまでもありません。

そして労働者が、階級全体の共通の利益を意識して、全階級的な闘争へとたちあがっていくと、それはとうぜん、労働者階級独自の政治行動をあらたに発展させずにはいけません。日常的な経済要求から出発して、労働組合という階級独自の組織をつくりあげ、さらにこの組織に団結する権利を支配層に承認させた労働者は、そのごのたたかいかいをつうじて、あらたに、労働者階級独自の政治行動を発展させることになるのですが、そのきっかけをつくりだしたのは、イギリスでは、一八三二年の選挙法改正であり、そのさいに産業資本家層が労働者階級にたいしておこなった裏切りでした。

## 一八三二年のイギリスの選挙法改正

そこで、この選挙法改正をきつかけにする労働運動の前進について次にのべるわけですが、そのまえに、当時のイギリス社会の状態を簡単にふりかえてみる必要があります。

イギリスでは、一七世紀の中頃に絶対主義王制をうちたおして資本主義発展の道をきりひらくブルジョア革命がおこなわれたものの、この革命でイギリスの政治権力を握ったのは、大商業・金融資本家と地主的資本家、一部の産業資本家で、多くの産業資本家をもふくめて国民の大多数は、一八三二年までは、いっさい参政権をうばわれており、有権者は一六〇〇万の人口のうちわずか一六万でした。

すでにのべてきたように、この当時までの七〇年間にわたる産業革命は新たに産業資本家を抬頭させていたのですが、農民や労働者とともに、この層さえも選挙権・被選挙権をあたえられていかなかっただけでなく、議会そのものの腐敗ぶりもはなはだしいものになっていました。たとえば、「選挙区売ります」というような、おどろくべき広告がしばしば新聞にのり、支配層は選挙区の販売をつうじて文字どおり議席を買いとって、政治を勝手に左右していました——というのは、

これも産業革命の結果ですが、農民が土地を追われ、都市へ流れこんで労働者になったためや、新しい土地に全く新しい産業が発展して、たちまちのうちに新工業都市ができたために、イギリスの人口分布に大変動がおこって、以前には数千人の人口をもっていた選挙区に、いまは誰一人住んでおらず、地主の別荘が一軒あるだけといったようなことが、あちこちにみられ、したがって、金のあるものは、この土地を買いさえすれば、文句なしに、議員になることができたのです。

産業資本家層は、大規模な工場に多数の労働者をあつめ、これにたいする未曾有の搾取をおこなうことによつて、急激にその経済的な力をつよめて、いまは国の支配権をにぎるだけの實力をそなえるようになっていたのですから、こうした状況をだまってみているわけはありません。彼らは自分たちが政治権力を握り、産業資本家の利益を全面的にまもる政府をつくらうとして、議会改革運動にのりだしました。

一方これとやらんで、生活に激変がおこり、貧困の中へつきおとされた労働者のあいだにも、政治への関心がつよまってきました。労働者をいくらかでも保護してきた、封建時代からうけつがれた法律や習慣はつきつきにとりはらわれてきました。農業を経営したり、農業資本家に土地を貸している大地主層の利益をまもるために、輸入農産物には高額の関税をかけて、穀物価格が不当に釣上げられていました。それに、組合をつくつてたかえば、雇主に「威圧」を加えたといつて、政府は警察や軍隊をつかつて弾圧にのりだしてきました。

労働組合運動だけで自分たちの要求が解決されないことを知った労働者たちは、産業資本家と  
ならんで、選挙権を拡大しろ、選挙権を自分たちにもあたえろ、と要求しはじめました。

しかしこのときまでに労働者たちは、賃金や労働条件の問題で雇主たちと自分たちの利害が対  
立していることにめざめて、労働組合という階級独自の組織に団結しはじめていたものの、政治  
運動の面ではまだブルジョアジーを信じて、これに追従し、労働者階級だけで政治運動をする必要  
があるなどということは考えていませんでした。なぜなら、当時議会の改革を叫んでいた産業資  
本家たちは、一九世紀末のフランス革命の影響をつよくうけて、自由、平等、博愛のスローガン  
をかかげて選挙法改革運動をすすめていきましたが、労働者は、産業資本家のいう民主主義が、産  
業資本のための民主主義であり、彼らのいう自由が搾取をつづけるための自由であることには、  
まだ気がつかなかったからです。このため、選挙法改正を要求する運動の中で、先進的な労働者  
たちは、ブルジョアジーの運動に合流し、結果として、ブルジョアジーに指導され利用されるこ  
とになりました。

一八三二年、選挙法改正を要求する運動は、広範に参加した勤労者層が推進力となることによ  
って、異常なたかまりをみせました。たとえば、ロンドンでは王のもとに群衆がおしよせて議会  
改革を要求し、ブリストル市では勤労者が暴動をおこして、数日間にわたって市を占拠するとい  
った具合に、イギリスの情勢は内乱の一手手前までいき、その結果、支配層は譲歩していちおう

の選挙法改正をみとめないわけにいかなくなりました。

しかしこの改正で、参政権を獲得したのは産業資本家層と資本主義的農業経営者だけで、しかも産業資本家はこれで、事実上イギリスの政治権力をその手に握ることになったのですが、労働者や勤労農民はというと、選挙権をあたえられませんでした。改正の推進力として労働者を利用した産業資本家たちは、自分たちが権力をにぎるとこのたかいで同盟者をさっさと裏切ってしまった。労働者を雇い、これを搾取して利潤を手にいれている産業資本家にとっては、自分たちが権力を手にいれたのちは、労働者をできるだけ無権利状態にしておくことが、のぞましいことだったので。

### 全国労働組合大連合への結集

労働組合による  
社会変革の試み

資本家の裏切りをみて、労働者たちは憤激しました。労働組合員のあいだにはげしい反撥がおこりました。

憤激した労働者は、もう資本家にたよることはできない、自分たちのことは自分たちで解決するほかないということをし、さとりしました。しかし、そこからすぐさま労働者は独自の政治行動に

高揚

革命の必要は？

移っていったかという、そうではありませんでした。かれらは、まず、これまでに自分たちがつくりあげていた労働組合の組織だけを武器にして、この目的をはたそうとしました。

おりもおり、イギリスの生んだ最もすぐれた社会主義の先駆者の一人であるロバート・オウエンが、アメリカから祖国に帰ってきました。このオウエンと彼の思想やこの時期の社会主義思想一般——空想的社会主義については、次の章であらためて説明するつもりですが、彼が、「無知で怠惰な連中が邪悪な貨幣制度を仲介にして働く者の労働の成果をぬすみ去るのを禁じ、働く者の勤勉と美徳が相応のむくいをうけ、邪悪と怠惰が軽蔑と窮乏のむくいをうけるような新しい社会秩序」をうちたてようと説いてまわると、これがたちまち労働組合員をひきつけ、労働者大衆の心をとらえました。

そこで労働者たちは、社会の変革を究極の目標にかかげ、あらゆる職種の労働者を熟練・不熟練を問わずにいっさい組織するという方針をとる。「全国労働組合大連合」の組織化に、熱狂的にとりくみはじめたのです。すでにのべたように、産業革命がおわったばかりの時期の労働者たちは、このうえない貧困と無権利のどん底につきおとされ、そこから脱出する道を必死になつてさがしとめていたのですから、「新しい社会秩序」をめざしてたちあがった彼らの情熱は、じつにはげしいものでした。わづか半年のうちに五〇万の組合員が「大連合」に結集され、極端な場合には、一人の労働者が一晚のうちに二〇〇〇名を組合員に獲得したという例さえみられま

した。

しかし、労働組合運動だけで革命をやるという、このちも各国の労働運動の初期の段階——労働者階級が経験をもたず、科学的理論にみちびかれていない段階——にいつもあらわれてくる試みは、失敗におわりました。「大連合」の指導者となったオウエンたちは、労働者階級のたたかいに依拠し、その力で社会変革をやりとげるということに反対し、そうしたたたかいを指導しようとしなかったからです。オウエンは、もっぱら教育と説得によって、労働組合を手工業者と農民の生産協同組合につくりかえながら、革命闘争をやらないで、徐々に、平和的に、資本主義を変革していくことができるものと考えていました。しかし、資本家たちが、平和的に、すんで自分たちの支配権をなげだすはずはありませんでした。彼らは、労働者たちが熱狂的に「大連合」へと結集していくのを見て、ただちに容赦ない弾圧にのりだしました。

そこで、大連合に結集すること自体が、職場の労働者にとつては、ストライキをかけての実力闘争とならざるをえません。そのうえ、支配体制に危機を感じた支配層は、支配体制をまもるために利用できる一切合切のものをもちだしてくるものです。彼らは団結禁止法を、もうつかうことができないので、秘密結社の非合法宣誓をとりしめる法律をかっぎだして、組合加入の宣誓をしたことを理由に、労働組合指導者を処刑するということまでやってのけました。こうした弾圧に、労働者大衆は団結して反撃をくわえました。しかしオウエンたち指導者は、こうした闘争をみ



とめず、すべての労働争議を否定する公式声明を發し、ついで「大連合」から勝手に脱退してしまつたのです。組合は混乱し、組織はたちまち崩壊しました。

こうして「大連合」の運動は、わずかに一年たらずのあいだに、くずれ去つてしまつたのです。労働者大衆はけつして後退しませんでした。労働者大衆はこの失敗をつうじて、一步前進しました。搾取と抑圧をなくして、労働者の世の中をつくるためには、労働組合運動だけではだめだということに、労働者は気がつきました。

労働組合を生産協同組合にきりかえていこうとくわだてただけで、資本家は、労働運動にはげしい攻撃をくわえてくるではないか。そのさいに、この攻撃にたいしてゼネストで対抗したとしても、それは消極的な抵抗におわるだけの話してはないか。世の中をかえるためには、積極的に政治行動をおこし、労働者階級がまず国の権力を握ることが必要なのだ——労働者はこうしたことに気づき、このうち労働者階級独自の政治行動をチャーチスト運動という形で展開することになります。

イギリス労働者階級の運動は、失敗をつうじて一步前進するのです。

## チャーチスト運動

投票する組の人数は投票者数を  
同一か  
九

チャーチスト運動は、一八三六年にロンドンの労働者と手工業者たちがはじめた、イギリスの政治体制の徹底的な民主化をもとめる運動で、①成年男子普通選挙権、②毎年議会改選、③選挙のさいの秘密投票（当時は記名投票でおこなわれていた）、④平等な選挙区、⑤議員の財産資格の撤廃、⑥議員への歳費支給（当時の議員は、名譽職で歳費は支給されなかったが、これでは労働者は議員にえらばれても食べていけない）の六カ条にわたる「<sup>ヒブルス・チャーター</sup>人民憲章」を中心綱領にかかげていたので、こういう名でよばれました。それは社会主義の要求を表面にかかげていたわけではないので、一見、それまでのブルジョアジーの議会改革運動とかわらないように思われました。しかし実際には、エンゲルスが「この六カ条はみな下院の構成だけに限られていて、一見したところまことに無害なように見えるけれども、そのじつイギリスの憲法を女王や上院もろとも粉碎するのに十分なものである」とのべているように、人民の権力をうちたてることをめざした、労働者階級を中心とする世界最初の広範な大衆的政治運動でした。

また労働者たちは、たんに政治的な民主主義の拡大を要求してただけではなくて、運動に参加した牧師の一人がいみじくも言うてのけたように、「ナイフとフォークの問題」——生活の問題の解決をもとめていました。たとえば、産業資本家が政権をにぎると、ただちに制定した、新救貧法の大幅改正の要求がそれです。この新救貧法は、貧困者にたいする救済金を徹底的にへらすことによって、労働者の賃金をできるだけ切下げることを目指すものでした。また、長時間労働

スティーヴンズ  
僧侶

働をなくし、十時間労働制を確立するという要求がそれでした。労働者はこうした要求の実現を目指して、社会を根本的に変革するためには、労働者階級が権力を握ることが必要であると考え、議会改革をそれへむかって進むための第一歩とみなしていたのです。

大衆的な署名運動と、たいまつをかかげておこなわれる人民の大集会が、都市という都市でつぎつぎにおこなわれ、数十万から百万におよぶ人民の大集会の圧力を背景にして、一八三九年から四八年までのあいだに三回にわたって議会にたいする請願がおこなわれました。運動はそのたびごとにきびしい弾圧をうけて、指導者の多くが逮捕され投獄されましたが、数年たつと、その力をもりかえしました。大衆のたたかいがいかに根づよいものであったかがわかります。

運動がもつともりあがったのは、四二年四月におこなわれた第二回請願のときでした。このときには、労働者階級政党の原形となった「全国チャーチスト協会」という組織がつくられ、協会は約三〇〇の支部と五万余りの会員をもち、その活動が中心になって三三一万以上の署名があつめられました。請願書の内容も、第一回目のものよりもはるかに激しい調子になり、階級的性格をつよめて、イギリスの社会政治体制の不公平なことや、労働者のたえがたい労働と低賃金にふれ、「女王陛下の収入は毎日一六五ポンドもあるのに、労働者家族の収入は、一日四ペンスにみたない」と指摘していました。資本家を代表する議員はこの請願書を見て「請願は国の最高権力を要求している。イギリス帝国の資本と蓄積された富を、労働者の足下におけるのである。

その結果がどうなるかは明らかではないか」と叫んだといわれますが、彼は、運動の本質を階級的嗅覚で敏感にかきわけていたものといえましよう。

しかし、労働者がはじめておこなった大衆的政治運動には、まだまだ大きな弱点がありました。それは一口でいうならば、労働者階級が階級として未成熟であったということからきています。労働者階級が未成熟であったために、労働者党の原形となる組織をどうやらうみだしたもののそれは、革命的、科学的理論にみちびかれたほんものの労働者階級政党にまでは発展しておらず、したがってせつかくもりあがったたかいかいも統一した指導を欠くこととなったのです。

具体的に説明すると、こうです。チャーチスト運動がはじまったときには、イギリスでは産業革命がほぼ終了して、大工業が産業の中心的地位をしめるようになっていました。が、手工業もまだ広範にのこっていて、当時イギリスの労働者階級の大多数を構成していたのは、急速に没落にむかいつつあるこの手工業の職人的労働者でした。近代プロレタリアートの中心になる工場労働者は、急激にその数がふえつつあったものの、まだ誕生したばかりで、十分な経験と理論をもっておらず、したがって、運動の強力な指導者を自分たちの隊列のなかから生みだすだけの力をもっていませんでした。

このため、運動の中には、さまざまの思想的流れがうずまいて、明確な指導と統一の実現が困難でした。最初に憲章を起草して運動の中心にたつたのは、手工業の熟練職人を代表するウイリ

アム・ラヴェットたちで、彼らは労働者の啓蒙をつうじて平和的な方法で、憲章を実現しようと考えていました。運動がすすみ、戦闘的な労働者大衆が前進しはじめると、こうした熟練職人や急進的ブルジョアジーは動揺し、運動からふるい落とされて、手工業の労働者大衆を代表するオコンナーたちの手にその指導権がうつりました。オコンナーたちは、新聞「北極星」<sup>ノース・スター</sup>をだしてさまざまな活動をおこない、大衆にむかって「断固たる行動」をおこすよう呼びかけましたが、彼らは、実際に人民蜂起を考えていたのではなく、蜂起のおどしだけで議会に憲章をみとめさせることができるものと考えていました。つまり資本家階級とその議会にたいするとらえ方が、あまかったのです。

最左翼には、ジュリアン・ハーニのように、革命的闘争なしには民主的改革を実現できないことを正しく見透して、武装闘争を熱心に主張した一派がいました。しかしこの人たちはまだ力が足らず、最後まで運動の指導権を握ることができませんでした。

こうして、請願運動がもたらがるたびに、政府側の弾圧にたいして武器をとってたたかうかどうかについて、運動の指導部内で議論が沸騰しましたが、指導者の意見はまとまらず、ゼネストや蜂起がくわだてられても、行動は一部でおこされたにとどまり、結局、運動は、軍隊による大弾圧にさらされ、指導者の大半はとらえられて、挫折することとなったのです。

人民憲章は実現しませんでした。イギリス労働者がそのたたかいたいをつうじて、現実にはチャーチ

ストの要求した普通選挙権をかちとつたのは、それから七〇年後の一九一八年のことでした。しかし、こうした大闘争が、それをたかたかたつた労働者になにもたらさないわけはありません。ちようど一九五九〜六〇年に日本の労働者階級と人民が展開したあの安保改定反対の大闘争が、改定阻止には成功しなかったものの、この運動を背景にしたその翌年の春季賃上闘争では、労働者はかつてみない大幅の賃上げをかちとることができたように、イギリスの労働者階級も、いくつかの具体的な成果をあげました。一八四二〜四七年に、炭坑法、工場法、一〇時間労働法などがあいついで制定され、婦人、子供の労働時間の制限、坑内労働の禁止がおこなわれるようになりましたが、これは、チャーチスト運動の高揚をみて支配体制の危機を感じたイギリス・ブルジョアジーが、労働者階級にたいしておこなつた譲歩でした。そして、イギリス労働者階級はこのうちこれをテコにして、労働者全体にわたる時間短縮、その他の労働保護立法を獲得していくことになるのです。

最後に、チャーチスト運動に関連して、どうしてもものべておかなければならないのは、この運動が、イギリスの労働運動の闘士をそだてるとともに、当時成長しつつあつた国際労働者階級運動に豊かな経験をあたえ、マルクスやエンゲルスがその科学的社会主義の理論をつくりあげていくうえに、多くの素材をあたえたということです。

まだ二〇代初期の青年であつたこの二人は、一八四三年頃からチャーチスト運動の革命的分

子と密接な連絡をもつようになりました。とくにイギリスに滞在していたエンゲルスは、しばしばチャーチストの出版物に寄稿して、左派の指導者に大きな影響をあたえたのですが、この二人は、またこの運動に参加し、この運動の発展を具体的に分析することによって、労働者階級の世界的な役割というものはじめて明らかにしたのです。つまり、資本主義的な関係が誕生すると同時に、資本家にたいするたたかいははじめた労働者は、しだいに階級的団結をすすめ、ついには全階級的な政治闘争、政治権力をめざす闘争へと、たちあがる。そしてこのたたかいをすすめる中で、労働者階級は、労働者階級政党をつくりだすのであり、この労働者階級政党にみちびかれ、労働者階級は、ついには資本主義をくつがえし、社会主義を実現することになる——これが二人がみちびきだした結論でした。

### ヨーロッパ諸国の運動

イギリスの労働者階級が、チャーチスト運動という、労働者階級最初の全国的政治行動をくりひろげていたときに、ヨーロッパ大陸の国ぐにでも、産業革命がはじまり、それに応じて、労働者階級が階級的に成熟しつつあることを物語る事件が、あいついでおこりました。それは一八三

一年と三四年にフランスのリヨン市の絹織物労働者がおこなった蜂起と、一八四四年にドイツのシユレジエンの織物労働者がおこなった暴動という、二つの事件に象徴されます。

これより先、フランスでは、一七八九年のフランス革命で権力を握ったブルジョアジーが、ル・シャプリエ法によって労働者の団結を禁止してしまつたにもかかわらず、労働者は一九世紀の最初の三〇年間に労働組合運動の先駆的形態である同職組合コンパニョネージュや友愛団体、相互扶助団体を組織して、資本家にたいするたたかいを組織的に展開しはじめていました。同職組合というのは、雇主とたたかつて賃金、労働条件をまもることと、労働者どうしの相互扶助とを目的に、手工業の職人的労働者たちが組織していた秘密団体であり、また友愛団体、相互扶助団体は、弾圧をさけるためにおもてむきは相互扶助だけを目的にかかげて合法的に組織されていたものの、これらも実際には資本家にたいして団結して抵抗するための組織でした。フランスの労働者はル・シャプリエ法による弾圧下で、こういう形の組織によって賃金や労働条件をまもるたたかいをすすめていたのです。

こうして労働者の運動が成長してくるなかで、一八三一年にリヨン絹織物労働者が最初の蜂起をおこすきっかけになつたのは、労働者が織つた絹織物の買取り単位の引上げを、企業主が拒否したことです。産業革命Ⅱ工場制工業の発展によって貧困のなかへつきおとされ、たえがたい状態においこまれていた労働者と手工業親方は抗議ストを開始し、軍隊が挑発行動をとると、彼らは



ストライキから武装蜂起へとたちあがりました。三日間の戦闘のすえ、労働者は軍隊を追い払って約十日間、市を占拠しました。しかしこの時の蜂起はまったく自然発生的なもので、労働者はその政治目標ももたず、このあとどうしていいかもわからないでいるうちに、政府軍によって鎮圧されてしまいました。

しかしそれから三年ののち、リヨン絹織物労働者が、ストライキと民主主義的運動にたいする弾圧をきっかけに二度目の蜂起をおこしたときには、労働者の意識はもつと成長して、蜂起は政治的な性格をもつようになっていました。たとえば、労働者は、結社の自由、思想・信条の自由、言論の自由というような政治的自由がなければ自分たちの社会的解放もないことを、経験をつうじて確信するようになっており、民主主義共和国樹立のスローガンをかかげていたのです。彼らはバリケードに赤旗をたて、「共和国か死か」と叫んで突撃しました。

他方、当時のドイツは、封建的地主の力がつよく、国家統一がさまたげられて、まだ三〇数カ国にわかれているという状態でしたが、ここでも三〇年代の後半にはいると工場制工業が急速に発展しはじめました。ドイツ労働者も、フランスの労働者とおなじように、ストライキ団体や労働者教育団体などのような、のちに組合組織に発展することになる組織をつくって、たたかいます。すすめていたのですが、地主と資本家の二重の搾取のもとで産業革命をむかえて、その状態はとうてい耐えがたいものとなり、ついに一八四四年にシュレジェンの綿織工と麻織工が蜂起して、

ドイツ労働者階級の階級的行動へのろしをあげたのです。

この蜂起も自然発生的なもので、労働者は政治的スローガンをかかげておらず、二日で鎮圧されたのち、多数のものが死刑にされましたが、しかしこのドイツ労働者階級がおこなった最初の階級独自の行動は、ドイツ全土の労働者や進歩的知識人にはかりしれない影響をあたえました。ベルリン、バーメン、ザクセンの労働者はストライキや都市的暴動でこれにこたえ、詩人ハイネはそのたたかいをたたえた詩をつくり、当時学生での中にドイツ労働運動の組織者の一人となるラッサールは、これは「切迫している貧者の富者にたいする戦のはじめです」と感動して父に書きおくりました。

資本主義の発展が、英仏にくらべておくれたために、あとから出発したドイツ労働者の闘争は、かたちのうえからみれば、労働組合の組織も十分に発展させていないで、まだまだ未熟のようにみえましたがそれにもかかわらず、マルクスがこの闘争ののちにただちに指摘したように、すでに、フランス労働者とおなじく、資本主義制度そのものに鋒先をむけた階級的行動としての性格を、しめしていたのです。

## 一八四八～四九年の革命とプロレタリアートの歴史の舞台への登場

こうして政治行動の面で、はじめはブルジョアジーに追隨していたのに、いまでは階級的に独自の行動をおこすまでに成長してきたヨーロッパ諸国の労働者は、一八四八～四九年にヨーロッパ各国にあいついで革命がおこると、革命という歴史の舞台へ独自の階級勢力としてはじめて姿をあらわし、これを積極的に推進することになります。

一八四八～四九年の革命を準備したものは、ヨーロッパ各国にひろがった四五～四六年の凶作と四七年の経済恐慌で、四七年にはもう各国で人民のいわゆる「不隠な動き」がみえていましたが、四八年二月にまずフランスで革命がおこると、これがドイツ、オーストリア、イタリアその他の国へとつぎつぎに波及しました。

革命の内容や目標は、それぞれの国の歴史の発展段階によってちがっており、すでに一七八九年の大革命でブルジョア革命を基本的におわっていたフランスの二月革命は、そのこの産業革命をつうじて抬頭した産業ブルジョアジーが、商業・金融ブルジョアジーの寡頭制支配をうちたおして自分たちの支配権を確立するためにひきおこしたものでした。他方、ドイツやイタリアでは、資

本主義発展の障害になつてゐる、封建的絶体主義的秩序を廃止して国家統一をやりとげること、オーストリアでは、絶対主義の支配の打倒と、ハンガリー人、チェック人、スロヴァキア人、ルミアニア人など、その支配下で苦しんでいた被抑圧民族の解放が、革命の目標でした。

労働者階級が生活改善と民主主義的諸権利の実現をめざして革命に積極的に参加するなかで、階級独自の行動をとりわけはつきりしめたのは、フランスの労働者です。大金融資本と大商業資本を代表する反動政府の反撃にあつて産業資本家たちが逡巡しているときに、パリの労働者は、他の勤労者層や学生とともに行動をおこして、首都の戦略的重点をすべて占拠してしまいました。革命でできた臨時政府が、労働者階級勢力の進出をおそれて革命を徹底させようとせず、妥協をはかろうとしていたときに、玉座を街頭にはこびだして焼きすて、革命完遂と共和制実現の推進力になつたのも労働者でした。

こうして労働者階級は革命の推進力になりましたが、しかしそのたたかいを指導する労働者党がなかつたので、結局権力は産業資本家の手におちました。しかし労働者階級は、その圧力による臨時政府にルイ・ブランとアルベールという二人の労働者代表を参加させることができました。また政府は「労働者にたいして、労働によって生きる権利を保証し」「すべての市民に仕事を保証する」労働権にかんする法令を採択して、失業者を吸収するための国立作業場を設立しないわけにいかなくなりましたし、また労働時間の短縮、成年男子普通選挙権、植民地の黒人奴隷

制廃止などをも実施しないわけにいかなくなりました。だが、フランス労働者は、それだけで満足していませんでした。社会主義の原理にたつて労働を組織すること、搾取制度を廃止することを要求し、革命を社会主義の方向へと一歩おしすすめようとはかったのです。

しかし、そうはいっても、当時フランスの労働者階級は、イギリスのチャーチスト運動の場合とおなじように、科学的な社会主義とそれにもとづく正しい革命理論をもっておらず、このことがこうしたたたかいをすすめるうえで労働者階級の決定的な弱点になりました。

革命闘争がたかまったときに労働者の圧力をうけて一時的に譲歩したブルジョア階級は、その後から反撃の準備を着々とはじめました。しかし労働者は、臨時政府にはいつていたルイ・ブランとアルベールにひきづられて決戦の時期を先へとひきのばし、結局、勝利の機会をうしなう結果になりました。つまり二人の空想的社会主義者は、自分たちが入閣していることを理由に臨時政府のもとで労働者の要求がだんだんかなえられていくかのように主張し、そうすることによって、労働者たちに、革命をさらに深化させることを目指して即座に断固たる闘争を推進することをおもいとどまらせ、こうして、ブルジョア階級に、反撃の準備をととのえるための時間をうまうまとかせがせてしまったのです。

臨時政府は、一方で農民に高額の新税をかけ、他方で、こうしたことが必要なのは労働者が勝手なことを要求してなまけているからだと言伝することによって、労働者と農民をひきはなし、

労働者を孤立させていきました。また、政府はこの間に、軍隊の結集を完了し労働者階級に決戦をいどむための準備万端をととのえました。こうして四八年六月とつぜん政府は国立作業場を閉鎖して、労働者階級にたいする反撃を開始したのです。パリの労働者はやむなく蜂起しました。労働者は、空想的社会主義者がふりまいた、臨時政府の下での漸進的改良の幻想にひきづられて、有利な決戦の機会をうしめない、敵がえらんだ時期に蜂起へとおしやられたのです。

政府軍二五万にたいして、パリの四万の労働者が四日間にわたって英雄的にたたかいました。それは、マルクスのいうように「近代社会を二分する二階級間の最初の大戦闘」であった。それは「ブルジョアの秩序の存続か壊滅かのたたかい」（マルクス「フランスにおける階級闘争」邦訳選集、第五卷三〇ページ）でしたが、蜂起は結局血の海の中で鎮圧されました。

当時封建的支配のもとで三〇数カ国にわかれていたドイツでも、二月革命の影響をうけて民主的國家統一をめざす三月革命が勃発しましたが、この革命でも、ドイツ労働者階級は革命の推進力になりました。プロイセン王の専制的支配に反対し、民主的改革を要求する労働者と学生の蜂起で、プロイセンの反動的軍隊は、首都ベルリンから撤退しないわけにはいかなくなりました。プロイセンその他いくつかの国では、自由主義的な臨時政府がつくられたばかりでなく、南ドイツのいくつかの国では、封建的支配者を追いはらって、一時的に共和制がうちたてられさえしました。そしてこうした動きに勇気づけられて、ドイツ・ブルジョアジーの代表者たちは、全ドイツ

国民議會を召集し、統一ドイツ国家憲法を採択するところまでいきました。

しかし、資本主義の発展がおくれ、階級勢力としても弱体であったドイツの資本家階級は、自分たちがおぼおぼと反封建闘争にたちあがったときに、その背後から労働者階級が力づよい足どりでせまってきたので、すっかり肝をつぶしてしまいました。自分たちがこのまま封建勢力とのたたかいをすすめていくならば、背後からせまってきた労働者階級が、さらに自分たちをもたおして前進していきはしないかという恐怖に彼らはとりつかれました。そこで、プロイセン王を先頭とするドイツの反動的、封建的勢力が、統一憲法案を一蹴して、民主主義革命にたいする反撃を開始すると、憶病なドイツ・ブルジョアジーは革命を裏切つて、封建勢力と妥協する道をえらびました。労働者階級とともにたたかつて封建勢力の支配をうちたおすのではなく、労働者に背を向け、封建的大地主勢力を代表する、軍国主義的なプロイセン王のまえに膝を屈して、その指導のもとでドイツを統一する道をえらんだのです。労働者と革命的民主主義者は、各地で武装闘争を展開しました。しかし孤立させられ、鎮圧されてしまいました。

### 自由と民主主義の旗をかかげた労働者階級

こうして、チャーチストの第三回の請願闘争をふくめて、ヨーロッパ諸国におこった一八四八と四九年の革命闘争のさいには、労働者階級が各国で一つの独立した階級勢力として歴史の舞台に登場して、独自の行動を展開したのですが、このことは世界史の発展のうえでの一つの大きな転換点になっていることに、ここで注目しておきましょう。

もちろん、この時期の労働者階級というのは、資本主義の発展がもつともすすんでいたイギリスにあつてさえ、チャーチスト運動についてのべたさいに指摘したように、その大多数は、まだ手工業的労働者——資本主義の発展とともに没落し消滅していく層——であつて、機械制大工業で働く近代的産業プロレタリアート——資本主義の発展とともにたえずその数がふえていく層——ではありませんでした。産業プロレタリアートが労働者階級の中心をしめるようになるのは、ヨーロッパでは、こののち、つまり一九世紀後半にはいつてからのことなのです。

したがつて、没落していく手工業労働者が階級の多数をしめ、彼らが零落の中で、明確な指導もなしにおこなつた、資本家階級にたいする最初の決戦は、勝利することはできませんでした。しかし、たとえ勝利できなかったとしても、この決戦の経過は、いまでは労働者階級が、そして労働者階級だけが、自由と民主主義のために徹底してたたかうことのできる、ただ一つの階級であることを、はっきりとしめたのです。

一七世紀のイギリス革命や一八世紀末のフランス革命のさいにみられるように、これまでは資



本家階級は自由や民主主義を叫び、封建勢力と積極的にたたかってきました。しかし彼らのいう「自由」とは、何にも妨げられることなしに利潤を追求する「自由」のことであるとともに、労働者を搾取することの自由であり、彼らのいう民主主義とは、資本家階級のための民主主義にすぎないということをも、四八、四九年の革命的事件ははっきりとしました。労働者階級が真の自由と民主主義を自分たちにもあたえるよう要求すると、フランスの資本家はこれに武力攻撃をくわえました。そしてその弾圧に成功すると、労働者に一度あたえた選挙権さえも奪いかえしてしまつたのです。

しかもそれだけではありませんでした。フランスのブルジョアジーは、四八年六月に労働者階級勢力に反撃をくわえ、その蜂起を鎮圧したのちも、なお自分たちの支配体制に不安を感じると、彼らは、二月革命で直接自分たちが手にした政権を、反動的な軍隊、警察、官僚機構に依拠する冒険主義者——ルイ・ボナパルト（ナポレオン・ボナパルトの甥）の独裁にゆだねるということさえやつてのけます。一八五二年に、共和制が否定され、ナポレオン三世の帝政がうちたてられた意味は、そこにありました。

また、ドイツの資本家階級は、すでにのべたように、労働者勢力をおそれるあまり、自由と民主主義の旗を公然となげすめて、封建勢力のまゑに膝を屈してみせたのでした。このため、ドイツではそのご、反動的な地主階級を代表する軍国主義的なプロイセン王の指導権のもとで国家統

一が実現されることとなり、そのことによつて、きわめて侵略的なドイツ帝国主義が成立する基礎条件がつくりだされるのです。

要するに自己のせまい階級の利益にとらわれて搾取関係の維持、階級社会の存続につとめる資本家階級は、労働者階級が歴史の舞台に階級として登場した一八四八年以後は、もう自からすすんで自由や民主主義をおしすすめる進歩的な階級ではなくなつて、反動的な階級となり、自由、民主主義、社会進歩を徹底しておしすすめる役割は、失うものは何もたない労働者階級にうつつていくことになるのです。

### この章のまとめ

以上この章では、労働者階級がしだいに労働者階級独自の政治行動へとたちあがるようになり、ついには社会変革をめざして資本家階級との最初の決戦をおこなうところまで成長したことについて、のべました。

しかしここまでの労働運動の歴史は、労働者階級が、そのたたかひの指針にすることのできる科学的な理論をもたないで、いわば手探りで運動をすすめてきた歴史です。

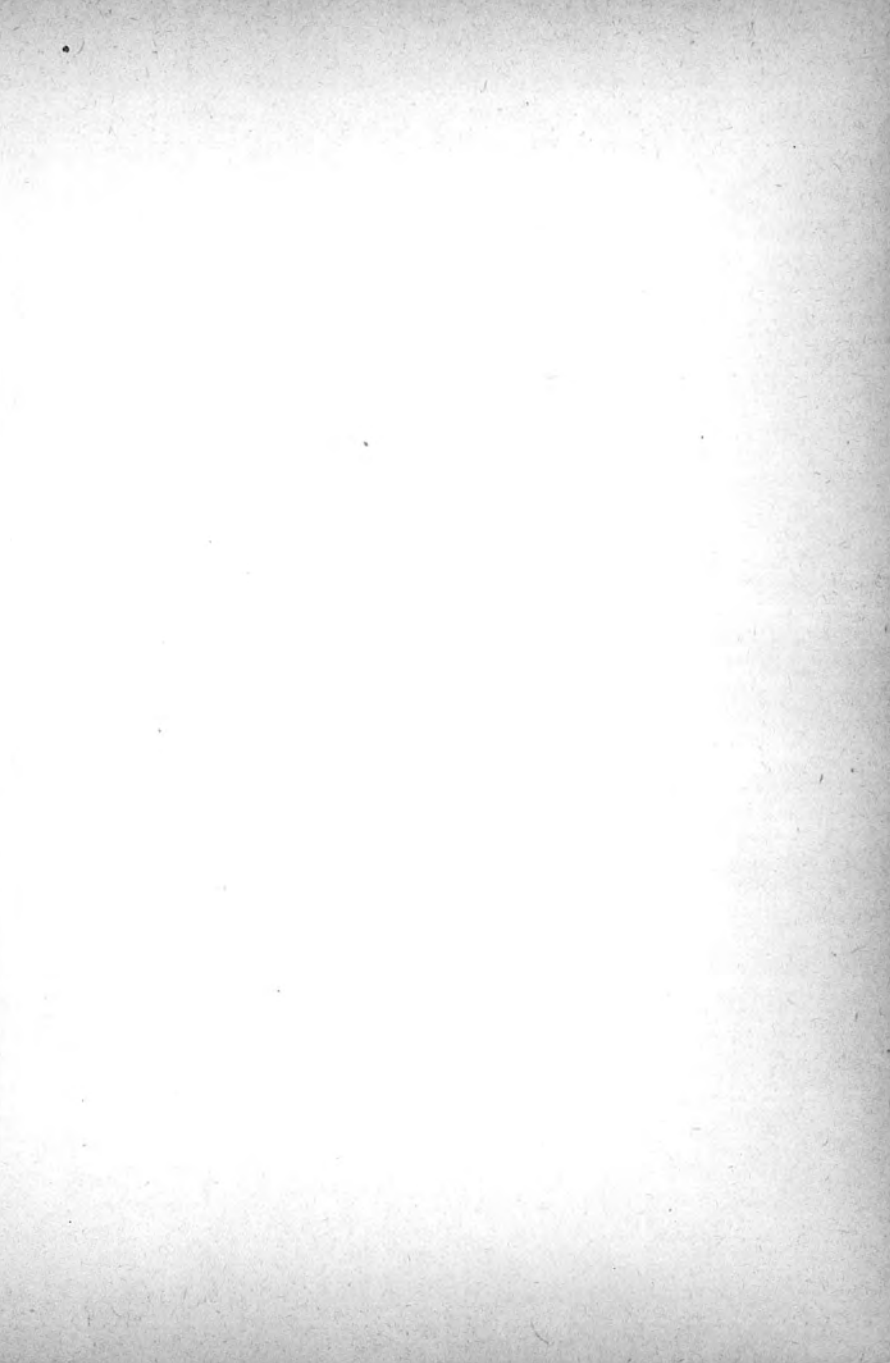
労働者は手探りで前進方向をみきわめると、あらたなたたかひをすすめ、そのたたかひの経験をつうじて、さらにもう一步前進するための道をさぐりあてました。それは不断の失敗の連続の歴史であつた、と支配者や労働者階級に無縁の人々はいうかも知れません。しかしそうではありません

せん。失敗の歴史こそ、労働者階級が自らの血であがなった、経験蓄積の歴史であり、労働者階級の叡知を発展させる歴史であり、そのたたかいを勝利へと向って前進させる歴史だったので。

労働者階級の歴史

《参考文献》

- 1 エンゲルス『イギリスの労働者階級の状態』の『序文』と『労働運動』の章。(大月書店)
- 2 マルクス『共産党宣言』
- 3 マルクス『フランスにおける階級闘争』
- 4 マルクス『ルイ・ボナバルトのブリュメール十八日』



### 第三章

労働者階級の思想の確立と

第一 インタナショナル



さて、第二章までのあいだ、わたしたちは一八四〇年代の末までに、労働者の運動がどのように発展してきたかということをもつぱら学んできました。それを一口でいうならば、一八四〇年代の末までに、ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国で大工業が発展して、資本主義の矛盾がはつきりと表面化するとともに、労働者階級が形成され、そしてそれは、階級独自の大衆的組織である労働組合をつくるようになり、ついで独自の政治行動にたちあがるまでに成長した、ということでした。

では、労働運動がここまで成長してくるあいだ、労働運動と密接な関係をもつ社会主義の思想はどのような発展をとげていたのでしょうか。これが次の問題です。

### 空想的社会主義——その本質と役割

産業革命によって資本主義の矛盾がはつきり表面化してくると、まず最初に、一九世紀の初め、フランスのアンリ・サンシモン、シャルル・フーリエ、イギリスのロバート・オウエンなど、当時のもっともすぐれた良心的知識人たちは、人が人を搾取する資本主義社会を否定して新しい社会秩序をうちたてなければならぬと考えるようになり、社会主義的な思想を展開しはじめま

した。

サン・シモンは伯爵の名門に生まれましたが、あのフランス革命を思想的に準備した進歩的な百科全書家たちの思想で教育され、フランス軍将校としてアメリカ独立戦争に参加したのち、帰国すると、その地位をなげうって、いっさいの科学的知識を一つの体系にまとめあげ人類社会を改造するという計画にとりくみました。そしていっさいの貴族仲間や金持から見放され、極貧の中で暮しながらも、やがて労働者の党が結成されるだろうということ、未来の科学は労働者のものであること、を予言したのでした。

フリーエは商人の家に生まれ、資本主義のもとでおこなわれる残酷な競争、その無政府性をまのあたりにみて、これをきびしく非難しました。そして空屋になっている僧院や貴族のやかたを借りうけて、共産村をつくることを計画しました。

オウエンは、七才で村の小学校の代用教員をつとめ、一〇才のときにはロンドンにて呉服の売買をやり、一五才のときにはマンチエスターへ行って自ら綿紡績の事業をはじめるといふ、おどろくべき、《神童》でした。彼は最新式の機械をとり入れた大工場の支配人になると、当時の常識をやぶった《実験》にとりかかりました。労働者はもともとなまけものなのだし、労働者の子供も生まれつき下劣なものだから、こういった連中をこき使えるだけこき使わなければならないと考えて、一日に一四〜五時間は働かせ、婦人子供にも深夜業をさせるといふ当時の資本



家のやり方にたいして、彼はまっこうから反対しました。彼の工場では、労働時間を一〇時間にへらし、労働者に住み心地のいい住宅をあたえ、学校をつくって、一二才までの子供を入学させました。労働者の子供が悪い習慣におちいっているとすれば、それは、環境のせいだということを、彼は確信していたのです。

彼はこうして、資本家の常識をやぶるやり方をしながら、しかも、莫大な利潤をあげてみせました。労働と生活の条件をよくすれば、労働者はすすんで働き、能率があがったからです。もちろん、彼がそこにとどまっていたとすれば、天才的な工場経営者、たくみな資本家というだけのことであつたでしょう。しかし彼はこうして手にいれた利潤を、職場を快適なものにするために使用しただけでなく、さらに、新しい社会をつくる目的に使用したのです。

彼は「実験」をもとにして、悲惨な労働者状態をもたらず、利潤追求の資本主義社会を批判し、社会改革の運動にのりだしました。幼児の労働を禁止したり、深夜業を制限する工業法を確立するために働き、さらにニューラナークに広大な土地を買って労働者にあたえ、協同組合村をつくろうと計画しました。この計画に失敗すると、一八二五年に彼は渡米して、インディアナ州に三万エーカーの土地を買い、ここでも協同組合村を計画しました。そしてこの計画にふたたび失敗したのち、彼は帰英して、さきに第一章でのべたように、全国労働組合大連合の運動にとびこんでいったのです。

## 役割

こうして、オウエンをはじめこの時期の初期社会主義者たちは、少数の資本家たちの利潤追求のために大多数の勤労者を悲惨な状態におとし入れる資本主義の悪をするどくつき、平等と協同の原理にたつ理想社会を目標にかかげて、そのための実践活動にもとりくみました。彼らが仲間や貴族や資本家たちにくまれ、迫害されながら、この理想のためあくまで生涯をうちこんだその情熱は、すばらしいものでした。

しかもこの人たちは、既存の資本主義社会のほかに、新しいべつの社会をうちたてることのできるのだということを、労働者たちに教え、彼らの社会革命への要求をたかめたという点で、たしかに労働運動の発展にたいして積極的な役割を演じました。

しかし残念ながらこの人たちは、資本主義の弊害を痛感して社会変革の目標をかかげながらも、現実の資本主義社会の発展法則と、この法則にもとづいて変革を実現する労働者階級の歴史的役割とを、まだ理解することができませんでした。そのためこの人たちは、支配階級や知識人の「善意」にうったえたり、あるいは労働者の教育活動にだけたよったり、あるいはまた労働組合を社会の漸進的改革をめざす生産協同組合にきりかえることによつて、新しい社会を実現しようとはかりました。

そこで彼らが実際にやろうとしていたのは、資本主義の弊害をとりぞくために、人の善意や願望や教育だけをたよりにして、はじまったばかりの資本主義の発展をおしとどめること、資本

# 主体の問題

主義の発展によつて没落させられ、悲惨な状態につきおとされている、かつての農家や手工業者などの小生産者に、以前にかれらがもっていた地位をとりもどさせてやることではしたが、それは歴史の発展の法則にそわない、ぜったいに実現不可能なことでした。

資本主義の社会をくつがえして、社会主義を実現する力は、むしろ資本主義の発展そのものが必然的にうみだす労働者階級にあり、この労働者階級がおしすすめる階級闘争こそが、それを實現させる唯一の方法であつたのですが、まだこの人たちは、こうした歴史発展の法則をみぬいた、前むきの思想をもつことができなかったのです。

小ブルジョア知識人の頭の中で夢想された、社会の発展法則の科学的検討にもとづかない、こうした初期社会主義思想は、空想的社会主義と呼ばれます。こうした思想は、本質的には、没落する小生産者層を代表する思想で、労働者階級の思想ではありません。

こうした思想は一九世紀初期には、資本主義の弊害と矛盾をするどく指摘し、労働者の目を社会変革の必要性へとむけさせるうえで、あきらかに進歩的役割をはたしました。しかし運動が發展して、労働者が階級の独自行動を發展させる段階になると、フランスの二月革命でアルベール・ブランが典型的にしめたように、その役割は、労働者のたたかいを革命的行動からそれる反動的なものになっていきました。

## 科学的社会主義の成立

さて一八四〇年代にはいつて、労働者階級が階級独自の行動を發展させるようになったときに、労働者たちのまえには、さまざまな形をとった空想的社会主義思想がありました。労働者階級の利益と要求をほんとうに表現し、資本主義打倒の正しい道すじをしめしてくれる、科学的社会主義、真の革命的理論はまだなく、まして、そのたたかいを指導する階級政党も生まれてはいませんでした。労働者階級は、このときまでは、自分たちの経験をたよりにして運動をいわば手さぐりですすめてきたのです。

したがって、これまでの時期は、労働運動の歴史のうえで、「社会主義思想の誕生とプロレタリアートの階級闘争の萌芽の時期」(レーニン)であったといえましょう。

しかし、一八四八年、ヨーロッパの労働者階級が革命闘争の中にはじめて独自の勢力として姿をあらわしたときに、これと時期をあわせて、科学的社会主義の理論が完成され、またこの理論にもとづいて、労働者階級の革命党の樹立をめざすたかいの第一歩がふみだされました。マルクス主義の理論の確立と、共産主義者同盟の創立がそれです。

マルクス主義は、いうまでもなくカール・マルクス（一八一八—一八八三年）とフリードリヒ・エンゲルス（一八二〇—一八九五年）によって完成された労働者階級の世界観であり、科学的社会主義の学説です。

マルクスもエンゲルスも、ドイツでいちばん早く資本主義が発展したプロイセンのライン州で生まれました。マルクスの父はユダヤ人の弁護士、エンゲルスの父は企業家で、ともに小ブルジョア出身の知識人でした。マルクスはベルリンとボンの大学で法律学を学びましたが、とくに歴史と哲学の研究に専心しました。

エンゲルスの方は高等学校をでたあと、父の意向にもとづいて商業の見習いをさせられるなかで、哲学その他の研究をすすめました。二人とも、ヘーゲル哲学の影響をうけ、当時唯物論の立場へとうつりつつあったヘーゲル左派のグループに属していましたが、一方のマルクスが、進歩的教授が大学を追われるのをみて、大学講師になることをあきらめ、専制に反対する民主的な新聞の編集にたずさわりながら、パリにでて社会主義者との接触をふかめ、みずから社会主義者になっていったとき、他方のエンゲルスは、父の命令でイギリスのマンチェスターにいき、ここでイギリスの労働運動の活動家たちと接触し、またイギリスの労働者階級の状態と運動を研究するなかで、これまた社会主義者になっていきました。そして一八四四年、この二人はパリで初めて会い、二人がそれぞれ同じ思想を発展させつつあることを認めあって、全く意気投合し、その後

終生の友、生涯の同志として、密接な協力をつづけることになりました。

二人は協力して、①世界史の諸事件、階級闘争のあらゆる歴史的経験を分析し、②また、とりわけ英・仏の活動家とたえず接触をたもちながら、当時各国に発展しつつあった労働運動と社会主義運動の経験を理論的に総括するとともに、③すんだ科学思想のあらゆる成果——とくに一九世紀のドイツ哲学、イギリスの古典経済学、フランスの社会主義の成果を、批判的に摂取し発展させることによって、科学的社会主義即ち共産主義の理論をうちたてたのです。そのさい、空想的社会主義の理論にたいする批判が重要な役割を演じたことは、いうまでもありません。

この間、二人は、英、仏、スイスなどに亡命していたドイツ人の社会主義者とも連絡をもっていました。しかし、しだいにこれらの人たちが陰謀主義的な、まちがった思想をすてて、二人の理論をうけいれるようになってきたので、二人はその要請をいれて、一八四七年にロンドンで秘密の宣傳団体である共産主義者同盟を結成しました。そして、この最初の国際共産主義組織の綱領として、二人はあの有名な「共産党宣言」を協力して書きあげ、一八四八年二月にロンドンで印刷して発表しました。「この著作のなかには、新しい世界観、社会生活の領域をふくむ首尾一貫した唯物論、もつとも全面的で深遠な発展学説である弁証法、階級闘争および新しい共産主義社会の創造者であるプロレタリアートの世界的、革命的役割についての理論が、天才的な明瞭さとあざやかさでえがかれている」とレーニンは書いていますが、たしかに、「宣言」は、マルクス主

義の理論の根幹となるすべての部分を、初めて体系的かつ全面的にあきらかにしていました。そしてそれは「万国の労働者団結せよ！」という、そのごすべての労働者の合言葉となるスローガンで結ばれていました。

しかし、ここで疑問をもつ人がいるかも知れません。マルクスもエンゲルスもともに小ブルジョア出身の知識人なのに、どうしてこの二人が労働者階級の世界観をうちたてることになるのだろうか。

その理由はこうです。こうした理論体系は、労働運動とおなじように、資本主義の経済関係に根ざすもので、資本主義がつくりだす大衆的な貧困と悲惨にたいするたたかいの中から発生してくる点でも、労働運動とおなじです。しかし社会主義の理論が成立するためには、その根は同じでも、労働運動とはべつの前提条件が必要です。理論をつくりあげるためにはたんに闘争をつみかさねるだけではだめで、人類がそれまでに発展させてきた科学的成果の集約にもとづく、ふかい科学的な洞察が必要なのです。ところで、資本主義社会で科学の担当者としてこうした研究をおこなうことができたのは、ブルジョア知識人でした。少なくとも当時の労働者はそうした研究をおこなうことができませんでした。そこで、科学的社会主義の理論は、まず最初に労働運動に結びついて労働者階級の立場にたつようになつた、マルクスとエンゲルスというブルジョア階級出身のもっとも良心的で天才的な知識人によって体系化され、ついで労働者につたえられて、労

働運動の中にもちこまれていくことになったのです。社会主義の理論が、労働運動の経験からだけではでてこないということは、わたしたちが階級的自覚をふかめ、理論的確信をつよめるうえで、階級的なたたかひへの参加とならんで、理論学習が、独自の重要性をもっていることを、はつきりとおしえています。

それから、さまざまの社会主義者がでてくるなかで、なぜこの二人だけが、労働者階級の世界史的な役割を正しく見ぬき、空想性を脱して科学的な社会主義の理論を確立することができたのでしょうか。

それには二人の天才的洞察力もさることながら、二人が生まれ育った時期がふかい関係をもっています。オウエンやフリーエなどの空想的社会主義者たちは、労働運動がまだ未発達であった一九世紀初期にその思想をつくりあげたのですが、マルクスとエンゲルスがその思想をききはじめたときには、労働者階級がすでに独自の政治行動を展開するまでに成長していました。だから二人は、空想的社会主義者とはちがって労働者階級の力と、その歴史的役割を洞察できたのであり、また空想的社会主義者たちが工業の発展によって労働者の悲惨がましていくのを恐怖の念をもってながめ、「歴史の歯輪」をおしとどめようと考えたときに、二人はこれとは反対に、プロレタリアートの力強い成長に望みをかけ、そのために力をつくしたのです。

二人は、労働者階級とその要求が資本主義制度の必然的な所産であって、この制度は、資本家



階級をつくりだすと同時に、不可避免的に労働者階級をつくりだし、これを組織するものであること、そして、人類を抑圧と搾取からすくうものは、個々人の善意のくわだてではなくて、この組織された労働者階級の階級闘争であること、社会主義とは、夢想家の思いつきではなくて、近代社会の発展の必然的結果であることを、明らかにしました。こうして二人は、労働者階級に自分たちがどういふもので、どういふ歴史的使命を負っているかということ、自覚させ、そして、社会主義を空想から科学にかえたのです。

### マルクス・エンゲルスの実践活動と理論の展開

一八四八年二月、「共産党宣言」がロンドンで出版された直後に、フランスで二月革命がおこり、つづいてドイツに三月革命がおこりました。

マルクスとエンゲルスはロンドンからパリに移り、さらにドイツへと潜入して、革命を推進することに全力をそそぎました。マルクスはケルンで民主主義的な新聞の主筆として活躍し、エンゲルスは武装闘争にすすんで参加したのです。

しかし革命的理論が労働者大衆のものになり、現実の力になるためには時間が必要でした。

「共産党宣言」が発表されたばかりのこの時期には、マルクス主義の影響力はごく限られたもので、まだ労働者の大多数には知られていませんでした。四八〇四九年の革命はヨーロッパ各国で敗北して、そののち政治反動が各国であれくるい、労働運動は一時退潮しました。マルクスは、反動勢力によって裁判にかけられ、ついでドイツから追放されました。彼はパリにいき、ここからも追われてロンドンへいき、生涯をとじるまでその地にとどまることになります。

しかし、敗北したとはいえ、労働者階級がはじめて展開した革命闘争の経験は、けっして無駄ではありませんでした。それは、すべての被抑圧者の解放のためではなく、自分のせまい階級的利益のためだけに革命に参加したブルジョアジーの裏切り、小ブルジョア民主主義者の動揺性、小ブルジョア社会主義者の理論的破産などを誰の目にもあきらかにし、マルクス主義だけが革命の歴史的試練にたえることのできるただ一つの社会主義理論であることを、確認しました。マルクスとエンゲルスは、反動の嵐の吹きすさぶなかで、共産主義者同盟を解散しなければならなかったのですが、こののち二人は、革命闘争の経験をふかく分析し、その理論をいっそう豊かにする仕事に没頭します。

たとえば、マルクスは、二月革命に関連して「フランスにおける階級闘争」、「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」というような、きわめて重要な論文を書きました。彼はこれらの中で、すでに「共産党宣言」の中でのべられていた、プロレタリアートが政治権力を獲得すること

によつてはじめて資本主義を廃止して社会主義社会をつくりあげることができるといふ考えをさ  
らに發展させて、階級的差別とその基盤となつてゐるいっさいの生産關係とを廃絶するためには、  
どうしてもプロレタリア独裁をとおらなければならぬといふ、マルクス主義の革命理論の根本  
命題を、明らかにしました。

また彼は、これらの論文の中で、資本主義のもとでは、農民層が少数の農業資本家と大多数の  
プロレタリアートへと必然的に分解していくこと、したがつて大多数の勤労農民の窮乏化がす  
むことをあきらかにし、大多数の農民の利害はブルジョアジーの利害とあいられないことを証明  
して、労農同盟の思想を完成し、「農民は、ブルジョアの秩序を打倒すべき使命を有する都市プ  
ロレタリアートを、自然な同盟者および指導者とみなすようになる」こと、この同盟がなければ  
すべての農民国でプロレタリア革命は勝利できないことなど、これまた労働者階級が革命をやり  
ぬくうえでどうしても忘れることのできない重要な結論を、ひきだしました。

一方、エンゲルスは、三月革命に関連して「ドイツ農民戦争」、「ドイツにおける革命と反革命」  
などの論文を書き、ドイツのブルジョアジーが三月革命で動揺してプロレタリアートを裏切つた  
のは、プロレタリアートの革命的進出をおそれたからだといふことを明らかにするとともに、この  
革命に参加した自分自身の経験を分析することによつて武装蜂起の原則を明らかにしました。蜂  
起は一定の法則にしたがつておこなわなければ失敗をおわることを彼は強調し、その原則として、

適切な時期を選ぶこと、攻勢戦術をとること、最後までたたかいぬく決意をもつこと、革命的組織に指導されること、をあげました。

こうして二人はこの時期に、今日も世界の革命的労働運動がかたときも忘れることのできないさまざまな重要な原則を、労働者階級の闘争経験の中から、つぎつぎに明らかにしていったのですが、さらにマルクスは、「経済学批判」、「資本論」などの著作をつうじて、その経済学説を全面的に展開していきました。

だが労働運動の退潮は、もとよりいつまでもつづくはありますがありません。とりわけ四八、四九年の革命ののち、一部の国では産業資本家が政治権力をにぎったことから、また他の国ぐには封建制に大きな打撃があたえられたことから、ヨーロッパの資本主義の発展はいっそう急速になり、労働者階級が広範に成長しはじめたのですから、五〇年代末になると、運動はいっそう拡大した規模でふたたび勢いをもりかえしてきました。たとえば、ドイツでは最初の労働組合組織が芽ばえ、一八六三年にはラッザールの指導でドイツ労働者同盟がつくられます。イギリス労働者は強固な職業別の全国組織をつくりはじめ、フランスの労働者はアメリカの南北戦争にさいして、南部を支援しようとしたナポレオン三世の政策に反対し、奴隷制反対のたたかいを開始しました。

こうした運動の高揚の中で、二人は実践活動へと呼びもどされます。そうしてストライキ闘争や、民族問題をめぐる労働者の大衆的な国際連帯活動の発展を背景にして革命的な国際労働者組織が

二人の指導のもとにつくられることになりませぬ。

国際労働者協会（第一インタナショナル）がそれで、この組織は、もう共產主義者同盟のような秘密の宣伝団体ではなく、合法的で大衆的な国際的革命組織として設立されたのでした。

## 第一インタナショナルの創立

労働者階級は、生まれながらにして資本家階級とのたたかいをはじめたのですが、それはまた、たたかいにたちあがると同時に、最初から国際主義的な傾向をつよくしめしていました。

それは、資本家とのたたかいをすすめていくうえで、どうしても、国際的に団結することが必要だったからです。たとえばイギリスの炭鉱労働者がストライキ闘争を有効にするためには、フランスの石炭労働者や船員の協力が必要でした。なぜなら、イギリスの資本家は、北フランスの石炭を買いとることで、ストライキの効果を減じ、ロックアウトで対抗することができたからです。

ところで一八五〇年代の末になると、さきにもべたように、ヨーロッパ各国で労働運動がふたたびつよまってきました。しかもドイツとイタリアの統一国家樹立のための闘争や、ロシア皇帝

## 性格

の支配下にあつたポーランドの人民の一八六三年の蜂起や、一八六四年におこつたアメリカの南北戦争などは、労働者階級の国際的関心をたかめ、さまざまな国の労働者がポーランドの蜂起にたいして連帯の意志を表明したり、イギリス労働者がアメリカ人民の奴隸制反対の戦いを支持する集会をひらく、などといった新しい動きがでてきました。このことが、労働者階級のもつ国際主義の傾向をさらに促進しました。

こうして各国労働者のあいだにおこつてきた、国際的な団結をもとめる気運のたかまりを背景にして、一八六四年九月二八日、ロンドンのセント・マーチンス・ホールで、国際労働者協会が創立されました。きつかけになつたのは、前年の末ちかくにイギリス労働者がフランス労働者にたいしておこなつた国際連帯のよびかけで、この呼びかけにたいするフランス労働者の回答を聞くための国際的集会がロンドンで開かれ、ここで、国際労働者協会——のちに第一インタナショナルと呼ばれるようになった組織の設立が決議されたのです。

労働運動が今日のように発展しておらず、したがって各分野ごとにつくられる各種の組織のあいだのちがいがいも十分に明確になっていませんでしたし、もとより国ごとに労働者階級政党がつくられていたわけではないので、協会には、労働組合、協同組合、共済組合、労働者教育団体などがいりまじつて参加していました。

また思想的にみると、労働組合運動によって部分的な社会改良を実現することしか考えようと

しないイギリスの労働組合主義、労働組合運動は効果がないといってこれを否定し、生産協同組合をつうじて資本主義を否定しようとするフランスのブルードン主義、資本主義を打ちたおすためには政府を破壊さえすればよいといってプロレタリアート独裁の必要を否定するバクーニン主義これまた労働組合によるたたかいを無意味だとして協同組合運動で社会主義実現をはかるドイツのラッサール主義などさまざまの潮流がその中にまじりあっていました。

マルクスとエンゲルスは協会にすんで参加しました。とくにマルクスは、この組織の中央集権的な指導機関である総務委員会に、ドイツ代表の書記としてくわわって、創立宣言、規約をはじめ協会の重要文書のほとんどすべてを起草し、事実上協会の活動ぜんたいを指導しました。マルクスはこの協会で「さまざまな国の労働運動を統合し、さまざまな形態の非プロレタリア的・前マルクス主義的社会主義を共同行動にむかわせるようにつとめ、これらすべての宗派や学派の理論とたたかうことによつて、さまざまな国の労働者階級のプロレタリア的闘争の統一的な戦術をきたえあげた」のです（レーニン「カール・マルクス」）。したがつて協会での活動は、マルクス主義を労働者大衆のあいだにひろめ、科学的社会主義と労働運動をむすびつけて、労働者階級の党を創立することをめざす、二人の闘争のもつとも重要な段階でした。

マルクスが一方で、さまざまの流派を階級的な共同行動へとひきいれるために、あらゆる配慮をおこないながら、他方で、具体的問題について正しい解決をしめすことによつて、また、部分的な

正しさをふくむ結論を不当に一般化した誤った判断に、正しい位置をしめしてやることによって、あるいはまた、出版物で正しい見解をしめしたり大会で意見の交換をおこなうことによつて、これらのあやまった思想とどんなにねばり強かつたか、これを克服していったか——このことは、当時マルクスが起草した文書の中にありありと読みとることができまじし、マルクス自身、エンゲルスその他に宛てて書いた書簡の中で、その苦心談を語っています。それは、具体的要求にもとづく統一行動とその中の革命党の独自活動の、手本であつたといえまじし。

たとえば、協会の綱領的文書であつた「創立宣言」にもそれはあらわれています。当時ブルードン主義者やラッサール主義者が生産協同組合運動の意義を過大評価して、これをつうじて社会主義を実現できるものと信じていたのにたいして、マルクスは、これらの人びとに門戸をとざさないようにするために、綱領を起草するさいに、協同組合運動が重要であることを書きいれます。

しかし、それが重要であるのは、資本家階級がいなくても労働者は生産をつづけることができるのだということをしめすからだ、その重要性の意味をあきらかにするとともに、それだけでは労働者の解放はできないことを指摘するのを忘れまじし。

そして労働者の解放のためには資本家の権力の打倒、労働者階級の権力の樹立がどうしても必要であるという正しい結論へとみちびいていったのでした。



## 第一インタナショナルの活動と労働組合運動の原則

国際労働者協会は、その綱領にあたるマルクス起草の「宣言」の中で、資本家の権力を打倒し労働者階級の権力をうちたてるといふ終局の目標をかかげていましたが、また八時間労働日の獲得、幼児の労働時間の短縮、婦人の深夜業の廃止など、日常要求のためのたたかいや、各国労働者のストライキ闘争も、指導しました。

今日からみてとくべつ重要な意義をもっているのは一八六六年ジュネーヴ開催の第一回大会が採択した、マルクス起草の労働組合にかんする決議です。

労働組合運動の意義を全くみとめようとしないブルードン主義者やラッサール主義者の主張、また労働組合のたたかいを経済闘争だけに限り、労働者解放のたたかいを忘れ去っているイギリスの労働組合主義者の主張など——こうした、今日までもくりかえしあらわれてくる、労働組合運動にたいする左からと右からの二つの間違つた見解があつたのにたいして、マルクスが起草して採択された「労働組合、その過去、現在、未来」という題の決議は、まず、労働組合が、直接労働条件の改善を目的にしてつくられたもので、労働者の日常的諸要求をまもるために欠くこと

のできない組織であることを指摘していました。

ついで決議は、労働組合は、意識するとしないとにかかわりなく、労働者階級の大衆的組織の中心になっているのだから、資本主義制度を廃止するための組織された促進手段として、いっそう重要性をもっていることを指摘し、さらにつぎのようにのべています。

「その本来の目的（日常的な諸要求をまもること——筆者）とはべつに、こんごは、労働組合は労働者階級の完全な解放という偉大な利益のために、労働者階級の組織の中心として意識的に行動することをまなばなければならぬ。労働組合はこの目的にすすむあらゆる社会的、政治的運動を支持しなければならぬ。労働組合は、自分を全階級の前衛闘士であり代表であると自認しまた、それをめざして行動するにあたり、組合の外部に未組織でいるものを、自分の隊伍にくわえないわけにいかない。労働組合はもつとも劣悪な給与をうけている労働者、たとえばとくに不利な環境のために抵抗力をうばわれている農業労働者の利益を注意ぶかくはからなければならぬ。労働組合の努力が、狭量な、利己的なものどころでなく、むしろ、ふみにじられた大衆の解放を目標とするものであることを、全世界になつとくさせなければならぬ」。

こうして、この決議は、労働者階級の経済闘争と政治闘争における労働組合の役割について、労働運動史上はじめて原則的な命題を確立したのです。それは、八〇年以上もたった今日、日本にいるわれわれが読んでも、自分たちのためにとくべつに書かれた言葉であるかのような気がす

るほどの、ふかい意味をもっていることを、読者は感じられるにちがいありません。

このほか、協会は、政治的自由をめざす労働者階級の闘争について、決議を採択し、政治的自由がうばわれていることは、人民の社会的進歩と労働者階級の解放とにたいする障害であつて、政治的自由はそれ自体が目的なのではないが、労働者階級の社会的解放のために、せひとも必要な条件であることを、あきらかにしました。

協会はまた、ロシア帝国の支配下にあつたポーランドやイギリス・ブルジョアジーの支配下にあるアイルランドの民族独立闘争を支援し、プロシヤやフランスの軍国主義がくわだてた侵略戦争に反対して平和のためにたたかいました。各国の労働運動は国際労働者協会の正しい指導のもとで一八六〇年代の末になると、あきらかに前進しはじめました。

フランスでは、賃金引上げと労働時間の短縮をもとめる労働者のストライキ闘争がたかまってきたが、これは、労働組合の闘争を否定して、生産協同組合をつうじて社会主義を実現しようとはかる、右翼的なブルードン主義の影響をフランス労働者がはなれてきたことの証拠でした。そして、労働者の闘争におどろいた政府が、協会の支持者にたいする弾圧を強化したにもかかわらず、フランスにおける協会の組織は破壊されなかつたばかりでなく、反対に、弾圧は協会発展の刺激になりました。

ベルギーでは、炭坑労働者のストライキをまもつて精力的にたたかうことによって、協会のべ

ルギー支部が、大きく成長しました。ドイツでは、労働者の協会にたいする支持がいちじるしくたかまり、このため、ドイツ労働組合連盟が協会の綱領を無条件で支持することをきめただけでなく、はじめは協同組合運動だけを社会主義実現の唯一の道だと主張していたラッサール派のドイツ労働者同盟の大会も、「協会と協定を結ぶ用意がある」という決議を採択しました。

イギリスでは、マルクスの指導する協会の総務委員会が、普通選挙の要求をかかげて、イギリス労働者の議会改革のための大衆運動で大きな役割を演じ、こうした闘争をつうじて多数の労働組合と連絡をとることに成功しただけでなく、その大部分を協会に加盟させることができました。またアメリカ合衆国の全国労働者同盟も、総務委員会と連絡をとるようになりました。

こうして一八七〇年まで、国際労働者協会は、マルクスの指導のもとに、各国にたいする影響をつよめ、各国の支部を拡大しつつありました。ことにドイツでは、一八六九年八月にアイゼナハで開かれた大会で、マルクス主義の立場にたつドイツ社会民主労働党が、ウイリアム・リープクネヒトやアウグスト・ベーベルの指導のもとに創立され、協会の第四回大会にその代表団が姿をあらわしたことは、マルクスとエンゲルスにみちびかれる協会の指導のもとに、国際労働運動がたどりはじめた新しい発展の方向を、はやくも先づけていたのでした。

## バクーニン主義者の分派活動

こうして国際労働者協会がマルクスとエンゲルスの指導のもとにその歴史的な役割——労働者階級の闘争の統一的な戦術をきたえあげて、各国にその国の労働者階級の自主的な運動をつくりあげていくという役割、とくに労働者階級の革命党をつくりだしていくという役割——を着々と果たしていったときに、こうした協会の活動を、そのままますますに発展させていくのをさまざまけるような、二つの事件がおこりました。

一つは、協会のなかにもぐりこんできた無政府主義者であるバクーニン一派の分派活動でした。協会の活動の初期に、主要な日和見主義の危険は、労働者のたたかいとめない右翼的なブルードン主義からうまれていましたが、一八六八年のブリュッセル大会まででブルードン主義の思想がほぼ粉碎されると、こんどはこれにかわって、バクーニン主義の左翼日和見主義の危険があらわれてきたのです。

その指導者M・A・バクーニン（一八一四〜七六年）は、ロシア貴族出身の小ブルジョアの革命家で、当時すでにフランスの労働者のたたかいの経験をとおして、ブルードン主義の思想的破産が

あきらかになり、マルクス主義の影響がつよまってきていたので、彼はブルードン主義と共産主義をごちやませにした独得の理論——無政府主義をとなえました。

彼はいつさいの国家権力を否定して、国家を破壊しさえすれば、そのときには資本主義体制も自然に消滅する、と主張しました。

### 労働組合

労働組合運動についてはあるていどその必要を認めましたが、彼は、ストライキを人民の全面的武装蜂起の予備段階としてだけ評価し、それを労働者階級の大衆的基本組織として重視する気はありませんでした。

そして彼は、労働者階級政党の必要、その政治闘争への参加、資本主義をうちたおすための闘争を指導する労働者階級の能力などをすべて否定し、社会主義への移行のさいにせひともとらなければならぬプロレタリア独裁を否定しました。要するにバクーニン派が主張していたのは小ブルジョアのなあせりからくる一撥主義的暴動にすぎませんでした。

こうした無政府主義の社会的地盤になったのは、資本主義の発展によって零落していく小ブルジョアジーや手工業労働者で、スペイン、南イタリア、南フランス、スイスの一部など、経済発展がおかれて小・零細企業がたくさんにのこっている地域におもに支持者をもっていました。革命的な大言壮語をし、陰謀や自然発生的な蜂起の戦術をとっているだけに、客観的には挑発的役割をはたすことになり、それは組織的な労働運動の発展にとってとくに有害でした。

バクーニンに指導された彼らは、ブルードン主義者が勢力をうしなつたのち、協会内で反マルクス主義勢力の中心となり、協会の規約に反して、自分たちだけの分派組織である「社会民主同盟」の組織を秘密に温存して、一八六九年以後、国際労働者協会の機関を乗取るための分派活動に専心しはじめたのです。

### パリ・コンミューン

いま一つは、一八七一年三月一八日のパリ・コンミューンの成立です。それは、パリの労働者が、七十二日間という短い期間ではありましたが、歴史がはじめていらはじめて国家権力をその手に握つたという、大事件です。なぜそういうことがおこつたかを知るためには、一八七〇年にはじまつた普仏戦争から説明する必要があります。

ドイツのプロイセンの反動地主層を代表する宰相ビスマルクは、かねがね、フランスと戦つて優秀な鉄鉱石と石炭がでるアルサス・ローレーヌの地域をうばいと、そうすることによつて、プロイセンの指導のもとにドイツの国家統一を実現しようとしていましたが、たまたまスペインの王位継承問題がもちあがつた機会をとらえて、彼はプロイセン王のナポレオン三世あての電

報に手をくわえて、これを怒らせるようにしむけました。

これは、〃エムス電報事件〃というビスマルクの悪がしこさを象徴する事件ですが、これまた好戦的で、軽薄で、国内政治のいきづまりを対外戦争でなんとかきりぬけようと考えていたフランスのナポレオン三世は、この挑発政策にまんまとひっかかって、一八七〇年七月、プロイセンに対して宣戦を布告します。

こうして普仏戦争がおこりましたが、いざ戦端をひらいてみると、戦局の帰趨はすぐさまあきらかになりました。用意万端ととのえていたプロシア軍国主義の軍隊によってフランス軍はたちまち打ちやぶられ、九月初めには自ら総司令官をかつてでて前線にいた皇帝もろとも、フランスの一〇万の大部隊がプロイセン軍に降伏してしまいます。

パリの労働者は、緒戦でフランス軍が敗れたときから、共和制の宣言と全市民の武装を要求して、デモを開始していましたが、この九月の大敗北の報せをきくと、すぐさまたちあがって腐敗しきった帝制をたおし、その圧力で共和派ブルジョアジーに臨時政府をつくらせ、共和国を宣言させました。このときまで大多数の労働者は、帝制をたおして共和制を実現すれば、ブルジョアジーをふくめて全国民が一致して祖国防衛のたたかいにたちあがるものと期待していたのです。しかし、労働者の期待はずれました。共和国政府をその手ににぎったブルジョアジーは、領土割譲と多額の賠償を要求して侵入をつづけるプロイセンに対して、本気でたたかおうとしない



ばかりか、降伏政策、祖国を売りわたす計画を、一貫して追求しはじめたのです。パリ包囲の危険が刻一刻とせまっているのに、政府は、九月にパリのあらゆる階層の人々によって編成された国民軍にたいしては、ろくな兵器もわたしません。そのうえ、フランスに王政を復活させるといふ条件さえのもので、なんとか講和を実現させようと、外交的な画策をつづけているのです。

ブルジョアジーと政府は、労働者階級が武装することに恐怖を感じており、ブルジョアジーの利己的なせまい階級の利益をまもるためには、首都も祖国も共和制もすべて売り渡す気である——この事実にはパリの労働者が気がついたのは、その後のフランス政府軍のなかば意識的な敗戦につぐ敗戦と、一三二日にわたる敵軍包囲下のパリ籠城の、苦しい経験をとおしてでした。一〇月にはいるとパリ労働者のあいだで反政府的スローガンをかかげたデモがはじまり、ついで一〇月末と翌年一月には、少数のパリ労働者が蜂起をおこしました。そして政府が、人民蜂起の失敗に乗じて革命運動の弾圧にのりだし、さらにプロイセンに対する降伏と屈辱的な講和締結をおこなったうえで、三月一八日パリ国民軍の武装解除にとりかかると、民族を裏切り、祖国を売り渡した政府にたいするパリ労働者の怒りは、ついに爆発しました。労働者階級を先頭にしてパリ市民は英雄的な蜂起へとたちあがったのです。

蜂起を指導したのは、国民軍の中につくられていた大衆的政治組織である、セーヌ県国民軍共和連盟の中央委員会でした。政府軍兵士は民衆にむかって発砲することを拒み、官庁の建物や兵

營、市庁舎はたちまち占拠され、政府はヴェルサイユへと逃れました。中央委員会は権力を掌握すると、ただちに普通選挙で選挙をおこない、新しい、人民の国家権力機関であるパリ・コミューンを選出しました。

八六名の議員で構成されたコミューンは、立法機関であると同時に執行機関で、コミューン会議が採択した布告、法令はその委員会の手でただちに実施にうつされました。つまり、蜂起した人民は、おどろくべき創意を発揮し旧国家の官僚機構や軍隊、警察を粉碎したのち、ブルジョア議会制度とも手を切ってコミューンという全く新しい型の人民の統治機関をつくりだしたのです。

それは歴史上はじめてつくられたプロレタリア独裁の政権で、その多くの布告は、社会主義的傾向をもっていました。資本家が逃亡した工場、ついで大きな兵器工場が、労働者の生産組合にひきわたされ、夜間労働が禁止され、最低賃金制が実施されました。勤労者の家賃や借金の支払は軽減され、無償の義務教育制がかけられました。

権力をその手ににぎった労働者は、こうして創意をもってつぎつぎに問題を処理していきました。しかし、コミューンの中にはさまざまな意見がありました。国際労働者協会のフランス支部もまだ強固でなく、この中にもさまざまな見解があり、統一を欠いていました。まして、革命を指導できる単一の労働者階級政党は、まだ生まれてはいませんでした。マルクスは、普仏戦争で

フランスが敗れて帝政が打倒され、共和制がうちたてられたときに、フランスの労働者にむかつて、早まった時期はずれの蜂起をいまして、共和制のもとで獲得した民主主義的自由を利用してまず強固なプロレタリア党をつくりだすことをすすめていました。しかし蜂起が事実となつてあらわれると、彼は国際労働者協会をつうじてこれに熱烈なあいさつをおくり、できる限りの手段をつうじて、情報の提供、正しい措置の示唆、あやまったやり方にたいする警告などをおこなひ、この闘争の支援に全力をそそぎました。しかし、こうしたロンドンからの援助には、限りがありました。

そのうえ、こうした状況のもとでは当然のことですが、コンミュンも多くの重大な誤りを犯しました。蜂起すると国民軍中央委員会はすぐさまコンミュン選挙にとりかかりましたが、これは重大な誤りの一つでした。選挙をあとにひきのばしても、まず真先に政府の逃亡先であるヴェルサイユへ進撃して、ブルジョアジーの政権にとどめをさすべきでした。そうはしないで選挙をやっているあいだに、政府はプロイセン軍にたのみこんで、フランス軍の捕虜を釈放してもらひ、反撃の準備をととのえたのでした。またコンミュンはフランス銀行の貨幣をただちに没収し、パリにとどまっている革命の敵を容赦なく取り締り、さらに、農民と同盟するためにもっと努力すべきでした。しかし、こうしたことの必要は理解されていませんでした。

四月二日、パリに対する政府軍の攻撃がはじまりました。経験ある軍事指導者を欠き、圧倒的

な数の政府軍を敵にまわしながら、パリの労働者はよく約五〇日もその攻撃にたえました。しかし農民支持を欠き内部統一もされず、革命党の指導をもたないコンミュンは勝利することはできません。五月二一日にはついに、政府軍にパリ市内への進入をゆるし、五月二八日血の海の中で最後のバリケードを占領されたのです。三万の労働者男女が殺されました。四万五〇〇〇人以上のものがとらえられ、そのうち一万五〇〇〇人以上が、死刑にされるか、もしくは監獄にぶちこまれ、南太平洋の島に流されました。

## 第一インタナショナルの解散

パリ・コンミュンは七十二日間の短い生涯を血の海の中でとじました。しかしこの英雄的なたかいが各国の労働者階級にあたえた影響は、絶大なものでした。

革命的社会主義への関心はつよまり、国際労働者協会の威信はつよまりました。しかし、フランスをはじめ各国の政府は、威信をたかめた協会にたいする弾圧を強化し、協会支部の活動はひどく困難になりました。しかも協会内では、バクーニン主義者の分派活動がつよめられていました。そこでマルクスとエンゲルスは、一八七一年九月にひらかれた協会のロンドン協議会で、「有

産階級によってつくられたすべての旧政党とはことなる「労働者階級政を各国ごとにつくることを決議し、ついで翌七二年九月のハーグ大会で、この決議の確認と、バクーニン派の除名を決定すると、協会の本部を一時ニューヨークに移すことをきめました。

総務委員会がニューヨークに移されると、これとヨーロッパの労働運動との連絡はいつそう困難になり、総務委員会の活動はしだいによわまっていき、一八七六年七月について国際労働者協会第一インタナショナルは、その歴史的任務をおわって解散したのです。

### この章のまとめ

以上、この章では、産業革命が進展するなかで小ブルジョア知識人のあいだに生まれてきた空想的社会主義、マルクス・エンゲルスによって展開された科学的社会主義、そしてこの科学的社会主義の理論にもとづいておこなわれた、共産主義者同盟や第一インタナショナルをつうじてのマルクスとエンゲルスによるプロレタリア党創立のためのたたかい、そして最後にパリ・コミューンの蜂起という、世界労働運動の歴史に一時期を画する大事件についてのべました。

空想的社会主義は、産業革命をつうじて資本主義が本格的な発展をとげるとともに、資本主義のもつ根本的矛盾はつきりと表面化したのにたいして、この矛盾を感じとった小ブルジョア知識人が、頭の中でつくりだしたものでした。それは資本主義のもつ悪をするどく指摘していたこ

とは事実ですし、資本主義を否定しようとする願いにおいては、正しいものをもっていましたが、社会発展の法則とは無関係に、ただ、こうありたいという願望のうえにきづかれた理論であったので、「空想」にすぎず、労働者階級のたたかいをみちびくことのできる「科学」ではありませんでした。

これにたいして、マルクスとエンゲルスは、歴史発展の法則、労働運動発展の法則をあきらかにし、労働者階級が課せられている世界史的任務を科学的にあきらかにすることによって、科学的社会主義の理論をうちたてました。それは、労働者階級自身に、いっさいの搾取と抑圧から人類を解放するというその世界史的使命を自覚させ確信させるとともに、その使命をやりとげるための科学的戦術をあきらかにするにだてをあたえてくれました。このときまで、いわば手探りでたたかいをすすめてきた労働者階級は、科学的な指針を手にすることができたのでした。

マルクスとエンゲルスは、こうした科学的社会主義の理論をうちたてるとともに、それにもとづいて、共産主義者同盟と第一インタナショナルの創設と指導をおこないました。それは、労働者階級がその世界史的任務をはたすためにぜひとも必要な労働者階級政党の創設のためのたたかいでした。

こうしたたたかいが実を結びつつあったときにおこったパリ・コンミュンの事件は、労働者階級こそが、階級の利益ばかりでなく民族の利益をまもってたたかうことのできる唯一つの階級

であり、ブルジョアジーはブルジョアジーの利益のために民族の利益を売りわたすものであることを、はっきりさせました。それと同時に、この事件は、労働者階級は、労働者階級と民族の利益をまもり社会主義へとすすんでいくためには、みずから権力をその手に握らなければならないし、かならず握るようになること、また、労働者階級がプロレタリアート独裁をうちたてる場合には、ブルジョアジーがつくりあげていた旧来の国家機関を破壊し、新しい国家機関をつくりださなければならぬということ、事実をもって証明し、マルクス主義の正しさをあきらかにするとともに、マルクス主義の理論をさらに豊かにしました。

《参考文献》

- 1 マルクス「共産党宣言」
- 2 エンゲルス「共産主義者同盟の歴史」
- 3 マルクス「『国際労働者協会、ジュネーヴ大会への臨時総評議会代表にたいする個々の問題についての指令』から」
- 4 マルクス「フランスにおける内乱」





第四章  
第二インターナショナルの時代



## 一八七〇～一九〇〇年代の労働運動の特徴

普仏戦争（一八七〇年）がおわってから一九世紀の末までの約三〇年間は、世界史の発展からみても、労働運動史の発展からみても、その前後の時代と区別される一つの時期をかたちづくります。

西欧の先進諸国とアメリカ合衆国では、一八七〇年頃までにすでに産業革命をおわっており、支配的となった工場制工業は、電動機や内燃機関というような新しい技術的成果ともむすびついて、いっそう急速に発展します。このため、資本の集中はすすみ、中小資本は淘汰され吸収されて、これらの国で独占資本がしだいに形成されていきますし、また、これらの国の資本は後進地域に進出して、これをその支配下におさめ、植民地体制をつくりあげていきます。

他方、政治の面からみると、これまでは、イギリス革命（一六四〇—一八八年）とフランス革命（一七八九年）のあとをうけて、ブルジョア革命と国家統一をもとめるための革命的闘争の嵐がこれらの国でつきつきにまきおこっていましたが、イタリアが一八七一年に、ドイツが同年普仏戦争に勝った直後に国家統一をやりとげ、アメリカ南北戦争（一八六一—一八六五年）で奴隷制農園主

の支配がうちたおされたのを最後に、ヨーロッパとアメリカのこれらの国では、ブルジョア革命と民族国家の形成の課題はいちおう解決されて、以後三〇年間は内外ともに比較的平和な時代が過ぎました。

こうした情勢の中で、労働運動の発展にはつぎのような特徴があらわれてきます。

第一に、工場制工業の発展によって、西欧諸国とアメリカでは工場制工業のもとで働く近代のプロレタリアートが数のうえでいちじるしくふえ、これまでの産業革命期にまだ多数のこつていた手工業的熟練労働者にかわって、労働者階級の中心部隊となり、労働運動の基幹部隊になってくるということです。

第二に工場労働者が運動の中心にたつようになると、労働組合運動が組織的に強固なものになり、真に恒常的な大衆的組織になってきます。組合の全国中央組織もでき、国際労働組合組織もつくられるようになります。また、小ブルジョア的な空想的社会主義の潮流が目立って後退して、科学的社会主義＝マルクス主義が労働運動を支配する主要潮流となり、労働者階級の政党が各国につくりだされてきます。西欧諸国とアメリカで今日まで存続している労働組合中央組織ができあがり、国際労働組合組織や労働者政党の組織がほぼ今日にちかいかたちで整備されるようになったのは、この時期のことです。

第三に、それ以前の時期や、資本主義がいよいよ帝国主義の段階にはいった二〇世紀いごの時

期とちがって、わりあいになやましい平和な雰囲気がつづいていて、直接的な革命情勢があらわれてこないで、労働者階級は、はなばなしい闘争を展開することはありませんが、運動は幅と深さをまし、組織を整備することによってその力をつよめ、社会、経済、政治の各方面にわたって資本家階級からさまざまな譲歩をかちとっていきます。

第四に、すくなくとも一八四〇年代のはじめまでは、イギリスの労働運動が先進的な役割を演じており、ついで、フランスの労働者が、一八四八年の革命からパリ・コンミュンの時期にかけて、革命的闘争の中心にたってきましたが、パリ・コンミュンの敗北ののちは、ドイツの労働運動が指導的な役割を演ずるようになります。

第五に、労働者階級の力が成長し、その組織化がすすんだために、資本家階級は経済、社会、政治の各方面にわたってさまざまな譲歩をおこなわなければなりませんでしたが、こうした譲歩社会改良は、当時の平和的な雰囲気ともあいまって、労働運動の中に日和見主義の潮流をそだてます。この日和見主義は次の帝国主義の時代になって完全な裏切りの潮流へと成長するのですが、西欧諸国とアメリカではもうこの時期に、国ごとにさまざまな陰影のちがいをもちながら、あらわれてくるのです。

労働運動史にあらわれた、一九世紀の終りの三〇年間の時期のおもな特徴を一口でいうならば、以上のとおりですが、こうしたことをまえおきにして、次に、各国の運動と国際的な運動につい

て、すこしたちいって眺めてみることにします。

## イギリスの労働組合主義

イギリスでは、一八五〇年頃から、あらたにうまれた工場制工業で働いている新しい熟練労働者の、強固な全国的職業別組合が組織されはじめました。

それまでの労働組合も、すでに労働者の全国的結集をめざして努力するようになっていましたが、しかし、こうした組合は、無報酬ではたらく非常任の指導者の自発的な情熱にもつぱらたよりに、戦闘的でありながら組織が十分にかたまらず、組織しては資本家の圧迫でくずされ、ふたたび組織しては不況の中で解散におこまれるという、きわめて不安定な組合組織でした。ところがこんどできた組合は、有給の常任委員会をもち、事務所をそなえ、財政的にもしっかりしていて、ほんとうに恒常的な組織といえるものでした。

こうした組合は、組合運動の中に、労働者の日常要求にかかわる、こまかな問題と組織そのものについての新たな関心をもちこみ、また長期的なたたかいをすすめていくうえにぜひとも必要な実務的な責任感をもちこむことによつて、運動を一步前進させました。事実、今日イギリスにある

全国的労働組合のいくつかは、この時期に組織の基礎をすえたのでしたし、一八六八年には、こうしてできた強固な職業全国組合があつまって、イギリス労働組合会議(TUC)という今日もつづいている全国労働組合中央組織をつくりあげたのです。

こうして、この時期にうまれてきた職業別組合運動は、一面でたしかに積極的な役割を果したのですが、しかし、それがもう一つの面——せっかくチャーチスト運動まで前進をつづけてきた階級的運動を、一步後退させる面をもつていたことを、見逃すことはできません。

この新しい組合——それは新型組合と呼ばれましたが——は、組合員を熟練労働者にだけ限り、その他のものは排除して、もっぱら熟練労働者の利益だけを追求しました。幹部は闘争をきらつて、労資協調主義をとり、また職場の労働者や組合支部が自主的な闘争をおこなうのをきらつて、中央集権的な幹部指導の機構をつくりあげました。たたかいの中心スローガンは、「利潤の公正なわけまえ」にあずかることでした。組合は、熟練労働者だけではなくすべての労働者を団結させるのでなければ、賃金・労働条件の根本的改善はできないし、まして労働者階級の解放はできないということをお忘れ、資本主義のもとで労働者の要求をすべて解決できるものと考えて、運動の基本を労資協調におき、たたかいをもっぱら資本主義の枠のなかでの部分的な改良をめざす闘争にかぎる傾向があつたのです。

新型組合は、組合員の共済制度の完備に熱中し、ストライキをすれば、すべてスト手当を給付

しました。そのためストライキの費用が大へんかさむようになると、組合指導者は「ストライキはすべてまったくの浪費である」といつて、ストライキを否定するようになりました。チャーチスト運動にみられるように、世界にさきがけて政治闘争を展開したイギリスの労働者階級が、なぜそうした戦闘的な伝統を急にうしない、こうした改良主義・階級協調主義の道にふみこんでしまったのでしょうか。

それは、イギリスのブルジョアジーが他の国ぐにをさしおいて一八三〇年代にいちはやく産業革命をおわり、世界の工業を独占する地位を獲得したという事実と、関係のあることでした。世界の市場を一手に握った彼らは、いたずらに労働者と紛争をつづけて生産を低下させるよりも、たとえ少々賃金や労働条件をひきあげることになったとしてもこうした紛争をさげ、生産をあげたほうが、いっそうもうかる、と判断するようになりました。そこでこの時期になると、イギリスの雇主たちは工場制工業で働いている熟練工の賃金と労働条件を改善しました。熟練工の生活水準は中間層なみになりました。資本家たちは、こうしたやり方で、イギリスの工場労働者のあいだに階級協調主義の幻想をふりまき、労働運動を骨抜きにしようとはかったのです。

こうした事実を注意ぶかく眺めていたエンゲルスは、「イギリスのプロレタリアートはますますブルジョア化しつつある」「すべての国民のうちでもっともブルジョア的なこの国民は、どうやら結局はブルジョアジーとならんで、ブルジョアの貴族とブルジョアのプロレタリアーをもつ



労働組合主義

ことを目標にしているようだ」とマルクスに書き送っていますが、事実、イギリスの少なくとも熟練労働者は、資本主義をうちたおす必要はない、資本主義の枠のなかで公正な賃金と労働条件を獲得するように運動すれば、自分たちの生活を無限に改善していける、と考えるようになりました。

一八四八年いご、チャーチスト運動が急激におとろえていった根本の理由はそこにありましたし、そのご約四〇年ちかくもイギリス労働運動が社会主義をわすれてしまう理由もそこにありました。そして、あらたにつくられた全国的職業別組合もこうした思想によって指導されていたの

このように、労働組合さえあれば、資本主義のもとで労働者の要求をすべて解決できるものと

考えて、階級的にたたかおうとせず、したがってまた政治闘争もやろうとしない思想を、労働組合主義と呼びますが、それは要するに、イギリス資本家が、世界の工業を独占することによって手にいれた特別のもうけ——超過利潤——の一部を、労働者、とりわけ熟練工になげあたえて、これを「買収」し骨抜きにすることによってつくりだされてきた思想といえましょう。

もつとも、それだからといって、イギリスの労働組合主義者たちが、この時期に、政治的なたかいを全くしなかつたというわけではありません。九時間労働日を獲得するために、組合のあいだに広範な同盟がつくられましたし、また、団結権を獲得していたものの、組合活動はピケットの禁止その他の面で幾多の制限をうけていたばかりでなく、組合の法的地位も、労働者は組合

に團結することはゆるされるが労働組合自体は法の保護をうけないという、きわめて不安定なものであったので、各組合は連携を強化して労働組合権の拡大のためにたたかいました。

全国中央組織であるイギリス労働組合会議が結成されるようになったのも、実はこのたたかいを効果的にすすめることが直接の目的だったのであって、こうしたたたかいの力で、一八七六年には新しい労働組合法が成立し、イギリス労働者はだいたい今日もっているような労働組合の諸権利を獲得したのです。

また、アメリカで南北戦争がおこったときには、イギリス政府が南部の奴隷制農園主の側を支援したのにたいして、イギリスの労働組合たちは、北部支持の熱烈な集会を幾度もひらいて政府に圧力をかけました。また、国際労働者協会（第一インタナショナル）が創立されたときには、イギリスの組合員は、ヨーロッパの低賃金労働者が国内に流入して、スキヤップの役割をはたしつつあることに關心をもっていたため、これを阻止する観点から協会にすすんで参加していきました。そうしてその指導をうけながら一八六七年には選挙法改正をかちとり、都市労働者にまで選挙権を拡大させることに成功したのです。

しかし、一八八〇年代の末になって、ドイツ、フランス、アメリカなど工業の発展によってイギリスによる世界工業の独占がやぶれる頃になると、こうした労資協調主義にたつて熟練労働者だけの既得権をまもることに専念する組合は、その欠陥をバクロしました。

イギリス資本家は、海外市場での競争激化で、これまでの超過利潤をうしなひはじめたので、未組織の不熟練労働者だけではなく、組合員である熟練労働者の賃金、労働条件にたいしても、きびしい攻撃をむけはじめました。労資協調の労働組合主義ではだめで組合は階級的立場にたつたたかわない限り、その組織の力さえ維持できないことがはっきりしてきました。

そこで一八八〇年代の末になると、組合運動のそとでそだった知識人のマルクス主義者と、その影響をうけた若い組合活動家との指導で、これまで未組織であった広範な不熟練労働者大衆のあいだに「新組合運動」と呼ばれる、新しい組合運動が怒濤のような勢いでおこってきました。

当時、イギリスを底なしの不況がおそっていました。この不況は、イギリスの世界における工業独占がおわりをつげたことに由来するもので、そのため熟練労働者の賃金も打撃を受けましたが、これまで未組織であった労働者大衆の状態はいっそう悪化しました。そして未組織労働者大衆のあいだにもりつもった不満と怒りが、爆発するときがきたのです。

最初にたちあがったのは、社会主義者に指導されたロンドンのマツチ工場の婦人労働者たちでした。このストライキの成功が全体に火をつけました。エンゲルスはこのときのことを「軽いひとおしで、雪崩全体がすべりだすようなもの」であったと、あざやかに描きだしていますが、事実そのとおりで、これにガス労働者がつづき、さらに、資本家階級からは人でなしのように言われ、熟練労働者からさえ同じ仲間とはみなされていかなかったロンドン港湾労働者が、同じく社会主義

者の指導のもとにストライキにはいり、この世界最大の港を完全にマヒさせ、世界を震撼させたのです。

ストライキ闘争にたちあがると同時に、この不熟練労働者たちは、たたかいの中で組織化をすすめました、しかも彼らがつくった組織は、新型組合のそれとはおよそちがったものでした。それは、階級的なたたかいを信条とし、そのためにすべての労働者の団結をめざして、労働者を産業別に組織することを主張していました。この運動は、いきづまっていた「新型組合」にも影響し、その門戸を不熟練労働者にもひらいてこれを産業別組合に再編成していくきっかけをつくりだしました。

こうしてイギリスの組合運動はその幅をいちじるしく拡大し、大衆的な性格をつよめるとともに、一八九四年のイギリス労働組合会議の大会で、産業の全面的国有化を要求する決議が圧倒的多数で採択されたことからわかるように、全階級的な立場でたたかう方向をつよめて、一時はイギリスの労働組合主義の潮流はここで消滅するかのようになりました。

しかし、事態はそう簡単にはすすみませんでした。というのは、この頃ちようどその支配を確立しつつあったイギリスの独占資本は、海外で七つの海にまたがる大植民地帝国を着々ときざきつつあり、イギリス独占資本は世界の工業独占にかかわるこの植民地の独占を基礎にして、このうち二〇世紀に入ってからもおその譲歩と「買収」の政策をつづけることができました。

このためにイギリスでは新組合運動の勝利は徹底せず、ふたたび労働組合主義が力をもりかえして、今日までもなおその伝統がつよく残ることになります。

### アメリカの実務的組合主義

アメリカ合衆国でも、組合運動はイギリスとかなり似かよった発展の道すじをたどりました。アメリカでは、イギリスの移民労働者が多数いたために、労働組合運動は割合早くからはじまり、一八世紀末には最初の労働組合が組織されましたが、未開の西部に自由な土地があったので、生活が苦しくなった労働者は西部へ移住して農民になるものが多く、労働者は階級としてなかなか固定せず、したがって組合運動も、階級的成長がおくられました。

南北戦争後の一八六六年になって最初の全国労働組合中央組織である「全国労働組合」が結成され、一八六九年には、「一人にくわえられた危害は万人の問題だ」というスローガンをかけ、「労働騎士団」という半非合法的な全国組合ができました。

この二つの組織は、ちようどイギリスで一八三四年にできた全国労働組合大連合に似た性格をもっていて、熟練労働者も不熟練労働者も、外国生まれの労働者も黒人労働者も、いっさいがっ

さい團結させることを目指し、新しい社会秩序をつくりだすことを目標にかかげていた点もそっくりであり、その点に長所がありました。組合員の大多数はまだ近代的工場労働者ではなく、オウエンやフリーエの空想的社会主義の影響をつよくうけていました。

このため、協同組合運動をつうじて社会改革をおこなうことに大きな期待をかけ、結局全国労働組合は六年後に崩壊し、また、労働騎士団は、七〇万の組合員のあいだにもりあがってきた、後述の八時間労働日実現をめざすゼネストの闘いを否定することによって、一八八〇年代末にその組織をつぶしてしまいました。

しかし、この間に一八七〇年いごアメリカ資本主義も独占の形成期にはいっており、あらたに労働運動の中心にたつようになったのは工場労働者でした。

アメリカの工場労働者は、この時期には資本家と政府の側のあらゆる弾圧に抗して、断固たるたたかいをすすめてきました。たとえば一八七七年には鉄道労働者がアメリカ史上最初の全国的ストライキにたちあがりしましたが、このときに当局は軍隊をつかってこれを弾圧して、死者は数十人、負傷者は数百人におよびました。一八九二年にはUSスチールの前身であるカーネギー鉄鋼会社のホームステッド工場の労働者約四、〇〇〇名は、会社側の賃下げと組合破壊の攻撃に對抗して工場を占拠し、会社側が雇った暴力団と銃をとってたたかい、さらに州兵部隊の出動にも屈しないで五カ月間もたたかいつづけました。

さてここで、アメリカ資本主義がこの時期いらい今日にいたるまで労働運動にたいして伝統的にくわえてきた攻撃が、どのようにすさまじいものであつたか、それがまたどんな方法ですすめられたかということに、ここでちよつとふれておく必要があります。

たまたかう労働者にたいしては、今日西部劇でみられるような、ピストルやカービン銃をもつた資本家お雇いの暴力団がさしむけられ、ついで州兵や連邦軍がさしむけられました。しかしとくに注目しなければならぬのは、一八七五年のペンシルヴァニア炭坑の労働者の闘争のときも、一八八六年のヘイ・マーケット事件でも、つねに資本家お雇いの「私立探偵局」が登場し、その一員が労働組合組織の中にもぐりこんで挑発をおこなつたり、裁判でにせの証言をおこなつたり、「誰ともわからぬ者」がとつぜん爆弾をなげて、それを機会に組合が弾圧され、指導者が逮捕され、絞首刑に処せられるなど、悪質なフレーム・アップ（でっちあげ）の方法が一貫してとられることです。こうしたやり方は、連邦警察FBIや軍の特務機関などをつかつての、今日アメリカ帝国主義者の労働運動弾圧のやり口にそのままうけつがれてきています。

アメリカの労働者は、こうした攻撃とたたかい、どこの国の労働者よりも多くの血をながしてたたかいつづけてきたことは、事実です。しかしアメリカの労働者階級には、一つの大きな弱点がありました。さきにも述べたように、一九世紀の末まで西部に未開の土地があり、このことが労働者階級を階級として固定化させなかつたこと、新開地で労働者が不足し、ヨーロッパにくら

べて高賃金であつたこと、そしてヨーロッパのさまざまな国からちがつた言葉をつかう移民労働者が多数流れこんだこと、などにわざわざいされて、階級的な意識、階級的な団結の意識が成長しにくかつたということが、それです。

労働力が不足していたために、賃金と労働条件がわりあいよかつたことから、八時間労働制を要求するたたかいなどは、ヨーロッパ諸国にくらべてはやくすすみましたし、賃金や労働時間など、経済的要求のためには、アメリカの労働者はきわめて戦闘的にたたかいました。しかし、階級意識の成長はそれにとまなつていながつたのです。そこで、アメリカでも、二〇世紀にちかづくにつれて独占資本が形成され、この独占資本がイギリス独占資本とおなじように、工場内の熟練労働者の買収にのりだすと、その戦闘性は、急速に後退していきます。

このことは何よりもよくしめしていたのは、アメリカ労働総同盟がたどつた道すじでした。

さききのべたような弾圧に抗してのたたかいをすすめるなかで、アメリカの労働者階級は、工場制工業の中にでてきた新しい熟練工を中心にして、一八八一年にあたらしい全国的職業別労働組合の連合体をつくりあげ、一八八六年いごはアメリカ労働総同盟AFLと名乗るようになりました。八時間労働日の要求のためにたたかうことよつて急速に労働騎士団にとつて代つたこの組合は、はじめは戦闘性をもち、指導者のサムエル・ゴンパースも社会主義の立場にたつていました。が、しかしいつたん組織を確立して独占から若干の譲歩をかちとると、それは右翼的傾向をつ



けアネス・ユニ  
オニスム  
よめました。

それははじめに口にしていた社会主義の目標をすて、資本主義を肯定して、労資協調の立場をとります。また不熟練労働者、移民労働者、黒人労働者を犠牲にして、熟練労働者の利益だけをまもり、労働者独自の政治活動をおさえるという、イギリス労働組合主義とそっくりの立場におちいつていきました。アメリカではこれはビジネス・ユニオニズム（実務的組合主義）と呼ばれました。

しかしアメリカでも一九世紀の末になると、熟練労働者が団結するだけでは熟練労働者自身の利益もまもれないことが自覚されるようになり、社会主義者の指導のもとに産業別労働組合を結成しようという動きがでてきて、一九〇五年にAFLの外に世界産業別労働組合（IWW）という組織がつくられるとともに、AFL内でも産業別組織へむかう傾向があらわれてきます。

### フランスのサンジカリズム

フランスでは労働組合に組織されている労働者の数は、パリ・コンミューンの蜂起以前には、パリで六〇七万、地方でこれとほぼ同数といった程度で、組合組織としては、職業別組合の地域

連合組合組織ができていただけで、職業別の全国組合はまだ結成されていませんでした。

パリ・コンミュニオンの弾圧ののち、労働組合運動は一時困難になりましたが、まもなく労働者の組織も活動を回復し、一八七六年に全国労働者大会が開催されると、その後は組合運動が急激に発展するようになりました。また第一インタナショナルの活動によって、その根をうえつけられていたマルクス主義の思想が、労働運動に影響をあたえるようになり、このため一八七九年にひらかれた全国労働者大会は、産業の「集团的所有」と階級闘争の原則とを支持し、労働者階級政党の必要を強調して、「フランス社会主義労働党連盟」の創立を決議します。

こうして、一八七九年に製帽工が最初の全国組合をつくったのを皮切りに、職業別の全国組合がつぎつぎに結成され、一八八六年には、社会主義労働党連盟の指導のもとに、ついに労働組合協同組合全国連盟という全国労働組合中央組織が創立されました。また、地域では、各職種の地域組合（全国組織の支部もあれば、独立の地域組合もありました）が、地域的連合体として、労働取引所（フレース・エ・トラワイヤ）に結集していましたが、一八九二年には、その全国的結集である労働取引所連盟が創立されました。

こうして、フランスでは、労働組合の全国組織の結集体と、地域的連合体の結集体との二つの労働組合中央組織ができあがったのですが、しかし、たたかいのなかで労働者のあいだにとうぜんその統一をもとめる声がたかまってきました。そこで両者の代表が話しあい、一八九五年には両

者を合同して、労働総同盟 C G T が結成されます。そして合同後も、なおしばらくのあいだは二つの組織が別べつに大会を開いていましたが、一九〇二年以後は大会も一つになり、名実ともに統一が実現しました。

こうして、労働運動をつよめ、統一をすすめていくなかで、フランスの労働者は、政教分離（教育を反動的なカトリック教会の支配からきりはなす）の原則にもとづく義務教育制度の確立、コムニューン戦士の大赦、労働者の団結権の確立（一八八四年）など、政治面でも大きな成果をあげました。しかし、フランスでは、労働組合運動の発展にこうしてマルクス主義が大きな役割をはたしたにもかかわらず、フランス労働総同盟の組織では、マルクス主義者の影響がこののち一時後退して、アナルコ・サンジカリズム（無政府主義的サンジカリズム）の影響がつよまります。

アナルコ・サンジカリズムというのは、ブルードン主義やそこからでてきた無政府主義を源流にした労働組合万能主義ですが、すでにマルクス主義の影響をかなりうけており、資本家階級の搾取と抑圧にたいする労働者の階級闘争を主張します。しかしその半面で、唯一つの純粋な階級闘争は経済闘争であり、唯一つの有効な行動手段はゼネストであると考えて、労働組合のゼネストだけで資本主義をうちたおすことができると主張するのです。しかもアナルコ・サンジカリストは、少数精鋭主義の原則をとっていたことも特徴的でした。

それは、大胆で、勇敢な少数の活動家グループが「全体を発酵させる小さなパン種」になるの

だと主張し、大衆はそれにひきずられて自然發生的に革命的なゼネストへとたちあがるのだと考えていたのです。

また国家の問題については、それは無政府主義の思想にたち、階級国家を粉碎すれば、資本主義はくつがえるのであって、プロレタリア独裁の権力をうちたてる必要はないと主張しました。こうした思想は、労働者大衆を自覚にみちびき、下から強力な階級的労働組合を大衆的につくりあげていくのを、全体としてさまざまげるとともに、労働者階級を正しい階級闘争の路線からふみはずさせる作用をしました。

フランスで、こうしたアナルコ・サンジカリズムが力をもったのは、一つは、フランスの産業革命のすすみ方が比較的ゆるやかで、当時労働組合活動家の多くがでていた小規模な工業や職人的手工業には、ブルードン主義の伝統がつよくのこっていたためです。

それにまた、この時代のゲードその他のフランスの社会主義指導者たちが、労働組合をいちじるしく過少評価していたうえに、社会主義政党が一時は五つの小党に分裂して、たがいに組合の指導権をあらそったりしたことが、組合員のあいだに、政治活動への不信をつくりだしていたという点もあります。

こうしてつよめられたアナルコ・サンジカリズムの影響から、フランスの労働者がぬけだしていくのは第一次大戦後のことですが、しかし、アナルコ・サンジカリズム指導下の労働総同盟も、

はまの層から消滅するの協同組合 ↓ 自由な互助組合 → 無政府

労働組合を民主的に運営していくためにせひとも必要な原則をいくつか発展させました。たとえ  
ば、一九〇二年の大会で採択された規約で、総同盟が、「あらゆる政治的流派をこえて、賃金雇  
用制の消滅のためにたかかう意志のあるすべての労働者を結集すること」をきめ、「なにびとも  
なんらかの政治選挙行為において、組合員の名称をもちいてまで総同盟の権限を利用することは  
できない」という原則をうちたてたのは、その一つです。

こうした原則については、今日、日本のわれわれも、よく考えてみる必要があります。

### ドイツにおける社会主義政党の確立

以上、イギリス、アメリカ、フランスなどの例からもわかるとおり、この時代に、労働組合運  
動は新たな発展をとげて、確固たる組織の基礎をすえ、労働組合全国中央組織をつくりあげ、さ  
らに、不熟練労働者をもふくめて大衆的な基礎を拡大したのでしたが、しかし、この時代とくに  
注目しなければならないのは、労働組合運動の発展とならんで、各国にマルクス主義の潮流にた  
つ労働者党、すなわち社会主義政党があいついで組織されたことです。

前章でのべたように、マルクスとエンゲルスは、各国に労働者階級の党をつくりだすために、

第一インタナショナルをつうじてあらゆる努力をはらってきました。また、第一インタナショナルは、解散にあたって発表した声明の中で、こうのべていました。

「インタナショナルは死んだと万国のブルジョアジーは叫ぶだろう……だがわれわれは知っている、インタナショナルの原則が、文明世界全体の進歩的労働者によってみとめられ、まもられていることを、ヨーロッパのおなじ労働者諸君に、それぞれの国の運動をつよめるよう、しばらく時間をあたえよう……たとえ組織はなくとも（インタナショナルの組織はなくともという意味——筆者注）、諸君はこの原則の信奉者のわくをひろげる道をみいだすだろう」

二人の努力はみのり、声明の中にのべられていた運動の見透しは、そのまま現実になりました。第一インタナショナルが解散したのち、歴史の試練にたえぬいたマルクス主義は、ヨーロッパの労働運動の主流を支配するようになり、マルクス主義に指導される大衆的社会主義政党が、ヨーロッパとアメリカの各国にあいついで創立されたのです。

ところで、こうした新しい動きの先頭をきったのは、これまで、イギリスやフランスにくらべて資本主義の発展がおくれたために、運動の面でもこれらの先進諸国におくれをとっていた、ドイツの労働者階級でした。

ドイツでは一八四八年の三月革命以前には、労働組合の萌芽になるような組織があっただけで、ほんものの労働組合組織がつくられたのは、三月革命以後のことであったことは、さっきのべた

ラッサール主義

とおりです。しかしこののち、おかれていたドイツの労働運動は先進諸国を追いこして前進していきました。一八五〇年代の反動期にも、労働組合は非合法法下で組織の拡大をつづけます。一八六〇年代にはいり、工業労働者が労働者階級の中心にたつようになると、早くも一八六三年にフエルジナンド・ラッサールの指導のもとに、労働者の政治団体としての全ドイツ労働者協会が創設されました。

ラッサールは、「賃金鉄則」という誤った理論を信じこみ、労働者が賃上げのためにたたかっても、物価の騰貴をまねくので、実質賃金の引上げにはならないと主張して、労働組合運動を否定したり、国家の援助のもとで労働者の生産組合をつうじて社会を変革することを主張するなど、思想的には多くの誤りを犯しながらも、ドイツ労働者階級をいちはやく政治行動へふるいたたせていくうえで、積極的な役割をはたしました。

しかも、ドイツの労働者階級は、たちまちこのラッサール派の誤った思想をのりこえて前進していきました。

まず第一に、労働者は、ラッサール派がどのように主張しようとも、組合へ結集することをやめませんでした。このため、ラッサール派も、一八六八年にはついに労働組合の組織化にとりかからなければならなくなりました。

第二に、ラッサール派の指導の誤りを見抜いた人たちが、これからわかれてアイゼナハで大会

をひらき、マルクス主義者のリープクネヒトとベーベルの指導の下に、一八六九年ドイツ社会民主労働党を結成しました。そして一八七五年になると、ラッサール派とアイゼナハ派はゴータで合同大会を開催して、ドイツ社会主義労働党を結成し、ドイツ労働者階級の統一政党をつくりあげました。またこの合同にひきつづいて、両派が指導していた労働組合も、組織を統一して、このちドイツの労働組合運動の中心にたつドイツ自由労働組合を結成したのです。

では、おかれて出発したドイツの労働運動が、なぜイギリスやフランスの労働運動をおいこして、こうした労働者党をいち早く確立することができたのでしょうか。

歴史の発展ぜんたいをみても、また労働運動の歴史だけにかぎってみても、このように、おくれたものが先になるということが、よくおこるもので、それにはそれなりの理由があります。ドイツの労働者階級がこの時期にこうした先進的な動きをしめすようになったのは、ドイツのブルジョアジーがとくべつ憶病で卑怯な性格をもっていたということと、ふかい関係がありました。

労働運動がイギリスやフランスで、大きな力をもちはじめた時期になって、ようやく一つの政治勢力として浮びあがってきたドイツのブルジョアジーは、一八四八年の三月革命のさいに行動によつてはつきりとしめしたように、労働者階級勢力の進出をおそれるあまり、ブルジョア的自由のためにさえ徹底的にたたかおうとしないで、封建勢力と妥協してしまいました。

そして結局ドイツの統一は、半封建的なプロイセンの軍国主義の指導下で実現されることにな



ったのです。したがってドイツ労働者階級は階級として誕生したその日から、社会主義のためはおろか民主的自由を獲得するという目的のためだけでも、ドイツ・ブルジョア階級を頼りにするわけにはいかず、すべての要求を自分自身で解決するほかありませんでした。

反面教師という言葉がありますが、まさにそのいい例です。ドイツの労働者階級はこうした困難な条件のもとでそだったために、各国の労働運動がながいあいだ経験をつみかさね、理論を発展させることによってようやく到達しつつあった結論——つまり、労働者階級の権力をめざすたかいを指導するために、労働者階級の党をつくらなければならないという結論を、いきなり、しかも他国にさががけて受けいれるようになったのです。

### ドイツ社会民主党の英雄時代

話をまえにもどしますと、両派の合同で創立されたドイツ労働者の統一党である社会主義労働党も、ゴータの合同大会で、少数派となったマルクス主義派が、統一をまもろうとするあまり必要以上に譲歩したために、党の原則上の問題にさまざまのあいまいな点をのこしていました。そこでマルクスは「ゴータ綱領批判」を、エンゲルスは「空想より科学へ」をふくむ「反デューリ

ング論」を書いて、党綱領の中にふくまれていたラッサール派的な間違った思想をはっきりさせ、この党を理論的にたかめるための指導と援助をおこないました。

党の影響力がつよまり、労働者階級の運動が目に見えて前進しはじめると、ドイツの反動的な地主層（ユンカー）とブルジョアジーは、ドイツ皇帝暗殺未遂事件を利用して、その責任を社会主義労働党におしつけ、一八七八年社会主義鎮圧法を成立させて、労働運動の全面的な弾圧にのりだしました。

しかしこうした弾圧のなかで、この党はドイツ労働者階級のほんものの前衛になることができませんでした。はじめ途方にくれた指導者たちは、マルクスやエンゲルスの指示をうけいれて、残された合法的活動と非合法活動とを結びつけることに専心しはじめました。国外で印刷した機関紙が労働者たちの手で国内にもちこまれ、スイスで開かれた党大会は、革命的なたたかいの方向を明確にうちだしました。こうすることによって大衆との結びつきをつよめた党は、帝国議会選挙で以前よりも得票数を増加させましたし、労働者のストライキ闘争をも前進させることができました。

弾圧政策は失敗し、それが労働運動の発展をおしとどめるどころか、逆に促進していることがはっきりしてくると、反動支配層のあいだに動揺がおこりました。とりわけ、八〇年代にはいつてから、新鋭の機械をいれ、急速に力をつよめてきたドイツ独占資本を代表する層は、ビスマル

クの弾圧政策に疑問をいだくようになりました。こうして一八九〇年帝国議会は鎮圧法の期限の更新を拒否し、そのあとおこなわれた選挙で社会主義労働党が大進出をとげると、ビスマルクは辞職させられてしまったのです。

大勝利をかちとつて合法舞台におどりでた社会主義労働党は、社会民主党とその名をあらため、一八九一年エルフルトで大会をひらいて新綱領を採択しました。綱領からはラッサール派の思想の残りがすが一掃され、労働者階級による政治権力の奪取と階級ならびに階級支配の絶滅が、党の最終目標にかかげられました。それは、マルクス主義革命理論のもっとも重要な命題であるプロレタリア独裁の必要性にふれていなかったし、またドイツ労働者階級の闘争の当面の目標であるはずの民主的共和国の要求をかかげていないといった、のちにその意味がはっきりしてくる重大な欠陥をもつてはいましたが、しかし、それでもなおこの綱領は、この時代におけるもっともすすんだマルクス主義的党綱領であったのです。

こうしてドイツ労働者階級は、こののち第一次世界大戦が勃発するまでの期間、ヨーロッパにおいて指導的な地位をしめる、最大の社会主義政党をつくりあげました。

ドイツ以外の国では、一八七〇年にオランダ、七一年にデンマーク、七二年にボヘミア（現在のチェコスロヴァキアの一部）、七六年アメリカ、七九年フランス、スペイン、八〇年イギリス、八三年ロシア、八七年ノルウェー、八九年オーストリア、スイス、スウェーデン、九〇年オースト

ラリア、フィンランド、九二年ポーランド、イタリア、という具合に、このドイツにひきつづいて社会民主党、社会党、社会民主労働党などと名乗る政党がでてきます。こうした党は、すべてマルクス主義的潮流を中心にしていたことは、いうまでもありません。

労働者階級のたたかひによって、社会主義政党がヨーロッパとアメリカでつくりだされ、合法的地位を確立し、マルクス主義を基調とする社会主義思想が、このうち労働者大衆のあいだにいつそう広範にひろがっていくことになりました。

なおここで一言つけ加えておきますと、イギリスでは労働組合主義が労働組合運動の中に強固に根をはっていたのと同じ理由で、マルクス主義の立場をとる社会民主主義政党はほとんど勢力をのばすことができませんでした。イギリス労働党といわれる党は、この点で、ドイツ社会民主党やフランス社会党など、ヨーロッパ大陸諸国のマルクス主義政党とはその成り立ちも、組織の仕方<sup>イギリス</sup>も、ひどくちがっています。

イギリス労働党は労働者代表を議会におくる目的で、労働組合が提案して労組、協同組合、社会主義団体（政党を含む）をあつめて一九〇〇年に組織した「労働代表委員会」がその起源で、これがいつのまにか労働党とよばれるようになり、ついにはこれを正式に名乗るようになったもので、いままでは個人加盟をみとめています。その内容と組織の仕方は今日まで基本的には変わっていません。そしてこの党を成立当初からいまにいたるまで支配しているのは、労働組合主義

的な民主主義であり、また、社会民主主義連盟など少ないながらマルクス主義団体ができると、これに対抗して労働運動の右翼的指導と自由主義的ブルジョア思想家が協力してつくりあげた、フェビアン協会の反マルクス主義的な小ブルジョア的社會主義です。

## 第二インタナショナルの創立

第一インタナショナルが解散したのち、労働運動の國際的結びつきを回復しようとするくわだてが、一八七七年を最初に数回にわたっておこなわれました。とくに一八八三年と一八八六年にはパリで、また一八八八年にはロンドンで、國際労働者大会が開かれましたが、こうした努力はこれまでのべてきたような各国の労働運動の發展を基礎にして、ついに実をむすびました。フランス革命の百周年記念日にあたる一八八九年の七月一四日、フランスの首都パリに二〇カ国三九一名の労働運動の代表があつまって、第二インタナショナルを創立したのです。それは、國際労働者協會を復活したものと考えられたので、この名で呼ばれることになりました。

創立大会を召集したのはドイツのマルクス主義者でした。おなじ日にイギリスの労働組合主義者も國際會議を召集し、パリで二つの國際會議がたがいに対抗するかたちで開かれましたが、結

局ドイツのマルクス主義者の主催する会議で第二インタナショナルが創立されることになりました。というのはこの時期には、労働運動の中にさまざまな潮流が存在していたものの、もうマルクス主義が指導的な思想になっていたからです。したがって第一インタナショナルの場合とはちがって、第二インタナショナルは創立大会からマルクス主義の色彩が濃厚でした。

創立大会は、無政府主義者たちの反対をおしきって、政治闘争とプロレタリアートの権力獲得のために、大衆的労働運動を強化し社会主義政党を結成することが必要であるという決議を採択しました。また八時間労働日、賃金引上げ、現物支給制反対などの、日常要求のためにたたかうこともきめました。当時まだ戦闘性をたもっていたアメリカの労働総同盟（AFL）が、一八九〇年に実施しようとしていた八時間労働日要求のゼネスト計画を支持して、五月一日（メーデー）を「国際労働運動の示威の日」ときめたのも、この大会でした。このほか大会は、軍国主義反対、労働者の選挙権の拡大、工場法の制定、国際労働立法のためのたたかいや、労働組合、協同組合、社会主義政党の建設のためのたたかいなどについて論議を集中し、決議を採択しました。

だが、第二インタナショナルは、第一インタナショナルが民主的中央集権の機構をもち、総務委員会の指導のもとで各国の支部が活動するかたちをとっていたのちがって、各国に発展した労働運動の自主的な組織の、ゆるい連合体のかたちをとっていました。それは一九〇〇年にいたるまでの一二年間ものあいだ、正規の規約も明確な綱領もたず、指導部もなく、常設の事務機

構も設置していませんでしたし、正式の名称さえもたないままでした。

こうした、およそルーズな組織形態をとっていたのは、一面で、第二インタナショナルが各国に発展した自主的組織をあつめてつくられたということと関連をもっていました。またそれは他面では、第二インタナショナル内部に、たとえばドイツ社会民主党のエルフルト綱領にもその徴候をあらわしていた、日和見主義の傾向が、最初から存在したからでした。創立大会の日には、この国際会議をひらいた、労働組合主義者を中心とする日和見主義派は、それから二年のうちに第二インタナショナルに合流することになります。こうしたはつきりした日和見主義派とならんで、マルクス主義の潮流の内部にも、日和見主義の傾向が最初からふくまれていたのです。

第二インタナショナルの組織がルーズなものになり、その結果、のちに何度も帝国主義戦争反対を決議しながら、反対行動を組織することをサボったり、社会主義の原則にまったく反するような思想をもったり行動をとったりするものを平気で組織の中に入れておいて、組織自体を腐敗させ崩壊させてしまうようになっていく原因は、実はここにありました。

### 国際労働組合組織の発展

各国の労働組合運動が、最初から国際連帯をもとめる傾向をつよくしめしていたということは、さきにも述べましたが、各国の組合運動が発展してくると、こうした、国際連帯活動の必要はいっそうつよまり、労働組合の国際組織をつくれという声<sup>レ</sup>が組合運動の内部からでてきました。

ところで、第二インタナショナルは、組織の内容からいうと、社会主義政党だけの国際組織であつたわけではなくて、第一インタナショナルの場合とおなじように、労働組合、協同組合、その他いっさいの労働者組織を包括する国際組織でした。しかし、第一インタナショナルの時代とちがって、各国に社会主義政党ができていたので、その中でこれらの党がしめる役割は決定的なものとなり、時とともにそれは事実上社会主義諸党の国際的連合体の性格をつよめていきました。

他方、労働組合運動の側からみると、組合運動が大衆的な運動として発展すればするほど、政党とはちがつたこの運動の独自性が表面化してきました。そして各国の労働組合がたがいにストライキ闘争を支持しあい、ストライキ破りの転入を阻止し、闘争経験を交流しあうなど、第二インタナショナルの会議とはべつに、労働組合独自の国際連帯活動を組織する必要が痛感されるようになっていたのです。

こうして、第二インタナショナルの創立大会の席上で、はやくも労働組合独自のインタナショナルをつくるべきだという主張がでてきたのですが、しかし大会を指導する地位にあつたドイツの社会主義者、とくに右翼指導者たちは、こうした声をききいれずおさえつけてしまいました。



彼らは労働組合運動は社会主義政党内に指導されなければその階級的な力を全面的に發揮できないということをも、ごく形式的に、また官僚主義的に理解していたのです。

たしかに労働組合のたかひが成功するためには、組合は労働者階級政党内の思想と政策にみちびかれる必要がありますが、こうした政党内の組合にたいする指導は、その政党内とその政策が組合員大衆のものになって、組合員に、民主的に大衆的に支持されることによって、實現されるはずのものでした。

それからまた、ドイツ社会民主党の指導者たちは、労働組合だけのインタナショナルをつくるならば、英、米の労働組合主義者に牛耳られることになりはしないかということをおそれていたことも事実です。

しかし、労働組合側の当然の要求を、こうした理由でいつまでもおさえておくことはできませんでした。イギリスの個々の組合はヨーロッパ諸国の組合と連絡をとりはじめ、大会ごとに代表を交換しはじめました。そして一八八九年には印刷工の組合がパリで国際会議をひらき、一八九〇年に英仏独墺四カ国の鉱山労働組合がパリで国際鉱山労働者連盟を結成したのを皮切りに、一九〇〇年までに第二インタナショナルのそとに一七の国際職業別労働組合書記局（I.T.S.）が組織され、一九一四年の第一次世界大戦直前には、その数は三二にたっしました。そのうち大きなものは、国際鉱山労働者連盟一三七万四、〇〇〇、国際金属労働連盟一一〇万六、〇〇〇、国際

運輸労働者連盟八八万一、九五〇でした。

また職業別の国際労働組合書記局がかたちをととのえてくると、各国の労働組合全体をあつめた、各国労働組合中央組織の国際組織をつくれという要求も、つよくなってきました。そしてついに一九〇三年にダブリンで開かれた国際会議でこの要求がかなえられ、各国労働組合中央組織国際書記局が設立されました。

しかしこの機関は、各国の労働組合運動にかんする情報の交換と統計の作成に任務をかぎっていてもっと広範な連携をもとめる組合員大衆の要求をほんとうに満足させるものではありませんでした。この機関がこうしたものに発展するのを阻止したのも、主としてドイツの右翼組合指導者たちでした。ドイツ自由労働組合の指導者となったカール・レギーンは、はじめ「労働組合にとって全般的重要性をもつ問題は第二インタナショナルの正規の大会でとりあげた方がよい」と主張して、こうした組織をつくること自体に反対していましたが、阻止できないことがわかると、この国際組織の書記長におさまって、その活動をこうした範囲にかぎるよう努力したのです。

ドイツ労働組合右翼指導者がとったこうした官僚主義的なやり方に各国の組合は反撥し、国際書記局の会議のたびに、ほんものの国際的な労働組合連盟をつくれと要求しました。このため一九一三年について、この組織は「国際労働組合連盟」(I.F.T.U.)と名前を変えることになりました。しかし、その内容がすこしも変らないうちに、第一次世界大戦がはじまることになりました。

なお、このほかに一九〇七年には、ヨーロッパ諸国のキリスト教労働組合があつまって国際書記局をつくりました。キリスト教労働組合というのは、一八九一年、ローマ教皇レオ一三世がだした回勅にもとづいて、カトリック教会の指導のもとにヨーロッパ諸国のキリスト教労働者を組織した組合で、アジアのわれわれには、直接の關係はほとんどないのですが、ヨーロッパでは小さいながら、一つの勢力になっています。労働組合運動の成長をみて、これを労資協調の線にとどめるために反動的なカトリック勢力がこれの組織化にのりだしたものであることは、いうまでもありません。

### この章のまとめ

以上、この章では、第一インタナショナル、がその歴史的任務をおわつて活動をやめてから、二〇世紀にはいるまでの約三〇年間は、ヨーロッパと

アメリカの労働運動についてのべました。それは運動が幅と深さをまし、その組織を整備していつた時代でした。マルクスとエンゲルスが見透し、かつて、そのためにはらった努力がみのつて、各国に労働者階級の党がつけられましたし、マルクス主義は各国に根をおろして、労働運動の中にしみ通っていき、労働組合はその組織を最終的に確立しました。国際的な社会主義組織として第二インタナショナルがつけられるとともに、国際労働組合組織もつけられました。

この時期に注目されるのは、イギリス労働運動の進歩的役割の後退とそれにかわるドイツ労働

者階級の前進でした。

労働運動は階級的なたたかいです。労働運動が前進するのを資本家階級は手をこまねいて見てはいません。彼らは、この運動をゆがめ、階級闘争の道からそらせるために、さまざまな手だてをこうじます。イギリスの資本家は、世界における工業の独占、ついで植民地の独占という条件を利用して、イギリス労働運動をねじまげること成功しました。資本主義をうちたおし、労働者階級とすべての被抑圧者を解放することを目ざさないで、資本主義を肯定し、そのもとで賃金と労働条件の改善のために資本家と取引しようとする、あのイギリスの労働組合主義の思想は、こうしてそだてられたものでした。

他方、ブルジョアジーがとくべつ憶病で、封建勢力と妥協してしまったドイツでは、労働者階級は、階級として誕生していろいろ誰にもたよらず、独自の行動を發展させないわけにはいきませんでした。このため、運動の歴史はみじかかったにもかかわらず、この時期に、ドイツ労働者は、まっさきに階級政党をつくりあげ、世界の労働運動の先頭にたちはじめました。

ドイツ社会民主党とその指導の下にあったといつてよい第二インタナショナルは、はじめからさまざまの日和見主義の芽をその中にもっていました。しかし、資本主義がまだ没落期にはいっておらず、上向きの發展をとげていたこの時代——労働者が労働者階級の権力の樹立をめざす革命闘争へとたちあがっていくまでにはまだまがかったこの時代には、こうした日和見主義の芽は、

表面化しないで、幅と深さをましていく運動の蔭にかくされていたのです。

《参考文献》

- 1 エンゲルス「『イギリスにおける労働者階級の状態』 ドイツ語第二版への序文」
- 2 レーニン「帝国主義と社会主義の分裂」
- 3 ワルンケ「ドイツ労働組合運動小史」



## 第五章 帝國主義と労働運動

——第二インタナショナルの崩壊と新しい型の党の創立——





## 帝國主義の時代

二〇世紀にはいると、資本主義はその最高の段階であり、最後の段階である帝國主義の段階にはいりません。

この段階になると、そのまえの三〇年間に西欧と北アメリカの先進資本主義国で形成されてきた一握りの独占資本は、その国の経済生活で決定的な役割を演ずるようになるだけでなく、国の政治の支配権を握るようになります。またこの時代になると商品輸出とはちがった資本輸出がとくべつ重要性をもつようになり、世界の市場と資源をわけどりする国際独占体（国際的なカルテルやシンジケートなど）が形成されるのとならんで、たがいに競争しながら世界のあらゆる地域にのりだしつつかつた独占資本主義国——帝國主義諸国——が、植民地、従属国、勢力圏といったかたちでこれらの地域のわけどりを完了します。

こうした帝國主義の発展は、国内では、そのまえの三〇年間にその運動の幅と深さをいちじるしく増した労働者階級ならびに人民諸階層と独占資本とのあいだの矛盾・対立を激化させます。また帝國主義と植民地、従属国の被抑圧民族とのあいだの矛盾・対立もするどくなります。さらに、

帝國主義諸国のあいだの資源や市場や領土をめぐる対立は、これまでよりいっそう激しいものになるばかりではありません。帝國主義諸国は、これまでとちがって、すでに地球上のあらゆる市場と領土が分割されてしまったあとで、あらためてこれらの市場と領土の奪いあいをするのですから、そこからうまれる対立は、帝國主義戦争をひきおこさずにはいけません。

事実二〇世紀に入る頃から、アメリカ帝國主義がスペインからキューバ、フィリピンなどの植民地をうばいとった米西戦争（一八九八年）、イギリス帝國主義が南アフリカを支配下においてた南阿戦争（一八九九〜一九〇二年）、日本とロシアの帝國主義が極東市場の支配権をあらそつてたたかつた日露戦争（一九〇四〜一九〇五年）、イタリアがトルコからトリポリとキレナイカを奪いとつた伊土戦争（一九一〜一九一二年）、バルカンをめぐるロシアとオーストリアの帝國主義の対立から起つたバルカン戦争（一九一〜一九一三年）というように、こつした帝國主義戦争があいついでおこり、ついに一九一四年には第一次世界大戦が勃発することになります。

そこでこの時代になると、労働運動のまえにはこれまでの三〇年間とはちがつた新しい客観情勢とそれにもとづく新しい任務があらわれてきます。資本主義が比較的平和な発展をとげてきたこれまでの三〇年間にかわつて、あらゆる階級が公然とぶつかりあう戦争と革命の時代がやつてきたのであり、これまでの三〇年間成長をつづけてその幅と深さをました労働者階級の運動は、労働者階級の権力樹立をめざすたかきに直接とりくむ時代をむかえたのです。

しかし、第二インタナショナルや国際職業別労働組合書記局や国際労働組合連盟に結集した西歐諸国の労働運動は、こうした任務をはたすことができませんでした。それはこれらの運動の指導部内で日和見主義が強化しつづけたからです。

つまり、この時代になると、第二インタナショナルその他西歐諸国の労働者組織の指導部は、右翼日和見主義者のしめるところとなり、労働者階級の任務にこたえることができないうで、その組織を崩壊させることとなります。それと同時に、ドイツの労働運動は先進的な役割をおわって、これにかわって、レーニンとボリスエヴィキ党の指導のもとに右翼日和見主義の傾向とたえずたかかってきたロシアの労働者階級が、帝國主義の時代における国際労働運動の先進的役割を演ずるようになり、これが、この革命の時代に国際労働者階級運動に負わされた任務を、果たすことになり、さらにアジア、中近東、ラテン・アメリカなどの労働者階級が、こうしたたかたかの陣列にくわわってくるようになります。

### 右翼日和見主義の強化

さて話をまえにもどしますと、一九世紀がおわって二〇世紀にはいる頃には、西歐とアメリカ

合衆国やイギリスの自治領の一部では、労働者階級は前章までにのべたようなたたかいと団結の力をつうじて、すでにさまざまな権利を獲得していました。

産業革命期のまったく無権利な状態とはちがって、これらの国の労働者は組合をつくる権利を獲得したばかりでなく、参政権を獲得しつつありました。工場法、労働時間を制限したり婦人幼年労働を保護する法律、労働災害を防止するための法律など、労働者保護立法も獲得してしました。

また労働組合運動は労働者の日常生活に根をおろした恒常的な組織となり、全国的な労働組合中央組織が確立されただけではなくて、国際的連携の機関も不十分ながら整備されつつありました。また、マルクス主義者の指導と影響のもとに、各国に社会主義政党がつくりだされ、その影響力は日ましにつよまっています。

労働者階級がえらびだした議員は、支配層を代表する議員とならんで議会で席をしめ、しかもしだいにその勢力を拡大しつつありました。こうして、これらの国の労働運動は日ましに強大なものとなり、そのまえには洋々たる前途がひらけているように思われました。

ところが二〇世紀になって資本主義が帝国主義の段階にはいると、当時の労働運動の指導機関である第二インタナショナルの指導者たちのあいだでは、階級的な立場にたつて帝国主義とたたかおうとしないで闘争を合法主義、改良主義の枠内にとどめようとする右翼日和見主義の傾向が、

いちじるしく強まってきて、その指導部はこうした日和見主義者によってしめられてしまうようになりしました。ではなぜこのようなことになったのでしょうか。

まず第一に注目しなければならぬのは、前章でのべたように、第二インタナショナル諸党の内部では、マルクス主義が主流をしめていましたが、それと同時に、はじめから、階級闘争の原則をぼかし、たたかいを合法主義の枠内にとどめて、階級敵のゆるす範囲で闘争をすすめようとする、右翼日和見主義の傾向がつよくいりまじっていたということです。

たとえば、第二インタナショナルの指導的な党となったドイツ社会民主党は、エルフルト大会でマルクス主義的綱領をつくりあげたとはいうものの、皇帝政府の弾圧を考慮して、党の当面の目標として皇帝制度の打倒、民主主義共和国の実現をかかげることを避けたり、社会主義運動を実現するためにはプロレタリアート独裁がぜひとも必要だという、パリ・コミューンの歴史的経験によって正しさが証明されたマルクス主義の根本原則を、あいまいにしています。こういうことをはっきりさせるならば党が合法的に存続することができなくなるということ、党の幹部たちはおそれたのです。

また同党の機関紙「フォールヴェルツ」は、エンゲルスが書いた文章の重要な一節をけづりとり、エンゲルスが、現代の条件のもとでは革命は武装闘争ではやりとげることができないといっているかのような文章につくりかえて発表するということさえやってのけました。

エンゲルスの文章というのは、マルクスの「フランスにおける階級闘争」の序文で、この中で彼は、近代の軍事技術の発達のために、革命達成の伝統的手段とされてきた市街地のバリケード戦争が以前よりもむずかしくなったことを強調し、そこから彼は、こんごの革命では、蜂起した人民はいっそう大きな兵力を結集することによって、受動的なバリケード戦よりもむしろ公然たる攻撃の方法をとるようになるだろうという、きわめて重要な見透しをのべていたのに、ドイツ社会民主党の機関紙は、この後の部分をけづつて、全く逆の意味にとれるようにつくりかえてしまったのです。

また、前章でのべたように第二インタナショナルの組織がルーズなかたちをとり、加盟組織に決議を実行する義務さえ負わせないようなものになっていたなどということなども、日和見主義のあらわれの一つであり、こうした傾向は、各国の党の行動や第二インタナショナルの諸決議などにも、この他さまざまなかたちであらわれていたのでした。

一八八三年にマルクスが死去したのは、エンゲルスはこうした日和見主義を批判し克服するために、たとえば「エルフルト綱領批判」を書き、党幹部に対してたえず書簡をおくって忠告をあたえるなど精力的な活動をつづけました。

しかし、一九世紀と二〇世紀のさかい目に資本主義が帝国主義の段階にはいるとともに、運動の中にもともと存在していたこの日和見主義の傾向は、確固たる経済的、社会的基礎をあたえら

れて強化され、そして、科学的社會主義の創始者の一人としてマルクスなきあと國際社會主義運動になお大きな影響力をあたえつづけてきたエンゲルスが、一八九五年にこの世を去るにいたつて、ついにこの右翼日和見主義は、第二インタナショナルとその傘下諸組織の指導部を公然と支配するようになったのです。

### 日和見主義の基礎と労働貴族

では日和見主義の經濟的基礎とは何でしょうか。それは独占資本が主として植民地からひきだしてくる超過利潤です。また日和見主義の社會的基礎とは何でしょうか。それは、この超過利潤の一部をわけあたえられる、一握りの労働貴族層でした。

帝國主義の時代にはいると、独占資本の労働者と人民諸階層にたいする搾取や収奪はいっそうつよめられますが、他方、労働者階級の組織的抵抗が強まってきたいて、労働者階級を中心に統一した人民諸階層のたたかひによって、独占資本が孤立させられ、その支配をうちたおされる可能性がそれだけつよまってきました。

そこで、この危険を感じた独占資本は、この時期になると、労働者階級にたいして、労働者保

護立法だとか、普通選挙権の実施だとかいった、さまざまの部分的な譲歩をおこなうことによつて、労働者のあいだに資本主義制度にたいする幻想をいだかせて、労働運動を分裂させ、これを労資協調路線にひきこむための手だてを、本格的に開始します。独占資本は大規模な優秀な生産施設や国の内外の重要資源をひとりじめにし、国家機関を自由にうごかし、海外市場、とりわけ資本輸出市場と植民地をおさえることによつて、普通の資本があげる利潤（平均利潤）をはるかに上回る特別の利潤（超過利潤）を手にいれることができるので、この超過利潤の一部をさいて、そうしたさまざまの手だてをこころざすことができたのです。そのうち、もつとも重要なのは、労働貴族層と労働官僚の育成です。

独占企業は熟練労働者や職制層を中心とする上層労働者に、特別いい賃金や労働条件をあたえて、独占企業が発展し帝国主義の侵略政策が成功するならば、労働者の生活もそれに応じて発展していくかのような幻想を、これらの層にうえつけました。こうしてつくりだされた、帝国主義と利益の共通性を感じている、労働者階級の上層——労働者階級の中につくりだされた特殊な層を、労働貴族層と呼びます。

また独占資本は、右翼日和見主義の傾向をもつ労働運動指導者には、労資協調機関や政府の委員会の席、議会の議席などをあたえて、有名人にしたて、労働運動の指導権をこれにとらせるようにし、こうして、下部の労働者大衆の要求を資本家や政府当局と一体になつておさえつける、



右翼的な労働組合官僚をそだてあげました。この右翼的労働官僚は労働貴族層に支持され、それを代表することによって、労働運動の指導権をにぎり、こうして労働運動の力を背景にしながら、独占と取引をし、個人的な立身出世をはかろうとするようになります。

また、独占資本とその政府は、労働組合の権利をみとめ、選挙権を拡大し、工場法、社会保障関係の立法などの譲歩をおこなうことによって、そうした部分的改良をつみあげていくならば、労働者の生活が資本主義のもとでしだいに改善されていくというような幻想、あるいは資本主義が民主主義の漸進的拡大の道をとおってしだいに社会主義へとうつつていくような幻想を、労働者大衆のあいだにうえつけることにとめました。独占はこうすることによって、労働貴族層にささえられた右翼的労働官僚が労働運動の指導権を確保するのをたすけたのです。

独占資本がとったこれらの政策は、もちろん二〇世紀にはいつてとつぜんとられたものではなく、独占資本の形成がすすむにつれて、しだいに実施されてきていたのですが、帝國主義段階にはいるとともに、強化され、その効果がはっきりとあらわれてきて、労働運動の内部で、この労働貴族層と労働官僚を代表する右翼日和見主義の潮流がつよまり、運動の指導権を右翼的労働官僚がにぎることになりました。

## 修正主義と右派・中央派・左派

帝国主義の段階にはいるとともに第二インタナショナルの内部で右翼日和見主義の傾向がつよまったことをはっきりとしめたのは、マルクス主義の修正の必要をとなえる、いわゆる修正主義の理論の発生と流行でした。

修正主義の理論を最初にとなえたのは、ドイツ社会民主党の指導者の一人で、マルクスやエンゲルスの薫陶を直接にうけたこともあるエドワルト・ベルンシュタインで、彼はエンゲルスが生きているあいだはさすがに口をつぐみ本心をかくしていましたが、一八九五年に科学的社会主義の生みの親が世を去ると、その翌年に、「社会主義の諸問題」という題のもとに一連の論文を発表して、マルクス主義の原則はふるくさくなつたから「修正」する必要があると主張しはじめました。

彼にいわせると、弁証法的な思考方法は、ものごとの合理的な観察をさまたげる「ワナ」で、それは過去の歴史の説明には役立つが、将来の見透しについては、人をつねにあやまりにみちびく、というのです。だから、彼にいわせると、マルクスもエンゲルスも、しばしば革命の発展に

ついで見透しをあやまったというのです——マルクスやエンゲルスが、たとえどんな小さな可能性であつても、革命の可能性があれば、そのために全力を投入したのだというようなことは、労働者階級に責任を負わない、小ブルジョア的な日和見主義者の彼には、とうてい理解できないことでした。

彼は、マルクス主義経済学の基礎である労働が価値をつくり出すという命題を否定しました。

また彼は、資本主義の発展によって、中間層が没落し、人口は少数の資本家と大多数の労働者という二つの階級にわかれていくという、歴史によってたしかめられたマルクス主義の命題を否定して、ごく短期間、しかも部分的にみた統計をもとにして、資本主義の発展にともなつて中間層がふえていく、と主張しました。

また彼によると、独占の発展は資本主義の矛盾を激化させるのではなくて、逆にこの矛盾を緩和させるものであり、独占の発展によって、恐慌もその勢いを緩和されるものでした。

こうして、それ以前の歴史的事実によつても、またその後の歴史的事実によつても、そのまじがいがあきらかであるこうした主張にたつて、彼はさらに次のような結論を下しました。彼は、資本主義は大破局をむかえることはないのだから、暴力革命や革命的独裁というようなことも否定されなければならない。ドイツ社会民主党は、革命によつて社会主義を実現するという考えをすてて、永久に社会改良をつみかさねていく、『民主主義的社会改良主義』の立場にたちかえる

べきだ、と説いたのです。

こうしたベルンシュタインの主張は、今日の西欧の社会民主主義政党や日本の社会民主党がとなえている「民主社会主義」の理論の原型にあたるものですが、重要なのはドイツ社会民主党の指導者がこういうことをたまたまとなえると、これをまっていたかのように、第二インタナショナル諸党の右翼日和見主義指導者たちが、歓呼をもって唱和し、せきをきったように右派の潮流が勢いづいていったということ。それは、まさに労働貴族層と労働官僚がもとめていた「理論」だったのです。

こうして一方で修正主義理論の展開によって、右翼日和見主義に理論的基礎があたえられるのとならんで、他方では、右翼日和見主義者の労働者階級にたいする裏切り行為の第一歩もふみだされました。実践上の裏切りの先鞭をつけたのは、フランスの「社会主義者ミラン」でした。彼は大臣病にとりつかれて、一八九八年にブルジョア共和派の内閣にただひとり入閣し、ブルジョアジーの統治をたすけました。こうやって強化された右翼日和見主義の潮流は、第二インタナショナル内で、右派と中央派の、二つの派を形成しました。

右派はマルクス主義の「修正」や否定を公然となえ、階級的立場よりも、国民的立場が優先すると主張して、階級闘争を否定し、資本主義のもとでの社会改良に専心することを主張する一派でした。これにたいして、中央派というのは、ドイツ社会民主党の最高の理論的指導者の一人

であったカール・カウツキーのように口先ではマルクス主義の原則は正しいといつてその修正に反対しながら、社会主義をすて去った右派と手をきろうとしないで、最後まで右派と行動をとむにする一派で、彼らは、社会民主党にたいする労働者の信頼につけこんで、労働者階級を右翼日和見主義につなぎとめ、労働者大衆が革命的闘争へとたちあがるのを阻止する役目を演じました。

右派と中央派が指導権をにぎった第二インタナショナル諸党は、職場や地域で労働者大衆を結集してたたかう、議会外の基本的なたたかひを軽視し、もっぱら議会活動で社会変革をやりとげようとする、議会主義的傾向をつよめました。プロレタリアートの基本組織は、職場と地域に根をおろした労働者階級の党ではなくて、議会に選出された社会民主党の議員団であると考えられ、議会外における労働者大衆の革命的闘争を指導することは、かえりみられませんでした。

二〇世紀にはいつて、日露戦争、伊土戦争、バルカン戦争などあちこちで帝國主義の侵略戦争がはじまりましたが、第二インタナショナルの大会は、口先でこれに反対しながら、反戦のための大衆的デモンストレーションやストライキなど有効な行動はなにもおこそうとしませんでした。そればかりか、オランダのヴァン・コールなど右翼改良主義者は、帝國主義の植民地政策は労働者階級にとつて有用であり必要であるといつて、これに協力することを公然と主張し、大会はさすがにこうした動議を否決しましたが、大会代議員の半数近く、とりわけ植民地領有国の社会民主党の指導者たちは、協力政策に賛成投票するという具合でした。

しかし帝國主義は資本主義發展の最後の段階でした。それは腐敗し死滅しつつある資本主義であつて、社会主義革命の前夜です。搾取と抑圧の体制を維持できなくなる危険を感じた独占資本は、超過利潤の一部をさいて、労働者階級の上層を買収し、労働運動を分裂させ、階級協調路線にひきこもるとつとめますが、しかし、一九世紀にイギリスが世界の工業を独占していた時代とはちがつて、帝國主義の時代にはいくつもの帝國主義諸国が市場や植民地をめぐるはげしく争つてゐるのですから、独占資本にはその超過利潤によつて、その国の労働者階級全体を買収し、ねむりこませるなどという余裕はありません。それが買収できるのは、せいぜい労働者階級の上層をしめる少数の労働者——労働貴族層——にすぎないのです。

しかも、独占資本がこうした買収をおこなうのは、労働運動をよわめ、分裂させることによつて、最大限の利潤をあげるためなのですから、帝國主義のもとでは広範な一般労働者の生活と労働条件や民主的諸権利が独占の攻撃にさらされないわけはなく、彼らにたいする搾取と抑圧はかえつて、いつそうつよめられます。

したがつて、帝國主義の時代には、西欧の先進資本主義国の労働運動の指導部内で、労働貴族層の立場を反映する右翼日和見主義の傾向がつよまるのとならんで、一般労働者大衆の利益を反映し、労働者階級の真に階級的な立場にたつ、革命的傾向がとうぜん發展してくるはずですし、こうした後者の傾向こそが、帝國主義段階における労働運動の基本的發展方向であるはずで

第二インタナショナル諸党のなかで、こうした方向を代表していたのは、各国の党のなかにあらわれた、マルクス主義の原則にたつ左派でした。

そしてこれらの左派のうち、マルクス主義の原則を帝国主義段階の具体的諸条件にあわせて発展させ、第二インタナショナル諸党とはちがった、新しい型の党をいち早くつくりあげることによって、この時代の世界の労働運動であらたに指導的役割を演ずることになったのが、レーニンにひきいられる、ロシアのポリシエヴィキ党でした。

### ロシアの労働運動の発展と、新しい型の党

ロシアでは西欧諸国にくらべて資本主義の発展がおくれ、資本主義的工業が目立って発展しはじめたのは、一八六一年に皇帝の政府によって上からおこなわれた農奴解放ののちのことでした。したがって労働運動の発展もおくれ、一八八〇年代にはいって労働者の自然発生的なストライキがようやくやくみられるようになりました。

しかし、この時期には西欧諸国ではマルクス主義の党ができていたので、その影響はたちまちロシアにもつたわりました。こうしてロシアでは労働組合運動がはじまらないさきに、マルクス

主義サークルが各地にできるようになり、一八九八年には全ロシアのこれらのサークルを結集して大会がひらかれ、ロシア社会民主党の創立が宣言されます。

もつともこの大会では党の創立が宣言されただけで、規約も綱領も指導部もまだつくられていませんから、党の組織が確立されたわけではなく、ほんとうに党が創立されたのは、二〇世紀にはいつたのちの一九〇三年にひらかれたロシア社会民主労働党第二回大会でしたが、この第二回大会では、早くも、レーニンの指導のもとに、西欧の修正主義の影響をうけたメンシェヴィキ派の日和見主義との非妥協的なたたかいがおこなわれ、その結果、第二インタナショナル諸党をおいこして、革命的な新しい型の党——つまり、帝国主義段階で労働者階級に負わされた新しい任務をはたすことのできるほんとうの革命党、ボリシェヴィキ党の基礎が、うちたてられたので

ボリシェヴィキ党

では創立されたボリシェヴィキ党は、いったいどういふ点で西欧のこれまでの第二インタナショナル諸党とちがっていたのでしょうか。この大会にも、西欧の日和見主義の理論の影響をうけた一派が出席しており、彼らは、帝国主義のもとで階級矛盾が緩和しつつあるとか、プロレタリアート独裁なしで、ひとりでに社会主義にいきつけるなどと主張しましたが、レーニンはこうした主張を論破しました。

そして大会が採択した綱領の中には社会主義社会の建設の目的とならんで、この目的の実現の



レーニンの党

ソビエト連邦の  
民族自決権

党員とは

ためにぜひとも必要な社会主義革命とプロレタリアート独裁樹立の目標が、はっきりかかげられました。こうしたことは、第二インタナショナル諸党の綱領のうち最良のものとされたドイツ社会民主党エルフルト綱領もふくめて、西欧諸国の党の綱領のどれにもみられなかったことでした。綱領はまた、農民は生産手段をもつ小ブルジョアだから非革命的だという日和見主義の主張をしりぞけて、マルクスが社会主義革命のためにたたかうプロレタリアートにとってぜひとも必要であることを明らかにした労働同盟の任務をはっきりとかかげていましたし、また抑圧された諸民族と連携してたたかうという、これまたマルクスとエンゲルスが最初からかかげたプロレタリア国際主義の原則的立場にたつて、民族自決権のスローガンをかかげていました。

大会の党規約にかんする討議では、日和見主義者が、党に協力するものをすべて党员とみなすことによつて、党の門戸を小ブルジョア分子に解放し、あいまいで雑然とした規律のない小ブルジョア党をつくらうとしたのにならして、レーニンは断固反対しました。レーニンは、党员の資格として、綱領の承認、党費の納入だけでは不十分で「党組織に参加すること」が必要であることを主張し、民主的中央集権の原則にもとづいて組織された、一枚岩の規律ある、戦闘的な革命的プロレタリア党をつくらなければならない、と主張しました。

レーニンは党を労働者階級の前衛部隊であると考え、労働者階級の中のもつとも自覚した、革命の事業に献身する人びとでつくらなければならないと考えていました。また党は労働者階級の

もつとも豊かな経験と革命的伝統をうけついでいなければならず、社会発展と階級闘争の法則にかんする知識で武装されることよつて、労働者階級を指導する能力をもつていなければならぬとも考えていました。それと同時にレーニンは、党には思想上の統一だけでなく、規律にもとづく組織的統一がぜひとも必要だと考えていました。

労働者階級の革命党にとつて、規律をわずらわしく思うような個人主義的気分をもつインテリは不要だ、これにたいして労働者は労働者としての生活をつうじて組織にならされているから、組織と規律をおそれるものではない。そして、規律によつて党組織がつよまればつよまるほど、労働者大衆の党によせる信頼はつよまり、党と大衆との結びつきはつよまるのだ——レーニンはこう考えていたのです。

第二回大会では、レーニンの主張する規約は否決されました。それはさまざま日和見主義派が一致してこれに反対したためでした。しかし、党指導部の選挙ではレーニン派が多数をしめしました。そこでこのときから、この派はボリシエヴィキ（多数派）と呼ばれるようになり、これに反対した日和見主義派はメンシエヴィキ（少数派）と呼ばれるようになりました。そして一九〇五年にひらかれた党の第三回大会ではついにレーニンの主張するとおりに規約が改正されたのです。

ロシア社会民主労働党の第二回大会で、ボリシエヴィキ党が創立されたことは、ロシアのその

この労働運動の発展にとって重要な意味をもっていただけではありません。それは世界史的意義をもっていました。それは国際労働運動における転換点でした。

西欧の労働者政党は、資本主義が比較的平和な発展をとげている時期につくられていたため、そうした情勢の中で議会主義的傾向をつよめ、ブルジョアの合法性になれ、ついには日和見主義の毒が骨の髄までしみわたっていききました。しかしロシアの党が出現したのは、新しい歴史的时代、プロレタリアートが革命的闘争にのりだそうとする帝国主義の時代の初頭でした。そのためこの党は日和見主義に毒されることが比較的少なかったといえます。しかもこの党のまえには、労働者大衆を革命にそなえさせるという任務がひかえていました。きびしい警察の追及のもとで、また日和見主義とのほげしい闘争の中で、この党はきたえられていきます。そして、西欧諸国の党が修正主義、日和見主義によつてますます支配されていったときに、レーニンを先頭とするボリシェヴィキは、帝国主義の諸条件のもとでの労働運動の根本問題に正しい回答をあたえて、新しい時代の任務に応じることができたのです。

### 一九〇五年の第一次ロシア革命

獨  
占  
階  
級  
に  
資  
本  
主  
義  
が  
發  
達  
す

二〇世紀のはじめには、ロシアでも資本主義は帝国主義の段階にはいつていました。工業はますます独占体の手集中してました。しかし、ロシアではこの高度に發達した資本主義が、ツアーリズムや地主的土地所有というような封建制の強力な遺物とからみあつていたので、労働者にたいする搾取はとくにひどいものとなり、農民は極度の貧困におとし入れられ、ロシア人以外の少数民族はさらにひどい抑圧をうけてました。レーニンは当時の労働者と農民の状態についてこう書いています。

「他人の富をつくりだすために一生涯あくせく働いている幾千、幾万の人間が、欠食とたえまない栄養不良とのために死んでいき、人の目をそむけさせるようなひどい労働条件や、こじきのような住宅環境や、休息の不足からおこる疾病のために、早死している」(全集 五卷一五ページ)

農民は「家畜と同居し、ぼろをまとい、あかざを食って生きていた……農民は慢性的に飢えて、凶作時には幾万の人間が飢と疾病のために死んでいったが、そういう凶作はますます頻繁にめぐってくるのであった」(全集 第四卷 三九六ページ)

そこえもつてきて、一九〇〇年から一九〇三年にかけての経済恐慌、ついで一九〇四年にはじまった日露戦争とこの戦争でツアーリの軍隊がこうむったあいつぐ敗戦は、こうした労働者、農民、被圧迫民族の状態をいっそうたえがたいものにしました。労働者階級は搾取階級全体とツア

リー政府に公然と反抗するようになり、またそれに刺激されて農民も闘争にたちあがりはじめました。

戦争がおこると、ポリシェヴィキは、戦争は人民の利益のためにおこなわれているのではなく、ロシアと日本の帝国主義支配者の利益のためにおこなわれているのだということを、労働者、農民、知識人、兵士のあいだで説明し、専制とたたかうよう呼びかけました。そして、敗戦は人民が敗北したことを意味しない、敗戦はむしろツアリーの支配をよわめることによつて、ロシアの革命闘争を高揚させ、ツアリズム打倒と人民革命の勝利をたすけるものだと、説得しました。

あいつぐ敗戦は、専制制度の腐敗を誰の目にもあきらかにし、ツアリー政府の威信をおとしました。革命の危険を感じたツアリー政府は、僧侶ガポンをつかつて首都ペテルブルグの労働者のあいだに御用団体をつくり、労働者の運動を弾圧するための挑発を計画しました。一九〇五年一月のはじめに、プチロフ工場にはじまったストライキが他の工場の労働者からも支持されると、ツアリーに請願するために冬宮にむけて労働者の行進をおこそうと、ガポンに提案させたのです。ポリシェヴィキはガポンのたくらみを暴露し、行進は危険だと警告しました。しかしこのときには大部分の労働者がまだツアリーを慈悲深い人だと信じこんでいました。一月九日の日曜日に、一四万をこえる労働者が、聖像やツアリーの肖像をささげて、冬宮にむかつて行進をおこないました。ポリシェヴィキの警告は的中しました。ツアリーの命令で軍隊はこの平和な行進に一斉射

撃をくわえ、一、〇〇〇名を殺し、五、〇〇〇名を傷つけました。「血の日曜日」を経験することによって、労働者はツアーリの本質をみぬき、怒りを爆発させました。労働者は武装しはじめ、軍隊と衝突し、ロシア全土にゼネ・ストや抗議デモの波がたかまりました。

レーニンはこの一月九日の事件の報道に接したとき、ただちにこう書きました。「労働者階級は内乱の偉大な教訓をえた。プロレタリアートの革命的教育は平凡な日常のうちのめされた生活の幾月、幾年かかってもなしえないほどの前進を、一日でなしとげた。『死かそれとも自由か』という英雄的なペテルブルグのプロレタリアートのスローガンは、いまやロシア全土にこだましてひびきわたっている」(全集 第八卷七七ページ)。

一九〇五年の革命が一九〇五年のロシア第一次革命がはじまったのです。

ポリシエヴィキは、さっそく第三回大会を開いて、この革命における戦略をたてました。革命の第一段階では、労働者階級が革命の先頭にたつてたたかい、全農民と同盟して、ブルジョアジを孤立させ、専制を打倒して、労働者と農民の革命的民主主義的独裁の政府をうちたて、こうして、封建制の遺物を一掃するための民主主義革命をやりとげる。第二段階では、労働者階級はこの民主主義革命をただちに社会主義革命に成長転化させるためにたたかう、というのがそれでした。

そしてこの方針にそって武装蜂起を組織することが、党と労働者階級の主要な任務であること

ソヴェト

をあきらかにしました。

ポリシエヴィキの指導のもとに、一九〇五年ぜんたいをつうじて政治的ストライキがたかまっ  
ていきました。たたかいがすすむなかでいたるところに半合法的な労働組合組織がうまれてきま  
したが、ロシアにはじめてあらわれたこれらの組合は、賃金値上げその他の経済的要求となら  
んで、戦争に反対しツァーリ政府に反対する政治的要求をかかげていました。また軍隊内でのポリ  
シエヴィキの活動で、一九〇五年六月の黒海船隊の戦艦ボチヨムキンの反乱をはじめ、兵士や水  
兵の革命的行動がつきつきにおこってきました。ことに注目しなければならないのは、一九一七  
年の革命の勝利に重要な役割をはたす労働者代表ソヴェトが、この闘争の中で労働者の創意によ  
ってうみだされたことです。

ソヴェトは、はじめは、各企業の労働者代表があつまってつくった、ストライキを指導するた  
めの機関でしたが、ついでこうした革命的闘争の高揚の中で、それは蜂起を準備するための機関  
に変わっていきました。それは、レーニンが天才的に見ぬいたように、労働者が人民とともにツァ  
ーリ政府をうちたおしたのちにうちたてるべき、新しい権力の萌芽でした。ソヴェトは、ツァー  
リ政府の諸機関を無視して、自分の決定や指令をだし、当局の許可をうけずに八時間制や民主  
主義的自由を実施していったのです。

こうしたたたかいがすすめられた結果、ついに一九〇五年一二月にモスクワの労働者がストラ

ストライキを指導した

イキから武装蜂起へたちあがり、これについて各地に蜂起がおこされました。そしてロストフ、チタなどでは労働者代表ソヴェトが蜂起をつうじて一時権力を握りました。しかし、蜂起はこのときは全国的なものにまでひろがらないで敗北におわり、この一二月を頂点にして革命的闘争はしだいに退潮していきました。

第一次ロシア革命は敗北におわりました。革命が敗北した原因はいくつかありました。労働同盟がまだ不十分であったため、大部分が農民であった兵士は、ツァーリ政府への忠誠をすてず、革命の側にうつった部隊は一部分にすぎませんでした。

労働者階級は革命の指導力として行動しましたが、ロシア社会民主労働党はメンシエヴィキの分裂策動にさまたげられて統一しておらず、したがって蜂起を全国にわたって指導する中央指導部もつくられず、蜂起は地方的な分散したものになってしまいました。こうしてロシア社会民主労働党が、真に統一していなかったことは、労働者に革命の指導者としての役割を十分にはたさせませんでした。

そのうえ外国の帝国主義者は、ツァーリ政府をすくうために財政援助をあたえ、日本との講和をいそがせました。大急ぎで日本と講和を結んだ政府が、武力を革命の弾圧に集中するとともに、ブルジョアが要求していた国会の召集その他一連の政治的譲歩をおこなったことも、支配者側の体制を補強し、プロレタリアートを他の階層から孤立化させて、革命のほのおを下火にするの



に役立ちました。しかし革命は敗北したものの、このたたかいは、ロシアの人民大衆とボリシェヴィキ党に豊かな政治的経験をたくわえさせました。

レーニンは、「この時期のひと月ひと月は、大衆にも、指導者にも、階級にも、党にも、政治科学の基礎をおしえこんだという点で、『平和な』、『立憲的な』発展一年間に相当していた」（全集 第三二卷一―ページ）とのべています。

それはまた、各国の労働運動と植民地、半植民地の民族解放闘争に、大きな影響をあたえました。

西欧諸国の労働者は、このあと頻繁に政治的ストライキにたちあがるようになりました。アナルコ・サンジカリストは、ゼネストだけで革命ができるという空論をふりまわして、実際には労働者大衆をねばり強く説得し、教育し組織していく活動を放置し、労働運動を正しい政治的なたかいかからそらせていましたが、一九〇五年の革命では、ロシアの労働者階級は、レーニンにみちびかれて、政治的ゼネストを、人民の権力をめざす蜂起へと結びつけこうしてこれを革命的な政治的武器として、見事につかひこなしてみせたからです。

イラン、トルコ、中国ではこのあとブルジョア革命がおこり、インド、アフガニスタン、インドネシアなどで民族解放闘争がたかまりはじめました。

また、この革命でボリシェヴィキが、さきのにべたような正しい戦略計画をたて、またレーニ

ンが、「民主主義革命における二つの戦術」という著書でその理論的基礎づけをおこなったことは、第二インタナショナルの日和見主義者に打撃をあたえました。

レーニンは、ロシア革命におけるブルジョア民主主義革命の段階から社会主義革命の段階にいたるまでの一貫したプロレタリアートの指導性、農民の革命性、ブルジョア民主主義革命をさらに深めて社会主義革命へと成長、転化させる可能性を明確にしました。このことは、第二インタナショナル諸党内では支配的であった、ブルジョア革命ではブルジョアジーが指導権を握るのは不可避だとか、農民は反動的で労働者階級の同盟者にはなれないだとか、ブルジョア革命と社会主義革命のあいだには長期の中断があるとかいうような日和見主義的見解を、みごとにくつがえしたのです。

このため、ロシアの一九〇五年の革命ののち西欧の諸党内で改良主義派と革命派の分化が促進され、ドイツ、イギリス、ブルガリアなどの党内で、右派の改良主義に反対して革命的闘争を主張する、左派が形成されはじめました。

## 第二インタナショナルの崩壊

第一次ロシア革命は、政治的激動と革命の新しい時代をきりひらきました。それは世界の革命

運動の中心がチャーチスト時代のイギリス、二月革命当時のフランス、一八七〇年以後のドイツをへて、いまではロシアに移り、ロシアの労働者階級が全世界の革命的プロレタリアートの先頭にたちはじめたことをしめしていました。

しかし第二インタナショナルの指導者たちは、おもてむきはロシアをツァーリズム支配下にある発展のおくれた特殊な国だという口実で、しかし、実際には、それを認めると自分たちの改良主義理論がくずれ去るので、ロシアの革命闘争の経験を無視し、レーニンの思想をしりぞけて、その改良主義的な日和見主義の傾向をいっそうつよめました。このため、第二インタナショナルの内部で、このうち改良主義の右派とレーニンたちを先頭とする革命的左派の対立が、いっそう激しいものになりました。

一九〇七年にシュトゥットガルトで第二インタナショナルの第七回大会が開かれました。この当時、すでにヨーロッパにはのちの世界大戦を前ぶれる騒然たる状況ができてきており、大国は軍備増強にのりだして、労働者は戦争の問題にふかい関心をよせていました。

大会で、改良主義者は、軍国主義反対の行動を、そういう行動は警察の弾圧をまねき党の組織を破壊にみちびくといって、いっさいしりぞけようとはかりました。サンジカリストは「すべての戦争に反対し宣戦が布告された場合にはゼネストと反乱でもってこたえる」という、まことに景気はいいが、観念的で、現実の闘争をおしすすめるのにはなんの役にもたない主張を、あい

レーニン。努力

もかわらずふりまわしました。日和見主義者のうちで戦争反対に賛成するものは、いっさいの戦争を非難する絶対平和主義をとなえました。

レーニン。努力  
←  
レーニン。努力

大会にはじめて姿をみせたレーニンは、こうした主張をすべて批判しました。彼は戦争には帝

国主義のやる不正義の戦争と人民解放のための革命戦争という正義の戦争があり、この二つを区

別しなければならぬことを指摘し、帝国主義戦争に反対するたたかいをブルジョア打倒の

たたかいからきりはなしてはならないと主張しました。これは今日われわれが、ヴェトナム戦争

その他の戦争反対の闘争をどうすすめるかについて考える場合にも、重大な意味をもつ発言です。

大会は、日和見主義者をふくめて、レーニンの主張の正しさをみとめないわけにはいきません

でした。そこで大会が採択した反戦決議には、レーニンの主張をもとに次のような言葉が入れら

れました。

「帝国主義戦争反対の闘争は社会主義をめざす階級闘争とわかちえないものである」「もし戦争の危険がせまったならば、インタナショナル事務局の統一的な活動にたすけられながら、もっとも有効とおもわれる諸手段によって、戦争の勃発をくいとめるために全力をつくすことが、その国の労働者階級とその議員の義務である」

これは敵を明確にし、帝国主義をうちたおす革命的闘争と反戦のたたかいを、プロレタリア国際主義の立場に立って団結してすすめようということでした。

そして決議はさらにこうのべていました。

「それでもなお戦争が勃発したならば、彼らの義務は、戦争のすみやかな終結をめざして干涉するとともに、戦争がひきおこした経済的、政治的危機を利用して人民をたちあがらせ、それによって資本主義の階級支配の廃絶をはやめるよう全力をつくすことである。」

つまり力足らずして戦争が起こされた場合には、戦時下でうまれる経済的、政治的危機を利用して、革命をやりとげようというのです。しかし右派は、大衆のあいだに反戦の気運がつかつたので、それにおされてやむをえず決議に賛成したものの革命をやる気はないので、この決議を実行する気もありませんでした。レーニンは、討論の過程であきらかになつた左派をあつめて特別の会議をひらき、左派を国際的に統一するための最初の試みをおこないました。

一九一一年にはコペンハーゲンで第八回大会が開かれ、レーニンも出席しました。大会は、戦争の問題について、第二インタナショナル諸党が各国議会で軍事予算に反対投票することを決議しました。

一九一二年には、世界戦争の脅威がますます強まる情況のもとで、バーゼルで臨時大会が召集されました。大衆のあいだにたかまつた反戦的な気分も反映して、大会が採択した宣言は、まさに勃発しようとしている戦争の帝國主義的性格を強調し、すべての社会主義政党にたいし、帝國主義反対闘争を断固としておこなうよう呼びかけていました。

しかし、こうした決議や宣言がくりかえし採択されたにもかかわらず、第二インタナショナルの指導者たちは、反戦反帝のたたかいをなにひとつしませんでした。また第二インタナショナル諸党の中には、さきにのべたように、帝国主義の植民地政策に協力すべきだと主張したり、マルクス主義を頭から否定する連中が、たくさんいたにもかかわらず、マルクス主義者と自称する第二インタナショナルの指導者たちは、こうした日和見主義者を党内にかかえこんだまま、なんの処置もおこなわず、こうした連中と仲よくやっていたのです。

これにたいして、レーニンに指導されたロシアのボリシェヴィキは、思想的、政治的、組織的に統一したプロレタリアートの党がなければ、革命をやりとげることにはできないということからこれまで内外の日和見主義と一貫して非妥協な闘争をすすめてきましたが、一九一二年、ついに日和見主義的なメンシェヴィキと最後の手を切ってしまいました。

なお、ボリシェヴィキのメンシェヴィキに対する関係の経過をここでつけくわえておきますと、一九〇三年の第二回大会でボリシェヴィキが社会民主労働党の中央機関を握ると、メンシェヴィキはその指導を拒み、党からでていきました。しかし、政治的経験をもつていなかったロシアの労働者大衆は、まだメンシェヴィキの本質をみぬくことができなかつたので、両派の統一をつよくのぞみ、このため両派はこのち一九一二年までに、幾度か一つの社会民主労働党に合流しました。

しかしそのあいだも、ボリシェヴィキは結束して一つの指導のもとに活動し、政策上、理論上つねに革命的原則をまもってメンシェヴィキの日和見主義と非妥協的なたたかかってきました。そしてついに一九一二年、第一次世界大戦前における労働運動の高揚期をむかえるなかでこれと最終的にたもとをわかつことになったのです。このことは大戦中にロシアに革命情勢があらわれたときに、一九〇五年の場合とはちがつて、ボリシェヴィキが一枚岩の党として革命闘争を指導することを可能にし、一〇月社会主義革命を成功にみちびく主体的な基礎条件を準備したという意味で、重大な意味をもっていました。

一九一四年八月、第一次世界大戦が勃発しました。開戦の時期に、第二インタナショナル諸党は労働者大衆の反戦的、反帝國主義的気分の強化を反映して、政治的にますます大きな勢力となり、ドイツで一〇〇、フランスで一〇三、イタリアで八〇、イギリスで四三、フィンランドで九〇、オーストリア―ハンガリーで八二という具合に、多数の国会議員をもっていました。

しかし日和見主義に毒されたこれらの党とその指導下の労働組合の右派・中央派幹部は、英、独、仏の党の指導部が戦争勃発と同時にとつた態度がしめしているように、祖国の防衛を口実にして、帝國主義者がおこなう侵略戦争を支持し、議会で軍事予算や戦時公債に賛成投票し、革命と労働者階級の国際主義とを裏切りました。ドイツ社会民主党は、第二インタナショナル諸党のうちで最強といわれ、指導的な役割をはたしていましたが、この党でも、国会議員団の会議は七

凡票対一四票で戦争支持をきめました。

社会主義を目標にかかげながら、改良主義の方法をとり、実際に革命をやるうとしない日和見主義は、いまでは、帝国主義の侵略戦争に協力する、公然たる社会排外主義へと成長しました。そしてこの裏切りは、各国のプロレタリアートをたがい殺りくへとかりたてることによって、国際労働戦線を分裂させ、国際社会主義組織としての第二インタナショナルを崩壊させたのです。裏切りをおこなったのち、右派や中央派は裏切りを合理化するためにさまざまの議論をあみだしました。

右派は、相手国が侵略したのだから、祖国を防衛するのはあたりまえだといいました。しかしこれはとくにインタナショナルの大会で解決ずみの議論で、どちらが先に発砲しようと、帝国主義戦争は帝国主義戦争であり、それは、労働者階級のたたかいの方向に関係のないことでした。中央派はもっと巧妙に、現在のインタナショナルの力ではこうした大戦をくいとめることができないうのだと、弁解しました。しかし、こういう議論も、すでにシュトゥットガルト大会の決議で解決済みでした。戦争勃発にさいして、たとえ大衆が反戦と帝国主義政府打倒の運動にたちあがれなかつたとしても、革命的社會主義者たるものは労働者階級がとらなければならぬ原則的な態度を身をもってしめさなければならぬはずですし、また、そうすることによつてはじめて、戦時下の諸条件を利用して労働者大衆と人民をめざさせ、革命闘争へと結集していくことがで



きるはずです。

大戦勃発にあたって、こうした革命的な路線をまもり、国際主義の立場を明確につらぬいたものは、ロシアのポリシェヴィキ党だけでした。このほかにブルガリア労働社会民主党、セルビア社会民主党、イタリア社会党、アメリカ社会党、カナダ社会党なども、戦争反対の態度をとりましたが、ポリシェヴィキ党のような明確な革命的立場をとっていませんでした。

### この章のまとめ

以上、この章では帝國主義の時代にはいったのち、第一次大戦にいたるまでの労働運動についてのべました。

ここで忘れることができないのは、労働運動における日和見主義、修正主義の問題です。右翼日和見主義と、それを理論的に基礎づけようとしてマルクス主義の「修正」をくわだてる、いわゆる修正主義の理論とは、独占資本の超過利潤のわけまえにあずかる労働貴族層と労働官僚の理論であり思想でした。こののち現代にいたるまで、おなじ根から、あるいはそうした根から生まれる思想的影響に屈伏することによって、こうした修正主義の理論が、少々形をかえてくりかえし生まれてきています。しかしその原型はベルンシュタインの理論にあり、表面的には言葉がええていても、内容はおどろくほど似ているのが、その特徴です。

この時期における労働運動の歴史、とりわけ第二インターナショナルの崩壊の歴史は、労働者階

級の党が真にその階級的役割をはたすためには、こうした日和見主義や修正主義にたいする警戒心をたかめ、その小さなあらわれにたいしても、不斷にたたかい、これをその芽のうちにつみとってしまわなければならないという教訓を教えてくださいました。

一方、この時代になると、ドイツ労働者階級にかわってロシアの労働者階級が、国際労働者階級運動で先進的な役割を演ずるようになりました。レーニン主義は、マルクス主義を帝国主義の具体的諸条件にあわせて創造的に発展させたものであり、それは帝国主義の時代におけるプロレタリアートのたたかいの指針となりますが、ロシアの労働者階級はレーニンに指導されて第二インターナショナルの党とはちがった、新しい型の革命党をつくりあげることによって、そうした役割を果たしたのでした。

《参考文献》

- 1 レーニン「帝国主義論」
- 2 レーニン「第二インターナショナルの崩壊」
- 3 「ソ連邦共産党史」(一)

第六章  
第一次世界大戦と一〇月社会主義革命



## 大戦の勃発とボリシェヴィキ党の活動

一九一四年八月にはじまった第一次世界大戦は、帝国主義の発展そのものによってひきおこされたものでした。

レーニンが「帝国主義論」であきらかにしたように、帝国主義の特徴は独占体の支配です。巨大な資本を蓄積したひとにぎりの独占資本は、国内市場の榨取だけでは満足しないで、植民地や経済発展のおくれた地域へでていき、二〇世紀の初めまでに、地球全体が資本主義強国のあいだで分割されてしまったということは、前章のはじめにのべました。ところが、もともと資本主義は不均等に発展するものなのに、帝国主義のもとでは、この発展の不均等性が経済面でも政治面でもいっそうはげしくなり、そのため国と国とのあいだの均衡がたえず破壊されます。つまり、経済力や軍事力の相互関係がかわっていきます。そこで、強くなった国、おかれて出発しながら他の国を追いこして発展した国は、いっそう広い市場や植民地を要求します。しかし、全世界がすでに強国のあいだでわけどりにされてしまっているのですから、世界の新たな再分割は、戦争によっておこなわれるほかありません。

第一次大戦のばあいには、それまで資本主義の発展がおくれている、一九世紀の末に急速に工業を発展させたドイツが、あらたに植民地や市場を要求して、大植民地帝国を領有していたイギリスと衝突しました。そこで英独帝国主義の対立が戦争の基本的な原因となりましたが、これを中心に、たがいに対立する帝国主義諸国が、二つの敵対する陣営にわかれていき、一五億の人口をもつ二八カ国がこの戦争にまきこまれ、七、四〇〇万人が戦争に動員されるという世界史はじまっていろいろの大戦争に発展したのです。

しかし、大戦のこうした根本的な原因とならんで、革命運動の成長を阻止しようという帝国主義者のもくろみが、戦争をひきおこす重要なきっかけになっていたことに、注目する必要があります。第一次ロシア革命いご、すべての国で発展していた革命運動を戦争でそらし、各国労働者をたがいにたたかわせてその国際的統一を破壊し、こうして革命運動を鎮圧することができるものと、帝国主義者は考えたのです。

大戦がはじまった直後の時期には、帝国主義者のもくろみは成功したかにみえ、戦争勃発と日和見主義者の裏切りによって、各国の労働運動は一時後退しました。ロシアはこの大戦で英・仏側につき、ドイツやオーストリア、ハンガリーとたたかうことになりましたが、ここでも、第一次革命後の後退期をぬけだしてふたたび高揚期をむかえつつあった労働運動は、戦争勃発と同時に一時沈滞しました。

しかし、レーニンとボリシェヴィキ党の革命への確信はゆるぎませんでした。弾圧をさけて国外にでたレーニンの指導をうけつつ、ボリシェヴィキ党はただちに活動を開始しました。

党はすぐさま反戦闘争をよびかけただけでなく、戦争で生じたすべての困難を、ツァーリズム打倒のために利用するように、呼びかけました。帝国主義戦争を内乱に、支配階級にたいする革命に転化せよが、ボリシェヴィキ党の基本的なスローガンになりました。

また日和者主義者が「祖国防衛」という戦争協力のスローガンをかかげたのにたいして、ボリシェヴィキ党は「戦争におけるツァーリ政府の敗北」というスローガンをかかげました。もちろんこれは人民に破壊行為をよびかけたものではなく、労働者階級の党は政府を強化するような方針を支持してはならず、戦時下であくまで革命闘争をつづけるという意味でした。ブルジョアジーや日和見主義者は、ボリシェヴィキは愛国心がない、祖国の裏切者だといって非難しました。しかし、これこそぬすつと、ただけしい言い分というものです。ボリシェヴィキは実は祖国を愛し祖国の人民をもっとも愛したからこそ、帝政ロシアを祖国のようにみせかけて人民を搾取し抑圧し戦争へとひきずりこむものを打倒するために、あらゆる流れに抗して一身をささげようとしたのでした。

さらに、ボリシェヴィキ党は、第二インタナショナルと完全に手を切れというスローガンをかかげました。なぜなら、日和見主義者との統一をたもっていくことは、ブルジョアジーと同盟し、

戦争に協力することを意味したからです。そしてレーニンは、第二インタナショナルの指導者の裏切りで破壊された労働者階級の国際的統一を回復するために、新しい第三インタナショナルを創設するという任務を提起し、そのための活動にとりかかりました。

戦争が経過するなかで各国労働者のあいだに平和を要求する声がつよまってくると、一九一五年八月、中央派の一部のよびかけでスイスのツインメルヴァルトで社会主義者の国際会議が開かれましたが、レーニンは中央派を中心とするこの会議に出席して、そこでの活動をつうじて、国際主義の立場にたつ左派グループの結集につとめました。「ツインメルヴァルト左派」と呼ばれるようになったこのグループを中心にして、こののち、すべての国に帝国主義に反対するために国際プロレタリアートが団結してたたかうことを主張する国際主義的運動が形成されるようになります、翌一六年スイスのキンタールで開かれた第二回会議では、その影響力はさらに拡大しました。レーニンがおこなったこうした活動は、のちに第三インタナショナルの創立と各国共産党の創立となって結実することになります。

## レーニンと社会主義革命の理論の発展



この間に、レーニンは有名な「帝国主義論」をはじめ、いくつかの重要な論文をあらわして、その中で帝国主義の分析をおこない、マルクス、エンゲルスの社会主義革命の理論をあらたに発展させました。

一、まず第一にレーニンは、帝国主義が社会主義革命を実現するための客観的な条件をつくりだしていることを明らかにしました。

帝国主義は資本主義の最後の段階であつて、そのもとでは資本と労働とのあいだの矛盾、帝国主義国どうしの対立、帝国主義国と植民地・半植民地のあいだの対立がいちじるしくつよまります。ところが帝国主義どうしの対立によって不可避的にうみだされた戦争は、帝国主義のこれら小さいの矛盾を異常に激化させることによつて、資本主義体制全体の危機（資本主義の全般的危機）を生みだし、多くの国に革命情勢をつくりだしていたのです。

二、つぎにレーニンは、帝国主義の条件のもとでは、たとえばイギリス、アメリカのように、資本主義がもつとも発展して、人口の大多数が労働者になつていような国でしか、社会主義革命は実現できないと考えるのは、あやまりであることをあきらかにしました。彼は、そうではなくて、革命は、帝国主義の矛盾がもつともするどくあらわれているところ、そして農民と非プロレタリア大衆の先頭にたつてたたかう能力をもつたプロレタリアートとその党が存在するところ——つまり帝国主義の鎖のもつとも弱い一環で——、おこるだろうと指摘しました。

三、第三に、レーニンは、社会主義革命はすべての資本主義国か、もしくは大多数の資本主義国で同時におこななければ勝利できないだろうという、マルクスやエンゲルスがたてた見通しを再検討して、こういう見透しは以前には正しかったが、帝国主義の条件のもとでは、資本主義の発展の不均等性がつよまるために、社会主義革命がはじめは少数の国もしくは一国でも可能になっているということ、あきらかにしました。↓スターリンへ

こうした、帝国主義の諸条件の具体的な分析にもとづいて、レーニンが社会主義革命の理論を發展させたことは、いうまでもないことですが、ひじょうに重要な意義をもっていました。

まずそれは、日和見主義者の理論全体に打撃をあたえました。日和見主義者は、資本主義の發展につれて労働者階級が人口の大多数をしめるようになれば、労働者階級の支持する議員が議会で次第に多数をしめるようになり、議会闘争だけをつうじて革命が実現するかのようになり、労働者階級と人民を大衆的な革命闘争へと組織することを放棄していたのです。それはまた、ロシアでまっさきに革命がおこるようなことはないと主張していた、メンシエヴィキその他のロシアの日和見主義者の主張を粉碎し、労働者、農民、被抑圧民族のたたかいに指針と確信をあたえました。

## 二月革命（ブルジョア革命）

歴史の進行はレーニンの分析が正しかったことを証拠だてました。

帝国主義の世界的な鎖のもつともよわい一環であつたおくれたロシアで、戦争の影響はとくにひどくあらわれました。

戦争で、これまでもつぱら外国にたよつていた機械類の輸入はたえ、工業生産は低下しました。国内輸送は混乱しました。多数の農民が戦争にかりだされたために、農業の生産も低下しました。その結果、食糧品、工業製品の価格はあがり、労働者や農民の生活はたえがたいものになりました。そして、ボリシェヴィキ党が、官憲のきびしい弾圧で破壊された党組織の再建をすすめるのとならんで、労働者は、一九一五年になると、もうその指導のもとでストライキ闘争にたちあがりはじめましたし、その年の一〇月には戦艦ガングート号の水兵が反乱をおこすという事件さえおこりました。

一九一六年になると、ストライキ労働者の数は一〇〇万に達し、戦線では兵士がその影響で上官に反抗したり、逃亡したりするようになりました。また農民は地主の屋敷を襲撃し、中央アジ

アヤカザフスタンでは被圧迫民族が暴動にたちあがりはじめました。

人民の革命的な動きをみて、支配層は混乱しました。ツァーリ政府は大急ぎで戦争をやめて革命の弾圧に力を集中しようと考えて、ドイツとの単独講和を結ぶための秘密交渉を開始しました。一方、英・米・仏の帝国主義者にあとおしされたロシアのブルジョアジーは、人民の信頼をうしなつたツァーリを退位させることによって、戦争をつづけようと画策しはじめました。

しかし、混乱した支配層に革命を防ぎとめることはできませんでした。一九一七年にはいるとストライキの波は日ましにたかまっていきました。そして二月二三日、ストライキをたたかっていた首都のプチロフ工場の労働者が、国際婦人デーのデモを開始すると、これに他の労働者が合流し、翌日、デモはいっそう大きなものに発展し、首都の二〇万人の労働者がストライキにたちあがりました。

ボリシエヴィキは、このストをゼネストへ発展させ、蜂起へもっていくことを決定しました。

二月二六日、労働者はボリシエヴィキの呼びかけに応じて政治的ストライキから蜂起へと移行しました。労働者は警官を武装解除してみずから武装し、兵士を説得してこれを味方にひきいれました。翌二七日には蜂起は全市にひろがり、六万以上の兵士が蜂起した人民に合流しました。それは労働者と、軍服をきた農民との同盟ができあがったことを意味していました。首都で蜂起が成功すると、労働者は全国のあらゆる地域でたちあがってこの蜂起を支持し、ボリシエヴィキの呼びか

けにこたえて、労働者兵士代表ソヴェトを創設しました。ソヴェトは、八時間労働日を実施し、警官を追いはらって赤衛隊をつくり、あるいは裁判官をやめさせて人民の裁判官を選びました。二月革命は勝利しました。ブルジョアジーは、はじめニコライ二世をやめさせてその弟のミハイルに権力を握らせることを考えていましたが、そんなことではどうして人民の憤激をしづめることができないことを知ると、ツァーリズムの廃止を決意しました。皇帝制度は廃止されました。

### 一〇月革命（プロレタリア革命）

革命はあきらかに、労農同盟を基礎とするプロレタリアートのたたかいによって成功したのでした。しかし残念なことに、このとき労働者階級は革命の指導権を完全ににぎってしまうほど強くありませんでした。なぜなら、政治的経験をもたない広範な人民が一挙に政治の中にひき入れられ、それが自覚をもった労働者階級を圧倒してしまつたからです。それに政治的経験をもった労働者が多数軍隊に動員されて、農村出身の新しい労働者が工場に入つていたことも、労働者の組織力を一時的によわめていたからです。このためソヴェトの中でも日和見主義派のメンシェヴィキやエスエル（社会革命党）が多数をしめてしまい、ボリシエヴィキは少数派になりました。

こうしてプロレタリアートの指導力が十分でなかったため、革命の結果、労働者・農民の革命的民主主義的独裁の権力である労働者・兵士代表ソヴェトができただけでなく、これと並行してブルジョアジーの独裁の権力である臨時政府（国会臨時委員会）ができてしまいました。こうした二重権力の状態がながつづきするはずはありません。二月革命の勝利とともに地下からできて公然と活動を開始したボリシエヴィキ党は、革命をさらに、深めていくために、たたかわなければなりませんでした。

臨時政府をにぎったブルジョアジーは、戦争をやめる気はありませんでしたし、農民に土地をあたえ労働者の生活を改善する気も、民族的抑圧をとりのぞく気もありませんでした。このため人民の不満はたかまっています。ボリシエヴィキ党は、こうした帝国主義的な政府とはたとえどんな協定であってもいっさい結ばない方針をきめ、反戦闘争をおこない、革命をさらにおしすすめるよう労働者によびかけました。臨時政府となんらかの協定を結ぶことは、大衆に臨時政府にたいする幻想をもたせてその地位を強め、また革命的闘争の高揚をそらせてしまうことを正しくみぬいていたのです。

四月三日、レーニンが亡命先からペトログラードに帰ってきました。レーニンの指導によって党は「全権力をソヴェトへ」というスローガンをかけました。当時ソヴェト内で多数派をしめていた日和見主義派は、ツァーリズムが打倒されたことで革命はおわったものと考え、ブルジョ

アジールとたたかう意志をもっていませんでした。しかし、レーニンは、説得活動をつうじてポリシェヴィキがかならずソヴェト内で多数派をしめることができることを確信していました。したがって、ソヴェトが全権力をその手に掌握すれば、ブルジョア革命を社会主義革命へと成長転化させることができると考えたのです。

しかし、こうした革命の平和的な発展の見透しは、メンシェヴィキとエスエルの裏切りでたちまち消滅しました。というのは、ポリシェヴィキ党の呼びかけに応じて大衆の反戦闘争がたかまると、五月、ブルジョアジーは人民のたたかいを分裂させることを目的に、メンシェヴィキとエスエルを入閣させ、こうしてポリシェヴィキを孤立させておいて、七月には政府は一部の部隊を戦線からよびもどし、労働者の運動、とりわけポリシェヴィキ党にたいして、大々的な弾圧を開始したからです。二重権力はおわり、労働者と人民はふたたび武装蜂起する以外に革命の道をとざされました。

この間、ポリシェヴィキは労働組合や工場委員会をつくることにも努力し、大衆のあいだでたゆみなく活動していましたが、こうした活動は、この年の七月、君主制復活をくわだてたコルニロフ將軍の反革命陰謀を人民大衆が一致して粉碎したのち、目にみえて成果をあげはじめました。ソヴェトのポリシェヴィキ化が嵐のような勢いですすみはじめました。

九月、党はふたたび「全権力をソヴェトへ！」というスローガンをかかげました。しかしそれ

はもう以前のときとはちがって、革命の平和的發展をめざすスローガンではなく、ブルジョア政府打倒のための、武装蜂起をめざすスローガンでした。

この頃になると、農民、兵士、被圧迫民族の運動もその性格を変えつつありました。農民は実力で地主を追い払い、土地を自分たちで分配しはじめていました。兵士は指揮官を追いだし、自分たちで新しい指揮官をえらんで、ポリシェヴィキにしたがいはじめていました。また少数民族は労働者、農民の運動に合流して、統一戦線をつくりはじめました。こうした全人民の一致した反抗はエスエルやメンシェヴィキにも反映し、その中に左派ができて、分裂がおこりました。

七月の弾圧いらい姿をかくしていたレーニンは、一〇月、党の指示にしたがって首都に帰り、その指導で、武装蜂起を指導するための軍事革命中央部が設置されました。蜂起は一〇月二四日に開始されました。夜のあいだに赤衛軍の部隊はすべての官庁を占領し、臨時政府が逃げこんだ冬宮を包囲しました。そして翌二五日（新暦の一月七日）に臨時政府は倒され、ソヴェト政権の樹立が宣言されました。

この二五日の夕刻、第二回ソヴェト大会が開かれ、全国の四〇〇以上のソヴェトを代表した六五〇名の代議員が集まりましたが、そのうち四〇〇人がポリシェヴィキでした。ソヴェト大会は「平和についての布告」、「土地についての布告」を採択しました。つまりただちに全面的で公正な講和を結ぶことを提案し、また地主の土地を没収して農民の手にうつすことを宣言したので



す。

ソヴェト権力は数日間の戦闘のうちにモスクワでも樹立され、ついで全国に樹立されました。ついに、世界史上はじめて、ロシアで社会主義革命が勝利しました。ポリシエヴィキが労働者、人民の圧倒的な支持をえていたためと外国帝国主義が戦争遂行に力をうばわれていて、ロシアのブルジョアジーを手助けできなかったために、それはほとんど流血をみず、おどろくほどの静けさのうちにやりとげられたのです。

こうして勝利した一〇月社会主義革命が、たんにロシアの労働者と人民にとっての問題でなかつたことは、いうまでもありません。それはついに帝国主義の全一的支配をおわらせました。大戦とこの革命は資本主義の全般的危機の始点になりました。地球の六分の一を占める地域に、労働運動がつねにそれをめざしてすすんできた社会主義の旗がうちたてられ、世界は、くちはてて死滅しつつある資本主義と、輝しい未来をもった社会主義との、二つの陣営に分裂しました。それは、人類の歴史に新しい時代——労働者階級がすべての形態をとった搾取を一掃する時代の端緒をきりひらいたのです。

こうした革命が、戦時下ですめられていた各国の労働者と人民の運動に、直接に大きな影響をおよぼしたのは、とうぜんのことでした。一九一八年の一月には、フィンランドに労働者革命がおこり、八月には日本で米騒動が勃発し、一〇月にはオーストリア—ハンガリーで君主制が倒

され、一一月にはドイツでも革命がおこりました。フランス、イタリア、ベルギー、ブルガリアなど、ヨーロッパ諸国での革命的闘争が促進されました。とりわけ中近東、アジアなどの植民地半植民地では、のちにのべるように中国の五・四運動や朝鮮の三・一闘争のような、民族解放をもとめる人民のたたかいが爆発し、また労働者階級の運動も確立して、こののちは民族解放闘争が組織的な一貫したものと発展していきます。

さらに一〇月社会主義革命の成功は、全世界の労働運動にさまざまな教訓をあたえましたが、なかでも、それはマルクス・レーニン主義の正しさをあきらかにするとともに、マルクス・レーニン主義にみちびかれた、豊かな経験をもつ、試練済みの革命党があるかないかが、そしてこれがしっかりと大衆に結びついていくかどうか、革命の成否をきめる決定的な条件であることを、はっきりさせました。そしてこのことを何よりも浮きぼりにしてみせたのは、ドイツとハンガリーにおける、革命失敗の経験でした。

### ドイツとハンガリーの革命

ドイツでも、戦争がながびくと、日和見主義指導者の見通しとはちがって、労働者と人民の戦

争と皇帝制度にたいする不満はたかまり、戦争が末期にちかづくにつれて革命的情勢が生まれてきました。

一九一六年六月には、革命的指導者リープクネヒトの逮捕をきっかけにして、労働者の第一回反戦ストがおこなわれ、一九一七年四月には、ロシアの二月革命に刺激されて第二回目の反戦ストがおこなわれました。そして平和と民主化を要求した一九一八年一月のストライキには一〇〇万の労働者が参加するところまでいきました。パンをもとめる暴動や兵士の反抗もふえました。

こうした反戦闘争のたかまりと敗戦から、支配層内にも動揺ができて、あくまで帝制維持と戦争の勝利を主張する帝政維持派と、妥協による講和ならびに国内改革を主張する派の二派に分裂はじめました。

他方、労働運動の側では、社会民主党と労働組合の指導部をにぎった右派が、あくまで支配層への協力をつづけていましたが、動揺的な中央派は、労働者の不満のたかまりをみると、社民党をはなれて、一九一七年四月に独立社会民主党をつくりました。他方、カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルグに指導される左派は、スパルタクス団という左派グループをつくって、はやくから革命派の結集につとめており、ロシア二月革命ののちには、「ロシアのプロレタリアートに見ならえ。平和と自由とパンのためのたたかいに立ちあがれ」、とよびかけ、「戦争をやめよ！ 政府打倒！ 社会主義万才！」のスローガンをかけて、非合法活動を積極的にすす

ました。

こうした活動は、労働者大衆の反戦ストライキをいちじるしく促進し、一九一八年一月におこなわれたベルリンでの反戦の大ストライキでは、労働者は当時ソヴェト・ロシア側が提案していた無併合、無賠償の講和をただちにむすべという要求を、政府につきつけるところまでいきました。

しかしスパルタクス団は、こうした活動をつづけながらも、その一方で、ロシアのボリシェヴィキとはちがって、中央派を味方にひきつけることに希望をつないで、独自の革命党をつくらうとしませんでした。したがって、独立社民党が結成されたときも、この中にはいり、その左派グループとして活動をすすめたのです。このことは、のちに革命が勃発してから、重要な意味をもつこととなります。というのは大衆はスパルタクス団やそれを中心につくられたドイツ共産党に  
なじまず、独立社会民主党に信頼をよせつづける結果となったからです。

支配層の側と労働運動の側がこのような状態にあったとき、一九一八年一月にドイツ革命が勃発しました。その導火線になったものは、一月五日のキール軍港の水兵の反乱でした。

一〇月末ドイツ海軍軍令部はイギリス海軍と決戦するため艦隊に出港を命じました。しかしキール軍港の水兵は、彼らを死地においたてるこの命令に反抗してデモをおこし、これが弾圧されると、たちまち彼らは蜂起を開始したのです。一月五日、すべての艦船に赤旗がたてられ、キ

レーニン

ールの市内では労働者が水兵の行動を支持してゼネストにはいり、これをきっかけにして、反乱はたちまちドイツ全土に拡大しました。労働者や兵士はロシア革命の経験にまなんで、都市や軍事中心地で労働者兵士評議会（レーテ、ロシアのソヴェトにあたるもの）をつくりはじめました。そして一一月九日、スパルタクス団と金属労働者の組織の指導で革命委員会がつくられ、その指導でベルリンの労働者がゼネストから武装デモへとすすみ、ついに帝制政府を打倒したのです。

しかし、大衆がたちあがって旧政府を打倒したものの、ドイツではこのとき革命を指導する革命党がありませんでした。このため革命の指導権は伝統の力にささえられた社会民主党と独立社会民主党の日和見主義指導者が握ることになりました。

労働組合の右翼的指導者カール・レギーンは、すでに革命の進行中に独占資本の代表とこっそり取引をはじめ、労働組合権の承認、工場委員会の設立などの条件とひきかえに、資本主義制度をのこすことを確約していました。社会民主党の右翼幹部であるシャイデマンとパウアーは、革命が勃発するまえの一〇月初めに、すでにそうした危険を感じとったブルジョアジーの要請にこたえて、あらたにつくられた連立内閣に入閣していました。一月に蜂起がはじまると、こんどはもう一人の右翼指導者であるエーベルトが政府首班に命ぜられ、独立社会民主党とともに臨時政府をつくりました。

しかしこうして事態が進展するあいだ、エーベルトやシャイデマンは、たえず独占資本や軍部

の代表と連絡をとりつづけました。彼ら自身がのちにあきらかにしたように、彼らが臨時政権をひきうけたのは、「ドイツをポリシェヴィズムからすくう目的」のためであり、革命の指導権を握って、権力が労働者兵士評議会の手にうつるのを阻止するためでした。

他方、革命的左派の指導者の大部分は獄中にとらえられているか、国外に亡命していました。が、一月に大衆が自然発生的な蜂起にたちあがった数日後には出獄し、また亡命先から帰ってきました。そして大衆がそのたたかいの圧力で帝制を打倒したのちに、革命党結成にとりかかり、一月三〇日にスバルタクス団を基礎にしてドイツ共産党をつくりました。しかしこれまで独自の党をつくっておらず党結成の準備が不足していたためこの決定的な瞬間に革命的な勢力を十分に結集することができず、大衆との結びつきもよわく、またロシアのポリシェヴィキのようには闘争指導に習熟していませんでした。

さて革命の最初の数日間、帝政時代の旧国家機構は麻痺させられ、多くの場所で労働者・兵士評議会が権力を握っていました。幾つかの都市では、評議会が国家機関から反動分子や軍国主義者を一掃しており、また企業内で労働者が生産管理をうちたてた例もありました。しかし、右翼社会民主主義者の指導のもとで日和見主義が長期にわたって労働者大衆を支配していたので、大部分の労働者は、社会主義を要求していながら、それを達成する方法について、はっきりしたイメージをもっていませんでした。彼らは帝制が倒され、共和国が樹立され、普通選挙法が実施

されれば、社会主義をうちたてる準備ができるのだと、信じこんでいました。しかし、それでは、実は民主主義革命がはじまったばかりで、これを社会主義革命へと成長させる保証にはなにひとつありませんでした。

エーベルトの臨時政府は帝制時代の官僚機構と軍部をそっくりそのままひきついでいました。軍隊の統帥権は旧参謀本部がにぎっていました。経済の支配権はブルジョアジーの手にのこされていきましたし、政府は土地改革の問題さえ提起しようとはしませんでした。そして社会民主党は、一二月それが圧倒的多数をしめた全ドイツ労兵評議会代表者大会で、すべての権限を臨時政府にゆだねることを決議させると、そのあと、革命的な労働者と兵士を弾圧するのに力をそそぎはじめました。

一二月二三日、政府はまずベルリンにやってきて給料の支払いを要求した革命的な人民海兵団にたいして砲撃をはじめました。しかしこのときは労働者がかけつけてこの砲兵を追いはらったので、政府は一步後退しました。しかし一月四日になると、政府は労働者に人氣があつた独立社民党のアイヒホルンを突然ベルリン警視總監の地位から罷免しました。これはベルリン労働者を準備なしで反政府行動へとそそいだすための挑発を目的としたものでした。

一月五日独立社民党、共産党、金属労働者の代表がつくつた革命委員会は、労働者にむかつて反革命的な軍隊の解散、プロレタリアートの武装、アイヒホルンの復職、政府打倒のためにたた

二人の死

反共革命

ワイマール体制

敗北の意味は

かうようよびかけました。ベルリンの労働者は呼びかけにこたえて、翌六日からゼネストにたちあがり、街頭に進出して、各駅や社会民主党機関紙発行所を占拠しました。

しかし一月一日に政府は軍隊を結集して残虐な弾圧を開始しました。労働者が占拠した建物は砲撃され、逮捕された多数の労働者が殺されました。共産党は中央委員会の決定で地下にもぐりましたが、ルクセンブルグやリープクネヒトは、地下でなお活動をつづけていました。しかし一月十五日この二人はついに反革命軍部にとらえられ、将校の手で殺されて、リープクネヒトは死体安置所に、ルクセンブルグは運河の中に投げすてられました。こうして発足したばかりのドイツ共産党は、二人のすぐれた指導者をうしなうことになったのです。

この事件の直後、労働者大衆の革命的闘争が一時後退した時期に総選挙がおこなわれ、右派の社会民主党が議会の指導権をにぎり、ブルジョアのなワイマール体制がかためられていきました。

このあと社民党の指導のもとで、ドイツでは八時間労働制、社会保険、経営協議会制度など、労働者をなだめるための「進歩的」政策がとられました。それは労働者を革命からそらすための「アメ」にすぎず、労働者がそのたたかひの力で獲得したこれらの成果も、破局的なインフレの進行の中でその意味をほとんど失いました。

そこでドイツ労働者は社民党にだまされたことに気づくようになり、バイエルン、ザクセン、チューリッゲンなどの州では、一時は共産党の州政府ができますが、これらの州政府も中央政府



が軍隊をさしむけて弾圧してしまい、一九二三年までで戦後の革命情勢はうしなわれてしまいま

ハンガリー革命

←

何故に敗北したのか

を批判

またハンガリーでは、一九一八年一〇月に大衆の圧力で旧政権はたおれ、ブルジョア民主主義者の臨時政権ができましたが、労働者階級はなおも闘争をつづけ、その圧力のもとで一九一九年三月にソヴェト政権ができました。政権を担当したのは、成立したばかりのハンガリー共産党と旧来からあったハンガリー社会党の左派とが合同してできた、ハンガリー社会党でした。しかし、あらたに合同してできたこの党は、革命的闘争の経験も浅く、思想的にも強固ではありませんでした。そして党は労働同盟に注意を払わないという重大な誤りをおかしていました。

そこで、フランス政府にあとおしされたチェコスロヴァキアとルーマニアの軍団の武力攻撃をうけると、社会民主党出身の幹部のあいだに動揺がおこって、同年八月にハンガリー・ソヴェト共和国は崩壊してしまいました。

こうして、ドイツとハンガリーでは、革命はロシアとはちがった道すじをとり、結局、社会主義は実現しませんでした。ことにドイツでは、すでに戦前から社会主義革命の社会経済的な前提がすっかりだされていたにもかかわらず、一月革命は、労働者大衆のたたかいによって帝制打倒のブルジョア民主主義革命を実現させたものの、その段階にとどまって社会主義革命には成長転化しませんでした。それは、何よりもまず、ドイツの労働者階級が政治的経験をまだ十分にもって

おらず、また統一を欠いていたこと、革命的危機の決定的な時期に経験豊かな革命党が存在せず、したがってロシア革命の影響でできた労兵評議会は日和見主義者に指導されることになったことによるのであり、こうした理由で、社会民主党の右翼指導者たちが、労働者の革命的闘争をくじき、これをブルジョア民主主義革命の枠内におしとどめることを許してしまったからです。

### この章のまとめ

この章では、ロシア革命とそれにひきつづくドイツならびにハンガリーの革命についてのべました。

労働者階級の運動がはじまって以来、それははじめは労働者階級の理論も党もなしに手探りで、ついでマルクス主義が確立していろいろこの科学的理論にみちびかれながら、一步一步と前進してきました。そして、ロシア革命の成功は、この労働者階級の理論の正しさを、みごとに実証しました。

ロシア革命の成功と、ドイツならびにハンガリーの革命の失敗の経験は、社会主義革命と民族解放革命の客観的諸条件が成熟している帝国主義の時代にあつては、革命の主体的条件がどれだけつくりだされているかが、革命の成否にとって決定的な意味をもっていることを明らかにしました。主体的条件とは、政治的経験をもった労働者階級の存在、そして何よりも、この労働者階級としっかり結びついた、豊かな経験をもつ、一枚岩の団結をもった、革命党の存在でした。口

シア革命を成功にみちびいたものは、こうした党であり、ドイツ革命が失敗したのは、そうした党と労働者階級が存在しなかったからでした。

ドイツでは、革命的高揚の中で、労働者階級の闘争を社会主義革命からそらせるために、独占資本はドイツ社会民主党をたくみに利用し、また、資本主義体制のもとでもっとも民主的といわれる憲法——ワイマル憲法だとか経営協議会制度だとか、一部産業の国有化をめざす社会化委員会だとかをつかつて、労働者階級に、革命的闘争とプロレタリア独裁の樹立なしに、社会主義へ移行できるかのような幻想をあたましました。しかし、これらのものは、社会主義に向って進むテコにはなりませんでした。ロシア革命の成功とドイツ革命の失敗は、こうしてまた、革命の決定的な問題は権力の問題だという、レーニンの教えの正しさを確認したのでした。

《参考文献》

- 1 レーニン「帝国主義論」
- 2 「ソ連邦共産党史」(㊦)
- 3 ドイツ統一社会党編「ドイツ共産党三十五年」
- 4 ワルンケ「ドイツ労働組合運動小史」



第七章

第一次大戦後の労働運動と  
第三インタナショナルの創立



## 第三インターナショナルの創立

ロシアで一〇月社会主義革命が成功したことは、マルクス・レーニン主義を指針とする経験豊かな革命党だけが労働者階級を社会主義の勝利へとみちびくことができるのだということを明らかにしましたが、この革命にひきつづいてヨーロッパやアジアに革命情勢があらわれてくると、ロシア以外の各国にこうした革命党をただちにつくりだす必要があることが、ますます痛感されるようになりました。

これより先、ロシアのボリシェヴィキ党は、一九一七年の二月革命の直後に、すでにレーニンの提案をもとにして、裏切りによってけがされてしまった社会民主党の名をすてて、この党がめざす究極の目標を正確にあらわしている共産党の名を名乗ることをきめるのと同時に、日和見主義や排外主義とはきっぱりと手を切った、ほんとうに革命的で国際主義の立場にたつ、第三のインターナショナルを創立するよう各国の革命的左派に呼びかけることを、決定していました。ところが一九一八年になると、ドイツ、ハンガリー、フィンランド、ポーランドなどでも共産党が創立されました。

そこで一九一九年三月、ソヴェト共和国、ドイツ、フランス、アメリカ、中国、朝鮮をふくむ三〇カ国の共産党、左翼社会主義者の組織、革命的サンジカリスト（ロシア革命を支持し、ソヴェトによるプロレタリア独裁の存立を支持したサンジカリスト）の組織などの代表をモスクワにあつめて、第三インタナショナル（共産主義インタナショナル、略称コミンテルン）の創立大会が開かれました。こういうと、あるいは、マルクス主義者でもない革命的サンジカリストがなぜ呼ばれたのか、と不思議に思う人がいるかも知れません。しかし、革命的サンジカリストは、口先でだけマルクス主義をとるなながら、行動では全く日和見主義的な、第二インタナショナルの中央派幹部とはちがって、ロシア革命がおこると、ソヴェトとプロレタリア独裁を支持しました。レーニンは、彼らが下部労働者大衆の戦闘性、革命性を代表していることを認め、これまで、彼らがマルクス主義をうけいれなかったのは、政治経験が不足したのと日和見主義者にたいして正当な反感をもっていたためで、こんごは、かならずマルクス・レーニン主義をうけいれさせることができるものと確信していましたので、彼らを創立大会にまねいたのです。このことは、日和見主義指導者にたいしてあのようにきびしい態度をとったレーニンが、革命的立場にたとうとする労働者にたいしては、実に柔軟で抱擁力ある態度をとったことをしめす、ひとつの例です。

コミンテルンは、第二インタナショナルとはちがって、民主主義的中央集権（民主集中制）の原則にたつ、革命的プロレタリアの国際組織で、各国共産党はその支部のかたちをとりました。



その目的は、労働者階級の大多数と勤労者の多くをマルクス・レーニン主義のがわにかちとること、プロレタリアート独裁の樹立をめざしてたたかうこと、資本主義の搾取や帝国主義の抑圧を一掃して社会主義社会をうちたて、さらに共産主義社会の建設にむかって前進することであつて、党の思想的、理論的基礎は、いうまでもなくマルクス・レーニン主義でした。

第二インタナショナルがおもに帝国主義国の社会民主党で構成され、アジアやアフリカの植民地、半植民地の解放運動に目をむけなかつたのにたいして、コミンテルンがはじめから東方の抑圧された諸民族の問題に目をむけ、植民地、半植民地の民族解放闘争とこれらの地域における革命党の建設に力をそそいだことは、そのきわだつた特徴でした。

### 第二インタナショナルの復活とコミンテルンの強化

ロシア革命が成功して間もない時期で、帝国主義諸国の政府はソヴェト政権を承認していなかったことはもちろん、これに敵対行動をとっていたときのことですから、コミンテルンの創立大会への各国代表の参加はいちじるしく困難であり、したがって、大会に出席した代表の数もけつして多かつたとはいへません。

しかし創立されたコミンテルンは、革命と民族解放をのぞむ全世界の戦闘的な労働者に支持されました。そしてドイツをはじめとするヨーロッパ諸国での革命的闘争の発展や、一九一九年の朝鮮の三・一人民蜂起、中国の五・四運動の開始などに代表される植民地・半植民地の革命的闘争の高揚の中で、その影響力は急速にたかまり、アメリカ合衆国（一九一九年）、スペイン、イギリス、中国（一九二一年）、というぐあいに、各国に共産党が創立されていきました。第一次世界大戦の時期に日本資本主義が独占資本主義の段階にはいるとともに、本格的な発展をとげた日本の労働運動を背景としながら、先進的な知識人と労働者の手で日本共産党が創立されたのは、一九二二年のことでした。

とくに重要であったのは、フランス社会党やドイツ独立社会民主党のもとで活動していた労働者党员が、日和見主義指導者をはなれてコミンテルンを支持するようになり、これらの党の大会が、コミンテルン参加を決議したことでした。このため一九二〇年に、フランス社会党は共産党になり、ドイツ独立社会民主党はドイツ共産党に合同してしまいました。そして大会決議をうけることを拒否した少数派が分裂して、それぞれ旧来のフランス社会党、ドイツ独立社会民主党の名をついだ党をつくることになったのです。

他方、その裏切りで第二インタナショナルを崩壊させた右派や中央派の幹部も、大戦がおわりと、その組織の復活にのりだしました。彼らは、プロレタリア独裁に反対し、ブルジョア民主

義を擁護することによって、共産主義に対抗し、社会主義革命の発展を阻止すること、労働運動を背景にして戦後の資本主義社会の中で一定の地位を確保することにとつとめたのです。

このため、右派は早くも一九一九年二月にスイスのベルンで二六カ国の代表をあつめて国際会議を開きました。そして、このときは、戦争を支持したために労働者大衆の支持をうしなつていて、参加を拒否する国もでてきたのと、交戦国の党の代表がたがいに戦争責任をなすりつけあつてみにくい対立をつづけたことのために、目的をただちにはたすことはできませんでしたが、結局一九二〇年六月にジュネーヴで大会を開いて、第二インタナショナルを復活させることになりました。しかしカウツキーらの中央派は、戦闘的になつた労働者大衆の圧力におされてこのときはこれに合流することができず、第三インタナショナルへの参加を画策しますが、コミンテルンによってこれを拒否されると、一九二一年二月にウィーンで別の組織——ウィーン同盟（第二インタナショナルと第三インタナショナルのあいだを動揺していたので第二半インタナショナルなどと呼ばれた）をつくることになりました。

こうして一九二〇年には、全体としてみると、第二インタナショナルの指導者の力はよわまり、各国で共産主義運動が飛躍的に成長して、革命戦線が国際的にいちじるしく強化され、コミンテルンの威信はひじょうにたかまっています。しかし革命党の急速な成長は、その中に日和見主義的な分子と思想が流れこんでくる危険をとまいません。中央派指導者は、すでにのべたように、

革命化した大衆にみはなされて労働運動の指導権をうしなうことを恐れて、日和見主義思想をもったままコミンテルンにもぐりこもうと画策していました。また、マルクス・レーニン主義の基本的立場を支持して、社会民主党の左派や革命的なサンジカリズムの運動から共産党へ移ってきたものも、左右の日和見主義の残りかすを身につけていました。

たとえば社会民主党の左派出身の人々は、中央派幹部になお期待をよせていました。また革命的サンジカリズム出身の人々は、ひとりよがりな革命的純粹さを主張して、大衆とともにたたかうことを軽視し、ブルジョア議会や右派幹部の指導下にある労働組合で活動することをまらがいだといひ、こうしてセクト主義におちいって、みずから孤立していこうとする傾向がありました。

そこでレーニンは、「共産主義における『左翼』小児病」をあらわして、まだ豊かな経験をもたない各国の党が、こうした偏向を克服するのを援助するとともに、一九二〇年にひらかれたコミンテルン第二回大会で、コミンテルン加盟に必要な二一カ条にわたるきびしい条件をきめました。

「共産主義における『左翼』小児病」は、極左主義のもつ多くの弱点を具体的に指摘していました。それは議会政治と選挙への参加の拒否、保守的労働組合の中にとどまって活動しようとしていない偏向、政治的問題についての柔軟性を欠いた態度、合法的舞台を活用することの軽視などでした。レーニンは、この本をあらわすことによって、党の統一ならびに大衆との結合のさまたげ

になる、こうした極左的偏向の克服を援助したのでした。

また「二一カ条の加盟条件」は、日和見主義的な中央派幹部がコミンテルンにもぐりこんでくるのを阻止するとともに、各国の党内にあるそうした日和見主義の残りかす、とりわけ中央派にたいする幻想をぬぐい去って、新しい型の党の建設の任務にとりくむことを援助することを目的にしていました。それは要約すると、次のようなものでした。

党が党機関紙を完全に掌握し、精力的に宣伝活動をすすめること。党内の重要な地位から修正主義者をしりぞけること。農民のあいだで党活動をすすめること。「社会愛国主義」と修正主義をすて、自国の帝国主義をはっきり非難すること。保守的な労働組合や協同組合の中でも活動すること。アムステルダム労働組合インタナショナル（国際労働組合連盟）とたたかうこと。議会内フラクションを党が厳格に統制すること。組織上の民主集中制、党員の定期的な点検、帝国主義の攻撃からソ連を守ること。コミンテルンの決定を承認し実行する党綱領をつくり、共産党と名乗ること。コミンテルンの資料を党機関紙に発表すること。

### コミンテルン第三回大会と統一戦線政策

一九二一年六月にはコミンテルンの第三回大会が開催されました。

コミンテルンはこのときまでに各国における党建設の任務をほぼはたしていました。フランス社会党、ドイツ独立社会民主党の多数派はコミンテルンに参加し、ロシア七〇万、ドイツ三〇万、チェコスロヴァキア三〇万、フランス一〇万というぐあいに、共産党は各国で大衆的革命党へと発展してしました。

しかし、この間に、ヨーロッパ諸国の独占資本も、大戦でうけたいたでからたちなおり、労働者階級の革命攻勢にたいする防禦から、反撃へと移りはじめていました。

ドイツとハンガリーで革命が失敗しただけでなく、フランスの鉄道労働者と金属労働者が一九一九年におこなった大ストライキ、イタリア金属労働者が一九二〇年にすすめた革命的な工場占拠闘争、またイギリスの炭鉱労組、鉄道労組、運輸一般労働組合の三組合がすすめた統一闘争などは、すべて右派指導者やアナルコ・サンジカリズム指導者のあやまった指導と裏切りで敗北してしました。こうして、大戦の末期から戦争直後の時期に存在した、労働者大衆と人民をただちに革命へとたちあがらせる条件は、しだいになくなりつつありました。しかも、一九二〇年からはじまった戦後恐慌の中で、独占資本は反撃にうつり、労働者が戦後の革命的闘争でかちとった賃金、労働条件、社会的諸権利などにつきつぎに攻撃をくわえてきたのです。

そこでコミンテルンの第三回大会は、さらに「大衆の中へ」はいつていき、長期にわたってね

ばりづよく活動することによって労働者大衆の大多数を共産党の側にかちとること、そのために労働者の日常的な要求をまもるたばかりで、労働者大衆をプロレタリアート独裁の権力の樹立をめざす革命にそなえさせるためのたたかいとを結合することを、各国共産党の任務として提起しました。そしてこの任務に関連して、このあとの一二月の執行委員会のうちだされたのは、どの政党、どの労働組合を支持するにかかわりなく、具体的な要求にもとづいて労働者の行動を統一するという、統一戦線の戦術でした。

この統一戦線戦術は、翌一九二二年のコミンテルン第四回大会でいっそう具体的に展開され、独占資本に対抗するために共産党は具体的要求をにかけて、社会民主党ならびにその指導下にあらる諸組織と統一戦線をつくるだけでなく、この統一戦線を基礎にして統一戦線政府をつくることのできる、ということも明らかにしました。のちに、一九三〇年代の反ファシズム統一戦線や反帝反封建の民族統一戦線としてくりひろげられ、現在も各国で革命党がかならず基本的な政策としてかかげている統一戦線の政策が、こうしてはやくもうちだされることになったのです。

コミンテルンが創立されたときには、第二インタナショナルの右翼の指導者たちは、単一の労働戦線を破壊する分裂主義者だといって共産主義者を攻撃していました。しかし、実は彼らこそが、大戦の勃発とともに労働者階級を裏切ることによって、その統一した戦線を破壊し分裂させたのであり、コミンテルンの創立は、労働戦線のほんとうの統一をあらたにうちたてるためにせ

ひとも必要なことでした。

コミンテルンが創立され、各国に共産党が大衆的革命党として建設されて、労働戦線統一の核ができたいま、コミンテルンが労働者の共同の要求をもとにして、共同の敵にたいする統一行動を申し入れると、こんどは彼らは、さまざまの口実をもうけて、この申し入れをすべて拒否し、労働者階級と人民の統一戦線の実現を阻止するために全力をあげました。

### プロフィンテルンと国際労働組合連盟

第一次大戦後、社会主義をめざす労働者階級の党の国際組織に新しい発展がみられたのとならんで、国際労働組合運動にも、これまでにみられなかった新しい発展がおこりました。それは、右翼的指導者に機関を握られたこれまでの国際労働組合組織とはちがって、階級的・戦闘的な立場にたつ労働組合の国際的連携がうちたてられたことです。

大戦中から戦後にかけて、発達した資本主義国では、それまで組織されていなかった不熟練労働者が大量に組合運動の中に流れこんできました。たとえばイギリスの組合員数は、戦前に四〇〇万であったのが、一九二〇年末には八三四万になっていましたし、フランスの組合員数は、戦前の四〇万から一九一九年末には二〇〇万へとふえていました。



こうして、不熟練労働者がどつと組合運動の中に流れこんでくるとならんで、組合の組織形態も、それまでの職業別組合から、一般労働組合や産業別労働組合へとむかいはじめました。

またアジア、中近東、ラテン・アメリカなどの、これまで労働組合運動がなかった国ぐにで、あらたに労働組合運動が發展しはじめました。

すでのべたように、戦前に国際労働組合組織の機関や欧米諸国の労働組合組織の指導権を握っていたのは、改良主義、労資協調主義の右派幹部でしたが、彼らは熟練労働者が自分たちだけでつくっていた幅のせまい職業別組合の官僚主義的な組合機構をその根じろにしていきました。彼らは、労働組合運動の中にはじまっている新しい發展には目をふさぎ、大戦がおわると、一九一九年七月にアムステルダムで世界労働組合会議を開いて、自分たちの裏切りで崩壊させてしまつた国際労働組合連盟を、再発足させました。これはアムステルダム労働組合インタナショナルとよばれました。

しかし、戦時と戦後の時期に組合運動の中に流れこんできた戦闘的な労働者大衆は、こうした裏切り幹部の指導と組織を支持しませんでした。ロシアをはじめとする東欧諸国や植民地諸国の労働組合は、国際労組連盟に加盟しようとしませんでしたし、また右派幹部の指導でこれに加盟した西欧諸国の組合の中にも、広範な反対派ができました。

そのうえ、戦後に西欧の独占資本が戦争のいたでからたちなおり、労働者階級にたいする攻撃

をつよめてくると、国際労組連盟の改良主義指導者は、これとたたかおうとしないで、かえって、こうした右派政策に反対する戦闘的な組合支部や組合員を除名しはじめました。

そこで、労働組合の戦闘的指導者たちは、一九二〇年七月にモスクワに集まって、国際労働組合産業別評議会をつくり、ついで翌二一年七月に、これを赤色労働組合インタナショナルへと再組織しました。こうして、労働組合運動の中にあらわれた新しい動きを全面的に発展させ、労働組合運動の階級性、戦闘性の強化をはかろうとしたのです。組織的というと、赤色労働組合インタナショナル（プロフィンテルン）は、国際労組連盟に対抗し、それと競合する、労働組合の国際組織ではありませんでした。それは、国際労組連盟に加盟していないか、もしくはそれから除名された組合、つまり無所属組合と、国際労組連盟加盟組合の中にいてこれを階級的な組合につよめるためにたたかっている左翼反対派グループの、あつまりでした。

創立大会では、サンジカリストたちが、右派幹部の指導下にある組合とはきっぱり手を切って、これとは全く別に、革命的労働組合をつくるべきだと主張しました。これでは、戦闘的な活動家をわざわざ大衆からきりはなしてしまうことになったでしょう。しかし、レーニンは、そんなことをすれば、喜ぶのは右派幹部と資本家だ、われわれは大衆のいるところで活動しなければならぬと教えました。

事実、サンジカリストは、第一次大戦前に、アメリカやイギリスで、右翼的幹部が指導する職

業別労働組合に反対する少数の戦闘的な労働者をあつめて、世界産業別労働組合IWWという組合をべつにつくりました。それは、その名のとおり、労働者を産業別に組織して、戦闘的にたたかいましたが、大部分の労働者大衆は旧組合のなかにのこり、戦闘的な労働者からきりはなされてしまいました。ほんとうに労働者の一人一人を階級的に自覚させて、労働者階級運動をつよめていくためには、労働者大衆のいる場所で、その大衆に結びつき、大衆とともにたたかっていたといういかに、とくべつの、てっとり早い道などというものはないのであることを、この経験もおしえていたのです。そこで戦闘的活動家はできるかぎりふるい組合にとどまって、そこで民主主義的な方法で組合全体を階級的につよめるために活動すべきだということになりました。

組織人員は、国際労組連盟が一七七〇万であったものについて、プロフィンテルンは一七〇〇万で、両者の勢力はほぼおなじでした。

プロフィンテルンは、国際労組連盟とはちがって、資本主義をうちたおし、搾取と抑圧から労働者を解放するために、階級的立場にたつて、革命的にたたかうことを、組合員におしえました。また国際労組連盟とはちがって、植民地・半植民地諸国の労働組合運動をそだて、民族解放運動を育成することに注意をむけました。労働組合を産業別の組織原則にしたがって再編成するうえでも、それは大きな役割をはたしました。

職場や工場の中に、労働組合ができていくかいかないかにかかわりなく全労働者によって選出された職場委員会や工場評議会（工代会議——各工場の労働者の代表をあつめて、地域的につくられる）をつくって労働組合をほんとうに下部組合員のものにし、またストライキ闘争をやり易くするということをやったのも、このプロフィンテルンでした。

右翼日和見主義指導者に指導される国際労組連盟は、経済闘争と政治闘争をきりはなして、労働組合の闘争を経済闘争に限り、政治闘争は社会民主主義政党的の議院内での活動にまかせるという態度でした。これにたいして、プロフィンテルンは、経済闘争と政治闘争を正しく結合することをめざし、労働者階級の闘争全体を指導する革命党と労働組合との正しい協力関係をうちたてることに努力しました。

もつとも、こうした意図がいきすぎで、はじめプロフィンテルンは、コミンテルンとのあいだに執行委員を相互交換するなど、組織上の連携をつくりだすことをきめました。しかし、労働者階級の党組織であるコミンテルンと大衆団体である労働組合の連携機関としてのプロフィンテルンが、こうした関係をもつことは、正しいことではありませんでした。コミンテルンのプロフィンテルンにたいする指導の関係、一般的にいつて、党と労働組合との連携や党の組合にたいする指導の関係は、こうした組織的なむすびつきによるべきではなく、自主的な組織としてつくられた労働組合の組合員大衆の納得を基礎にしておこなわなければならないものです。そこで、一九

二二年、プロフィンテルンは、こうした誤りをただし、その後は、組織的にはコミンテルンとは関係のない、自主的な組織として活動をすすめるようになりました。

なお、第一次大戦後に労働運動が革命の高場をとげ、労働者階級の国際的組織が新たな発展をみせている時期の一九一九年一〇月、同じく戦後にできた国際連盟の機構の一部として国際労働機関ILOが組織されました。

国際連盟は、大戦における戦勝帝国主義国の手で、①プロレタリア革命を阻止し、②戦争でひびがはいった資本主義の政治・経済体制をつくろい、③戦勝帝国主義国が戦争で獲得した穫物を地固めする——ヴェルサイユ講和体制をかためる——ことを目的につくられたのですが、その一部としてつくられたILOは、とうぜん労働者の革命的行動を防止することを主な目的にしていました。それは、雇主、政府、労働者の各代表で構成されましたが、雇主側と政府側の代表がつねに多数をしめるようにできており、しかも労働者代表も、自国の政府の承認をうけなければならぬのです。

ILOは、こうして、いつも雇主と政府の代表——つまり独占資本の代表が支配・統制するなかで、労働日の短縮、婦人・年少労働者の保護、社会保障などの問題をとりあげ、彼らがゆるせる範囲内でこれらの問題に関連した条約や勧告を採択しました。国際連盟は、第二次大戦でなくなりましたが、その一部であったILOは、国連の一部門として第二次大戦後も生きのこり、今

日まで存続しています。いまジュネーブに本部をおいているILOが、それです。

### この章のまとめ

この章では、第一次大戦とロシア革命のちに革命的闘争が全世界的に高揚するなかで、コミンテルンとプロフィンテルンが創立され、また第二インターナショナルと国際労働組合連盟が復活してきたことについて、主としてのべました。

ところで、このときくらい、国際労働者階級の運動には、分裂が、組織的なかたちで表面化してきました。このことは、労働運動にとって前進であったのでしょうか、後退であったのでしょうか。抽象的に考えるならば、労働運動は統一していた方がよく、分裂をのぞむ者は、少なくとも労働者階級の立場にたつて考える者の中にはないはずです。しかし問題は具体的に考える必要があります。

第一次大戦が勃発するまでの時期には、第二インターナショナルと国際労働連にヨーロッパとアメリカの労働運動が統一されているようにみえました。しかしこの統一は、ほんものの階級的・革命的な統一ではなく、指導部はじつは日和見主義者に握られていました。そして第一次大戦が勃発するまでの時期に、これらの指導者は帝国主義によってまったく腐敗させられ、大戦勃発と同時にこれらの組織を分裂させてしまったのです。

第一次大戦後コミンテルンと第二インタナショナル、共産主義政党と社会民主主義政党、プロフィンテルンと国際労組連盟というように、労働者階級の組織が分裂し対立するようになったのは、第二インタナショナルからコミンテルンが、社民党から共産党が、国際労連からプロフィンテルンが分裂したからではありません。そうではなくて、第二インタナショナルや国際労連、各国の社会民主党や労働組合の右翼日和見主義幹部がプロレタリアートの国際的団結と階級的立場を裏切るようになったからでした。そして、コミンテルンやプロフィンテルンがつくられたのは、真に階級的立場にたつて、労働者階級の団結を一国内においても国際的にも回復し強化していくためだったのです。

だから、コミンテルンは、各国に真に革命的で国際主義的な立場にたつ共産党を確立すると、こんどは、労働者階級と人民の戦線を統一するための、統一行動と統一戦線の問題にとりくみはじめました。またプロフィンテルンは、国際労組連盟に対立した国際労働組合組織の形をとらなかつたのです。

《参考文献》

- 1 ソヴェト大百科事典「インタナショナル小史」(国民文庫)

- 2 レーニン「共産主義における『左翼』小児病」(国民文庫)
- 3 レーニン全集二九卷 第三インタナシヨナルとその歴史上の  
地位(大月書店)



なか ばやし けん じ ろう  
中 林 賢 二 郎

1919年 横浜市に生まれる

1944年 東京帝国大学文学部卒

現 在 東京都立大学講師

法政大学大原社会問題研究所所員

・主な著書・

「世界の労働運動史」(「講座 社会科学の基礎」  
第2巻 青木書店)・「社会主義世界と日本」(講  
座 現代 第3巻「社会主義世界の形成」岩波書  
店)・「独占資本主義国に於ける労働者階級の運  
動」(同講座第11巻「現代の民衆」)・「統一と団結」  
(労働者教育協会)・J・キャンベル「新資本主  
義の幻想」(合同出版)

検印省略

## 世界労働運動の歴史 (上)

発行日	昭和40年7月31日 第一版発行 昭和40年10月15日 第二版発行
著者	中 林 賢 二 郎
発行者	木 檜 哲 夫
発行所	労働旬報社 東京 都港区芝西久保巴町32 電話 (434) 3681-5 振替東京 180374
装 幀	楠 原 義 一
印刷所	東 銀 座 印 刷 出 版
製 本 所	萩 原 製 本

定価 360円

## 第八章 相対的安定期の労働運動

資本主義の「相対的安定」の達成

相対的安定期における社会民主主義者の右翼化

安定期における闘争

中国労働運動の成立

中国革命の進展

日本労働運動の確立

## 第九章 反ファシズム統一戦線と反帝民族統一戦線

世界恐慌の到来とファシズム

ドイツにおけるファシズム独裁の樹立

フランス労働者の統一行動

コミンテルン第七回大会と反ファシズム統一戦線

フランス人民戦線内閣の成立

スペイン人民戦線政府の成立

# 第一〇章 アジアとその他の地域における統一戦線

中国における革命根拠地の建設

中国の抗日民族統一戦線

朝鮮の運動の成長

朝鮮の反日民族統一戦線

日本の労働者階級と反ファシズム統一戦線

アメリカ大陸での統一戦線運動

## 第十一章 第二次世界大戦の時期の労働者階級の

たたかいと世界労連の結成

第二次大戦への道

第二次世界大戦中の労働運動

中国における抗日戦争

朝鮮における反帝・反戦闘争

ベトナム人民のたたかい

インドネシア人民のたたかい

大戦中における労働者階級の国際諸組織の動向

世界労連の結成

## 第一二章 第二次大戦直後の時期の労働運動

戦争直後の情勢

ヨーロッパの人民民主主義革命

中国革命の勝利

朝鮮民主主義人民共和国の成立

ベトナム民主共和国を守る闘いとインドネシアなどの運動の高揚

フランス・イタリア・日本などでの労働運動の高揚

## 第一三章 冷戦政策と労働戦線の分裂

アメリカの冷戦政策

分裂工作の進展

世界労連の分裂と国際自由労連の設立

分裂の結果

統一行動の実現をめざして

## 第一四章 全般的危機の新しい段階と現在の

### 世界労働運動

全般的危機のいっせいのふかまり

全般的危機の新しい段階

植民地と新たに独立した諸国の労働者の闘い

キヌーバ革命

インドネシアの民族統一戦線

南ベトナム解放闘争

資本主義諸国の労働者の広範で戦闘的な闘い

発達した資本主義国の労働者のアメリカ帝国主義と独占資本に対する闘い

階級協調主義・改良主義の基礎の弱体化

発達した資本主義国の労働者の階級的統一の強化

国際労働組合運動の統一の前進

## 終章

資本主義によつてつくりだされ、組織され、結集され、教育され、啓蒙され、きたえられた特定の歴史的階級であるプロレタリアート

世界労働運動の発展段階

アジアと日本の労働者階級の重要な役割

労働者階級の任務と現代修正主義

世界労働運動の歴史の教訓

資料

世界労働運動史略年表

沼田稻次郎著 運動のなかの労働法 一、二〇〇円

戸木田嘉久著 現代の合理化と労働運動 九八〇円

大原社会問題研究所編 太平洋戦争下の労働運動 A5上製函入 近刊

日本労働組合総評議会編 総評十年史 A5上製函入 二、五〇〇円

日本炭鉱労働組合編 炭労十年史 A5上製函入 三、二〇〇円

塩田庄兵衛著 日本労働運動の歴史 四五〇円

塩田庄兵衛著 弾圧の歴史 三五〇円

渡辺洋三著 安保体制と憲法 四二〇円



